

都市計画道路天神一の谷線道路改良事業地内

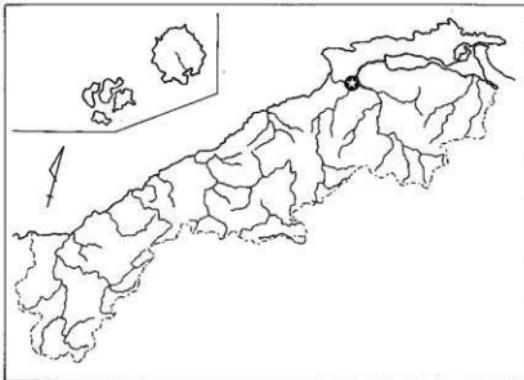
角田遺跡第3次発掘調査報告書

2004年3月

出雲市教育委員会

都市計画道路天神一の谷線道路改良事業地内

角田遺跡第3次発掘調査報告書



角田遺跡の位置

2004年3月

出雲市教育委員会

序

出雲市教育委員会では、平成13年度から平成14年度にかけて都市計画道路天神一の谷線道路改良事業地内に所在する角田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査を実施した出雲市塩冶地区は、上塩冶築山古墳や上塩冶横穴墓群に代表されるように出雲市内でも最も埋蔵文化財が密集する地域です。しかし、近年は開発の波にさらされ、遺跡の消滅が進行している地域もあります。

角田遺跡は、これまで開発に伴って2度の発掘調査が実施されてきましたが、今回の第3次発掘調査によって、遺跡の範囲がさらに東方に広がりをもつとともに、弥生時代から近世に至るまでの遺構が多数検出され、時代的にも多岐にわたる複合集落遺跡であることが明らかとなっていました。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたり、ご理解とご協力を賜りました地元のみなさまをはじめ、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

平成16年3月

出雲市教育委員会

教育長 加藤武行

例 言

1. 本書は、都市計画道路天神一の谷線道路改良事業に伴い、出雲市教育委員会が平成13年度から14年度にかけて実施した角田遺跡発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成13年(2001)8月6日～平成15年(2003)1月6日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市上塩治町1460-1ほか

4. 調査は、次の組織で行った。

平成13年度

〔調査指導者〕足立 克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、原田 敏照（同 文化財保護主事）

〔事務局〕川上 稔（出雲市役所文化財室 室長）

〔調査員〕米田美江子（出雲市役所文化財室 主任嘱託員）、錦田 充子（同 臨時職員）

平成14年度

〔調査指導者〕広江 耕史（島根県教育委員会文化財課主幹）、原田 敏照（同 文化財保護主事）

〔事務局〕川上 稔（出雲市役所文化財室 室長）

〔調査員〕岸 道三（出雲市文化財室 副主任主事）、米田美江子（同 主任嘱託員）

佐藤 瞳子（同 臨時職員）、錦田 充子（同 臨時職員）

平成15年度

〔調査指導者〕広江 耕史（島根県教育委員会文化財課主幹）、原田 敏照（同 文化財保護主事）

〔事務局〕川上 稔（出雲市役所文化財室 室長）

〔調査員〕岸 道三（出雲市役所文化財室 主任主事）、佐藤 瞳子（同 臨時職員）

5. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SK・・・土坑 SD・・・溝状遺構 SB・・・掘立柱建物跡

6. 本書で使用した方位は磁北を示す。

7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸、米田、錦田、佐藤が行った。

9. 本書の執筆、編集は、上記の方々の協力を得て岸が行った。

10. 調査にあたっては、地元の方々から多大な協力を得た。記して謝意を表します。
11. 石器の石材鑑定については、山本順三（（財）田部美術館学芸員）が行った。
12. 地質分析については、文化財調査コンサルタント㈱に委託して行った。また、地質分析の結果については、同社の渡辺正巳氏に玉稿を賜った。
13. 鉄滓の分析調査については、（財）安来市体育文化振興財団に委託して行った。また、分析結果については、同財団の村川義行氏に玉稿を賜った。
14. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々にご指導、ご協力を賜った。
田中 義昭（島根考古学会会長）、山田 康弘（島根大学法文学部助教授）
中村 唯史（島根県立三瓶自然館指導員）
15. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。
長島 節子 渡部 政義 高根 常代 飯国美代子 稲村 玉枝 小室 和子
今岡 勝美 藤原 一男 塚原 立之 吉田 栄 藤原 和明 青木 卓雄
中村 孝司 片山 修 石橋 弥生 勝部 武夫 原 昇 有田 俊夫
吾郷園生子 青木 孝 板倉 悅夫 白築 正造 落合 哲夫
16. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。
矢野 愛子 石川 桂子 森山 博美 井上喜代女 村田 理恵 遠藤 恭子
鞠口 令子 水田 節子 吹野 初子 岡 幸子

本文目次

序

例言

本文目次

挿図目次

I. 調査に至る経緯.....	1
II. 位置と環境.....	3
III. 54Gr ~ 63Gr の発掘調査	
1. 発掘調査の概要.....	7
2. 遺構と遺物.....	13
3. 小結.....	38
出土遺物観察表	
IV. 1Gr ~ 53Gr の発掘調査	
1. 発掘調査の概要.....	45
2. 遺構と遺物.....	54
3. 小結.....	132
V. 自然科学分析.....	135
VI. 総括.....	145
図版 5Gr ~ 53Gr の調査	図版 1 ~ 図版 12
54Gr ~ 63Gr の調査	図版 13 ~ 図版 33

挿図目次

I. 調査に至る経緯

- 第1図 試掘トレーン位置図 1
第2図 試掘トレーンチ堆積土層図 1

II. 位置と環境

- 第3図 角田遺跡周辺の遺跡 3

III. 54Gr ~ 63Gr の発掘調査

- 第4図 59Gr ~ 63Gr 遺構配置図 9-10
第5図 54Gr ~ 59Gr 遺構配置図 11-12
第6図 SD31 実測図 13
第7図 SD31 出土遺物実測図 14
第8図 SD34 実測図 15
第9図 SD34 出土遺物実測図 16
第10図 SD22・SD37 実測図 17
第11図 SD30 実測図 18
第12図 SD32・SD35 実測図 19
第13図 SK29 実測図 20
第14図 SK29 出土遺物実測図 20
第15図 SK31 実測図 21
第16図 SK31 出土遺物実測図 21
第17図 SK35 実測図 22
第18図 SK35 出土遺物実測図 22
第19図 土坑状遺構実測図(1) 23
第20図 土坑状遺構実測図(2) 25
第21図 ピット状遺構実測図 26
第22図 遺構内出土遺物実測図(1) 30
第23図 遺構内出土遺物実測図(2) 32
第24図 遺構外出土遺物実測図(1) 34
第25図 遺構外出土遺物実測図(2) 36
第26図 遺構外出土遺物実測図(3) 37
第27図 出土古錢実測図 37

IV. 5Gr ~ 53Gr の発掘調査

- 第28図 5Gr ~ 8Gr 遺構配置図 46
第29図 11Gr ~ 41Gr 遺構配置図 47-48
第30図 43Gr ~ 53Gr 遺構配置図 49-50
第31図 11Gr ~ 53Gr 堆積土層図(1) 51
第32図 11Gr ~ 53Gr 堆積土層図(2) 52
第33図 11Gr ~ 53Gr 堆積土層図(3) 53
第34図 旧河道遺物出土状況実測図(1)
..... 55-56
第35図 旧河道遺物出土状況実測図(2) 57
第36図 旧河道出土遺物実測図(1) 58
第37図 旧河道出土遺物実測図(2) 61
第38図 旧河道出土遺物実測図(3) 63
第39図 旧河道出土遺物実測図(4) 65
第40図 旧河道出土遺物実測図(5) 67
第41図 旧河道出土遺物実測図(6) 69
第42図 旧河道出土遺物実測図(7) 70
第43図 旧河道出土遺物実測図(8) 71
第44図 旧河道出土遺物実測図(9) 73
第45図 旧河道出土遺物実測図(10) 74
第46図 SD01 実測図 75
第47図 SD01 出土遺物実測図(1) 77
第48図 SD01 出土遺物実測図(2) 79
第49図 SD01 出土遺物実測図(3) 80
第50図 SD01 出土遺物実測図(4) 81
第51図 SD03 実測図 82
第52図 SD03 出土遺物実測図 83
第53図 SD06 実測図 84
第54図 SD06 出土遺物実測図(1) 85
第55図 SD06 出土遺物実測図(2) 87
第56図 23Gr ~ 31Gr 溝状遺構実測図 89-90
第57図 SD07 出土遺物実測図 91
第58図 SD15 ~ SD17 実測図 92

第 59 図 SD20 出土遺物実測図	93	第 94 図 Pit 内出土遺物実測図 (1)	121
第 60 図 SD21 出土遺物実測図 (1)	95	第 95 図 Pit 内出土遺物実測図 (2)	123
第 61 図 SD21 出土遺物実測図 (2)	96	第 96 図 遺構内出土石器実測図 (1)	125
第 62 図 SD22 実測図	97	第 97 図 遺構内出土石器実測図 (2)	125
第 63 図 SD25・SD26 実測図	98	第 98 図 遺構内出土石器実測図 (3)	127
第 64 図 SD23～SD26・SD28 出土遺物実測図	99	第 99 図 遺構外出土遺物実測図 (1)	129
第 65 図 溝 1～溝 4 出土遺物実測図	101	第 100 図 遺構外出土遺物実測図 (2)	131
第 66 図 SK05 実測図	102	第 101 図 遺構外出土遺物実測図 (3)	133
第 67 図 SK05 遺物出土状況実測図	103		
第 68 図 SK05 出土遺物実測図 (1)	103		
第 69 図 SK05 出土遺物実測図 (2)	104	V. 自然化学分析	
第 70 図 SK05 出土遺物実測図 (3)	105		
第 71 図 SK05 出土遺物実測図 (4)	106	第 102 図 試料採取地点位置図	138
第 72 図 SK05 出土遺物実測図 (5)	107		
第 73 図 SK07 実測図	107		
第 74 図 SK07 遺物出土状況実測図	108		
第 75 図 SK07 出土遺物実測図 (1)	109		
第 76 図 SK07 出土遺物実測図 (2)	110		
第 77 図 SK08 実測図	111		
第 78 図 SK08 出土遺物実測図	111		
第 79 図 SK09・SK10 実測図	112		
第 80 図 SK10 出土遺物実測図	113		
第 81 図 SK11 実測図	113		
第 82 図 SK11 出土遺物実測図	114		
第 83 図 SK13 実測図	114		
第 84 図 SK13 出土遺物実測図	114		
第 85 図 SK16・SK17 実測図	115		
第 86 図 SK16・SK17 出土遺物実測図	116		
第 87 図 SK18 実測図	116		
第 88 図 SK18 出土遺物実測図	116		
第 89 図 SK20 実測図	117		
第 90 図 SK20 出土遺物実測図	117		
第 91 図 SK21 実測図	118		
第 92 図 SK24 実測図	119		
第 93 図 SK24 出土遺物実測図	120		

I. 調査に至る経緯

I. 調査に至る経緯

平成12年(2000)10月24日、出雲市都市計画課より都市計画道路天神一の谷線道路改良事業地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。当該予定地(延長190m)は、周知の遺跡である角田遺跡の範囲内であるとともに、平成8年(1996)に圃場整備事業に伴って発掘調査を実施していることから、発掘調査の必要があると判断した。

また、平成13年(2001)1月15日、天神一の谷線道路改良事業についてさらに東へ150m延長することについて都市計画課と協議し、事業予定地の東側については試掘調査によって遺跡の有無を確認することにした。

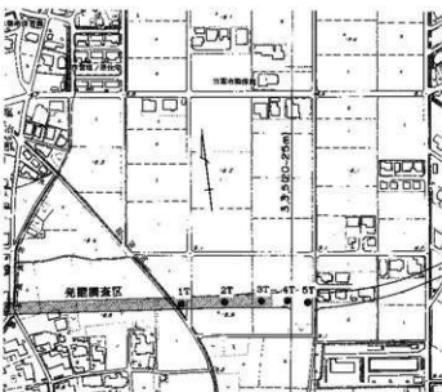
試掘調査は同年3月23日と27日の2日間、5ヵ所のトレンチを設定して実施した(第1図)。その結果、第1トレンチから第3トレンチにおいて遺構や中世土師器を中心とする遺物が検出されたことから、遺跡が存在していることが確認された。

なお、第4トレンチ、第5トレンチにおいては、遺構・遺物とも確認されなかつたため、遺跡としては第3トレンチ以西に広がりをもつものと予想された。

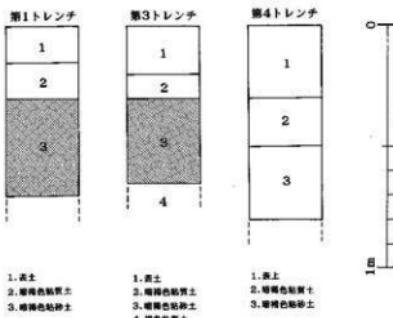
各トレンチでの堆積土を第2図に示しているが、いずれのトレンチにおいても水田耕作土の下面には暗褐色粘質土、暗褐色粘砂土と堆積している。このうち暗褐色粘質土が遺物包含層となっており、中世土師器を中心とした遺物が出土している。

試掘調査の結果から、出雲市都市計画課と協議を重ね、第1トレンチから第3トレンチにかけての全長約310mの区域を発掘調査対象とし、調査を平成13年(2001)8月から実施することを確認している。

発掘調査に至る手続きについては、事業者である出雲市からは、同年6月12日付で埋蔵文化財発掘の通知(同法第57条の3)が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の報告(同法第58条の2)を同年7月3日付で島根県教育委員会教育長宛提出している。



第1図 試掘トレンチ位置図



第2図 試掘トレンチ堆積土層図

発掘調査は、平成 13 年(2001)7 月から準備を進め、8 月 6 日から開始した。調査面積は、平成 13 年度が道路拡幅部分で南側幅 4m、北側が幅 1m、長さ約 150m で約 750m² である。平成 14 年度の調査では道路敷設部分の幅 10 m × 115m の約 1,150m² であり、総発掘面積は約 1,900m² である。

各調査区では、試掘調査によって確認された包含層までを重機によって取り除いたのち、発掘調査を開始した。そして、水処理や冬の寒さに悩まされながらも、平成 15 年(2003)1 月 6 日に調査を終了している。その間、平成 14 年(2002)3 月 16 日と同年 12 月 21 日には角田遺跡発掘調査の現地説明会を開催している。

なお、調査終了後には埋蔵文化財発見届(遺失物法第 13 条)、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、鳥根県教育委員会に提出している。

註

- (1) 「出雲市埋蔵文化財調査報告書第 8 集」「角田遺跡」 出雲市教育委員会 1995 年

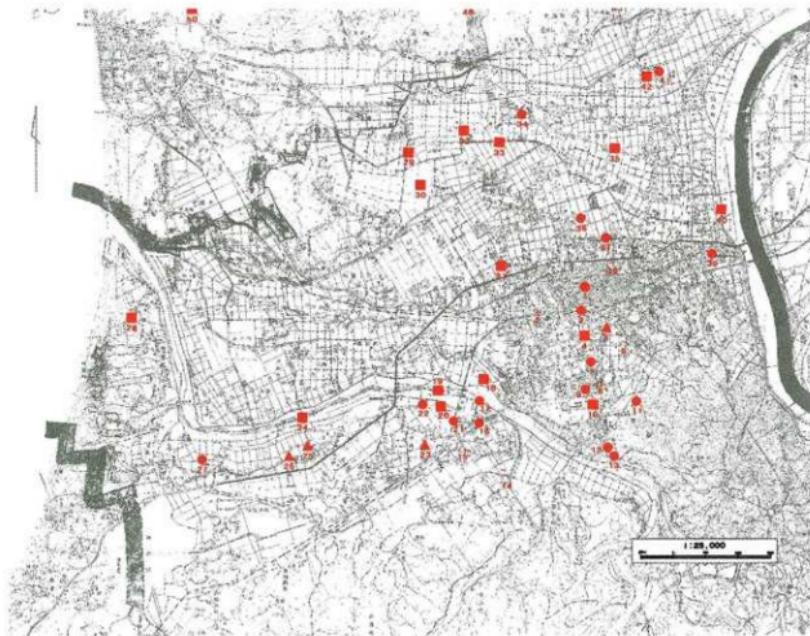
II. 位置と環境

II. 位置と環境

(1) 遺跡の位置 (第3図)

角田遺跡は、出雲平野のはば中央、出雲市上塩治町揚松及び宮松地区に所在している。付近はこれまで田園の広がる地域であったが、JR出雲市駅の南わずかに500mという立地から、駅南地区区画整理事業により日々開発の波にさらされている状況である。

遺跡の現況は宅地と水田であるが、南北約400m、東西約340mのやや南北に長い範囲に遺物の散布が確認されている。出雲平野のうち、斐伊川左岸では帯状に伸びる微高地が現在でも宅地や畠地として利用されている。この地形は旧自然堤防と呼ばれるもので、角田遺跡もおそらく神戸川によって形成された旧自然堤防上に立地するものと考えられる。



1. 角田遺跡
2. 神門寺境内墓群
3. 上塩治築山古墳
4. 筏山遺跡
5. 上塩治横穴墓群
6. 大井谷遺跡
7. 地藏山古墳
8. 半分城跡
9. 半分古墳
10. 三田谷遺跡
11. 光明寺古墳群
12. 岗山古墳群
13. 小坂古墳
14. 栗柄城跡
15. 泽土寺山城跡
16. 放丸山古墳
17. 大堤古墳
18. 古志木道遺跡
19. 下古志遺跡
20. 田畑遺跡
21. 妙蓮寺山古墳
22. 宝塚古墳
23. 地藏堂横穴墓群
24. 知井宮多聞院遺跡
25. 福知寺横穴墓群
26. 小浜山横穴墓群
27. 山地古墳
28. 上長浜貝塚
29. 井原遺跡
30. 白枝荒神遺跡
31. 天神遺跡
32. 矢野遺跡
33. 小山遺跡
34. 大塚遺跡
35. 中野美保遺跡
36. 塚山古墳
37. 今市大念寺古墳
38. 平家丸城跡
39. 西谷墳墓群
40. 斐伊川鉄橋遺跡
41. 荻秆古墳
42. 中野西遺跡
43. 山持川川岸遺跡
44. 勝瀬山古墳群
45. 大寺古墳
46. 平林寺山古墳
47. 霧ヶ峯城跡
48. 石臼古墳
49. 菱根遺跡
50. 原山遺跡
51. 出雲大社境内遺跡

第3図 角田遺跡周辺の遺跡

角田遺跡が所在する周辺には、南には大集落遺跡と推定されている宮松遺跡のほか、国指定史跡である上塩治築山古墳、上塩治地蔵山古墳など県下を代表する古墳時代後期の横穴式石室墳があり、特に古墳時代後期になってから大きな経済力を基盤とした政治勢力の台頭がみられる。さらに西方には天神遺跡、高西遺跡など、弥生時代の拠点集落と目される遺跡が営まれるほか、北方には近年の開発によって中世を中心とする藤ヶ森Ⅰ遺跡、Ⅱ遺跡などが相次いで発見されている。

(2) 歴史的環境

出雲平野を取り巻く地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して入海のような状況を呈していた潟湖(現在の神西湖)に注いでいたようである。そして、斐伊川が西流していた当時は、神門水海の北方に注いでいたようである。

このような地形のもと、角田遺跡は神戸川が南部丘陵から入海へと注ぐ平野への入口付近に位置する旧自然堤防上に立地していたものと考えられる。

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある菱根遺跡(大社町)、西の砂丘下にある上長浜貝塚が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前末期から中期にかけての上ヶ谷遺跡(斐川町)が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原山遺跡(大社町)が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡、平野中央部の矢野遺跡・蔵小路西遺跡などからも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡(湖陵町)などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など集落を囲繞する環濠を有する大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。

また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60m近くもある3号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。そして、近年の発掘調査によって、平野部の中野美保遺跡や青木遺跡からも四隅突出型墳丘墓が発見され、集落と墓域の関係などを考えるうえで注目されている。

古墳時代になると、これまで弥生時代中期中葉から形成された大規模集落がほぼ同時期に急激に衰退する傾向が認められ、この時期に畿内勢力の進出など、大きな社会的変革があったことが考えられている。そうした中で、出雲平野には古墳時代中期の遺跡はほとんど確認されていないのが現状であった。しかし、近年の発掘調査によって、今まで空白とされてきた当該期の遺跡が相次いで発見されている。

斐伊川左岸の南部丘陵地には三谷遺跡や長廻遺跡が所在し、古墳時代中期の土坑や竪穴式住居跡などが確認され、神戸川右岸の南部丘陵地にも三田谷Ⅰ遺跡から多量の遺物とともに竪穴住居跡などが確認されている。また、平野部でも中野美保遺跡や中野西遺跡からは土坑などの遺構に伴って古墳時代中期の遺物が確認され、平野の北に位置する井原遺跡でも当該期の多量の遺物とともに溝や井戸、ピットなどの遺構が確認されている。

また、当該期の古墳としては、北山山脈に大寺古墳や上島古墳（平田市）が築造されるほか、神門水海に近い南部丘陵地には北光寺古墳、県内では類例の少ない筒型銅器を副葬し、内海航路を押された首長の墓と目される山地古墳などが築造される。

古墳時代後期後半には、今市大念寺古墳・上塩治築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塩治横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺など私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓のほか、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、古墳から火葬墓への過渡期の様子が明らかになりつつある。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、出雲大社境内遺跡から平安時代から中世にかけての出雲大社の壮大さを示す3本を束にした柱跡が確認されている。そのほか、矢野遺跡からは14～15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、藏小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

(3) これまでの発掘調査

角田遺跡では、これまでに2回の発掘調査が行われている。

楊松地区第3工区圃場整備事業に伴う発掘調査（第1次発掘調査、1970年）

出雲高等学校社会部考古班の生徒を中心に水路設置部分について発掘調査が実施されている。調査では、径80cm、深さ30cmほどの土坑1基が検出され、土坑上面には土師器壺、甕、壺のほか須恵器直口壺、壺蓋が集中して出土している。これらは意識的に置かれたように出土し、さらに土師器壺には内外面ともに赤色塗彩を施されていたことから供獻用の土器群と考えられ、この土坑も墓壙である可能性が強いものとされている。時期的には山陰の須恵器編年Ⅳ期に該当し、7世紀初頭頃の遺構と推定されている。

宮松地区圃場整備事業に伴う発掘調査（第2次発掘調査、1996年）

出雲市教育委員会によって道路敷設部分について発掘調査が行われている。調査では第1次調査で確認された古墳時代の遺構は認められず、奈良時代から近世にかけての遺構が検出されている。なかでもB区では奈良時代と考えられる曲物を伴う木枠組みの井戸が検出され、完形の須恵器長頸

壺が出土している。また、わずかながら繡の羽口や鉄滓、古瓦などの特異な遺物が出土しており、付近に鍛冶関連施設や古代寺院が存在した可能性が指摘されている。また、弥生土器や凹石などの遺物も出土しており、時代的にも遺跡の複合性が指摘されている。

註

- (1)『出雲市埋蔵文化財調査報告書第5集』「角田遺跡」 出雲市教育委員会 1995年
- (2)『出雲市埋蔵文化財調査報告書第8集』「角田遺跡」 出雲市教育委員会 1998年

III. 54Gr ~ 63Gr の発掘調査

III. 54Gr ~ 63Gr の発掘調査

1. 発掘調査の概要

調査地は途中既設用水路が南北に通っているために分断されているが、これまででは水田として利用されていた地域である。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの水田耕土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北とも 5m 間隔のグリッドを設定し、西から B54Gr ~ B63Gr、C54Gr ~ C63Gr とした。調査面積は、東西約 60m、南北約 10m の約 600 m² である。なお、水処理のために調査区南側には約 20cm の幅で側溝を設定した。調査は平成 14 年(2002)11月 5 日に開始し、平成 15 年(2003)1 月 6 日に終了している。

層序 (第 4 図・第 5 図)

調査区が東西に長いため、堆積土は一様ではなく、若干異なった様相を示している。59Gr に位置する既設用水路の東側における基本的な層序は、耕作土を除くと上層から赤褐色土、淡褐色土、褐色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達する。このうち西側で認められる淡褐色土は黄灰色土に、褐色土は暗褐色土にそれぞれ対応するものと考えられる。いずれも堆積土中に、褐色粒子を多く含んでいることが特徴である。

一方、既設用水路を挟んで西側では 56Gr 付近を境にして複雑な層序を示しており、東西でかなり異なっている。56Gr 以東の基本的層序は、耕作土を除くと上層から褐灰色土、灰褐色土、灰褐色粘質土、暗褐色土と堆積し、基盤層である黄褐色砂質土へと達する。また、56Gr 以西においては上層から褐灰色土、灰色土、暗灰色粘質土と堆積し、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。このうち、灰色土は灰褐色粘質土、暗灰色粘質土は暗褐色土にそれぞれ対応するものと考えられる。なお、堆積土中には褐色粒子を多く含んでいる。既設用水路以東の堆積土と比べると、粘質土が広く堆積するとともに、基盤層である黄褐色砂質土が西側に向かって粒子が粗くなるという特徴がある。

遺構はすべて黄褐色砂質土の上面で検出しており、この面から時期の異なる遺構が検出されていることから、黄褐色砂質土の上層に堆積する前の段階で削平を受けているものと考えられる。

遺構 (第 4 図・第 5 図)

遺構は溝状遺構 7、土坑状遺構 17 のほかピット状の遺構を多数検出しており、検出数は 1,000 を超える。遺構が築かれた時期は、12~13世紀頃にかけての中世の遺構を中心であるが、中には奈良~平安期、古墳時代の可能性を示す遺構もあり、近世のものも含めて時代的にも多岐にわたっている。

溝状遺構は、そのほとんどが中世の建物跡の区画を示すもので、なかには掘り直しとみられる SD34 などもある。また、建物跡の区画を示す溝状遺構の基軸は、西北西~東南東、南南西~北北東を向く傾向にあり、この区画の中に中世庶民クラスの建物が配置されていたものと考えられる。SD22 や SD31 については建物跡の区画を示す溝とは性格を異にするもので、水路的な機能を有していたものと考えられ、このうち SD22 については遺物が皆無であり時期的な判断は難しいが、切合関係より調査区の中でも最も古い時期に築かれた遺構と考えられる。

土坑状遺構には、井戸跡と考えられるものや土壙墓と考えられるものがある。SK28 や SK33、SK39 などは井戸跡と考えられるもので、平面プランは円形または橢円形を呈し、下層では木片が多

く認められる。SK39 では壁面に杭を立てて崩れにくくしているとともに、曲物の一部も検出されている。これらの井戸跡は時期的にはその出土遺物から 12～13 世紀を中心とするものである。

土壙墓と考えられる遺構には、SK29 や SK31 などがある。平面プランは長方形を呈し、深さが 80cm～1.0m 程度のものである。SK29 では 9～10 世紀頃、SK31 では 12～13 世紀頃の遺物が出土している。

ピット状遺構は多数検出しているが、この中には柱根が残存しているものが 10 基余り検出されている。これらは建物跡の一部と考えられるが、調査区が狹小なこともあり明確な配置はとはならず、しかも何回もの建て直しが行われたものと考えられる。その他のピット状遺構については出土遺物も少なく、遺構としての性格は不明である。

遺 物

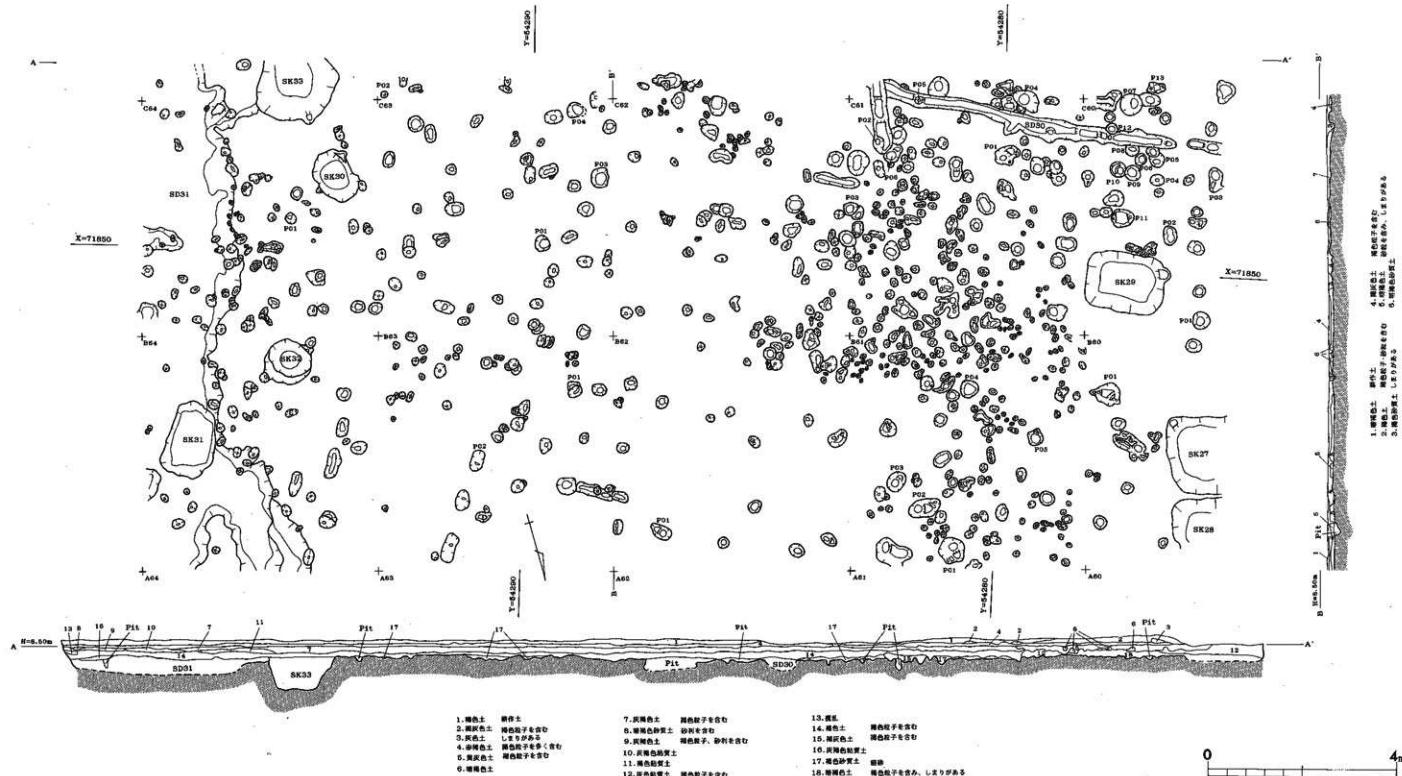
遺物は基盤層である黄褐色砂質土上面に堆積しているすべての層に包含しており、中世土師器を中心として弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器などのほか石器、木製品、鉄製品も出土している。小片が多く、出土量はコンテナ 5 箱分と比較的少ない。

59Gr 以東では、黄褐色砂質土上面に堆積する褐色土が安定した遺物包含層になっている。遺構内からの出土量は少ないが、SD31 や SK29 などからは時期的な判断のできる比較的良好な資料を検出している。一方、59Gr 以西においては、暗灰色粘質土、暗褐色土が安定した遺物包含層となっている。遺物は、全体を通してその大部分が 12～13 世紀頃に相当する資料であり、遺跡の中心時期も当該期にあることは明らかである。

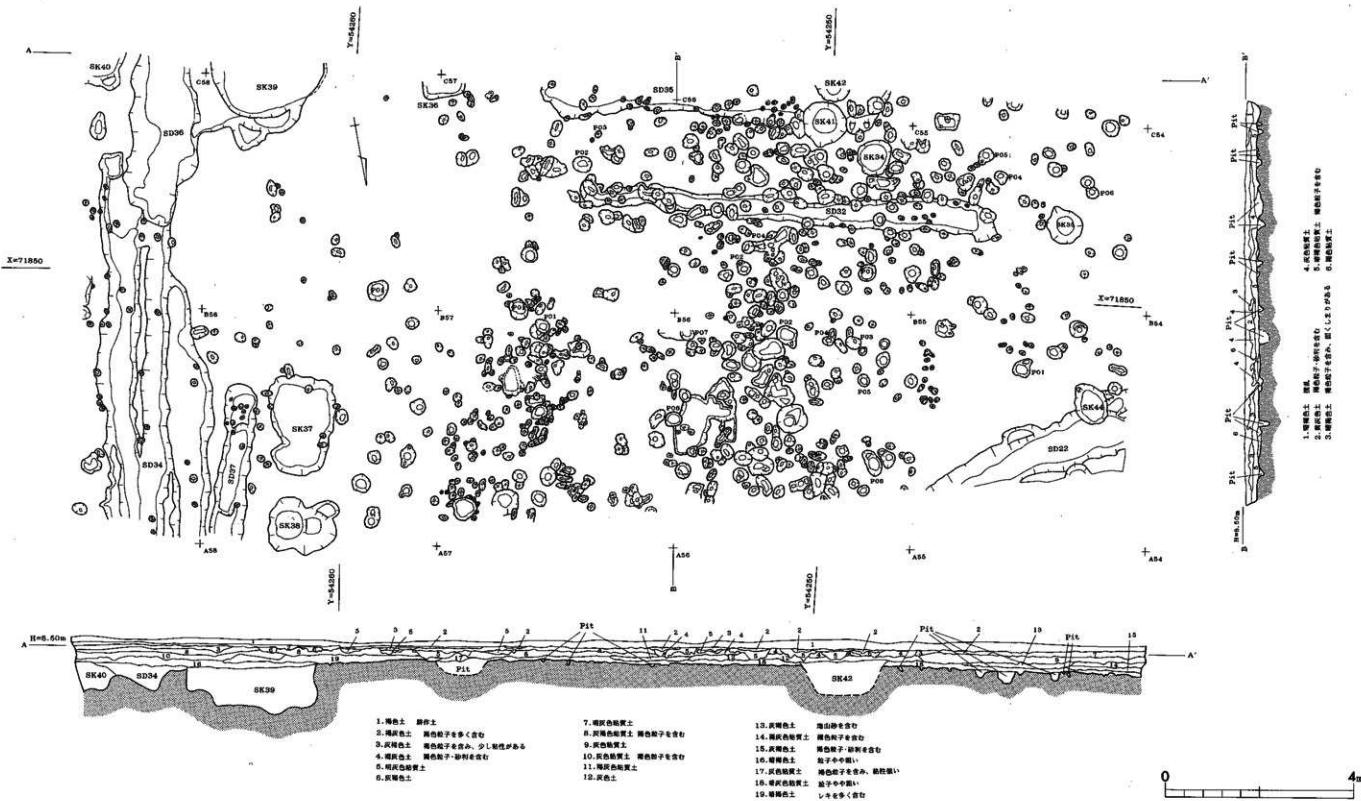
中世の遺物は最も多く出土しており、土師器坏、小皿などが多く出土している。そのほか特異な遺物としては、古瓦や鉄滓がある。古瓦は、内面に布目圧痕を有するもので、この周辺に古代から中世期にかけての寺院の存在を窺わせるものである。また、鉄滓は分析の結果、鍛冶精錬滓と推定され、この集落内に鍛冶関連施設が存在したことを窺わせる資料である。

奈良時代から平安時代にかけても、土師器や須恵器がわずかながら検出されている。SD31 や SK29 からは当該期の遺物が出土しており、この時期にもわずかながら生活の跡を窺うことができる。

最も古い時期の遺物としては、SD33 から弥生時代後期の甕片が出土している。当該期の明確な遺構は調査区内では認められないものの、南に位置し、大規模な集落跡と考えられている宮松遺跡との関連が注意される。



第4図 59Gr～63Gr 造構配図



第5図 54Gr ~ 59Gr 造構配図

2. 遺構と遺物

SD 31 (第6図)

調査区の東端、地山である黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南南西—北北東方向を基軸として伸びている。北側と南側、東側は調査区外へと達し、南側で中世期の井戸跡と考えられるSK33によって一部切られている。

検出した状況では、検出長 10.8m、最大幅 3.6m を測る。なお、検出高は標高 8.38m である。

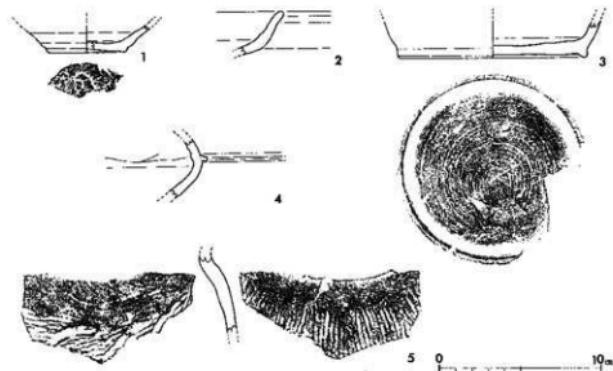
覆土には上層に褐色粒子を含む灰褐色土や暗灰色土、下層には同じく褐色粒子を含む黒褐色土や青灰色土が堆積し、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは 28cm を測る。なお、東側は調査区外へと達しているが、断面の形状から推察すれば、本来は幅が 7.0m 程度の溝状遺構であると推察される。

遺物は少量で細片のものが多いが、奈良時代から平安時代初期頃にかけての須恵器壊や壺などが出土している。このことから、遺構が築かれた時期は 8 ~ 9 世紀頃である可能性が強い。

遺構の機能については判断し難いが、覆土には粘質土の堆積が認められないことから、常時耐水していた状況とは考えにくい。なお、SD31 は 12 ~ 13 世紀頃の遺構である SK31 とも切合関係にある。



第6図 SD31 実測図



第7図 SD31出土遺物実測図

SD 31 の出土遺物（第7図）

1は、土師器壺である。内外面ともナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2は、土師器壺あるいは高杯であろう。内外面とも朱塗りされ、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。3は、須恵器の高台付壺である。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、やや外側に向て短い高台が付くものである。4は、須恵器壺の胴部付近の破片であろう。突窓を貼り付け、内外面ともにナデによる調整が行われている。5は、須恵器壺の頸部付近の破片である。自然釉が残る外面はタタキ、内面には筋状の當て具痕が認められる。

これらの遺物は、1がやや新しい様相をもつものではあるが、およそ奈良時代から平安時代初期頃に相当する資料と考えられる。

SD 34（第8図）

58Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南南西—北北東方向に伸びている。南北とともに調査区外へと達しており、南側では新しい時期に築かれた溝状遺構であるSD36と切合関係にある。また、SD34は遺構のほぼ中央に高まりをもち、2つの溝が重なり合うような状況で検出されている。上部が削平されていることから2つの溝の新旧関係は明らかではないが、どちらかが掘り直しの溝である可能性をもつものである。

検出した状況では、長さ10.0m以上、最大幅3.0m、狭いところでは1.5m程度を測る。なお、検出高は標高8.18mである。

覆土には上層に褐色土や暗褐色土、下層には黒褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、2条とも一方の肩部からは緩やかに、もう一方からは約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出している。西側の溝は北側ではやや広い平坦面を有して2段に作り出されるという特徴がある。最深部までの深さは西側の溝で30cm、東側で24cmと若干西

側の溝のほうが深くなっている。なお、遺構の北側と南側における底面の標高はほぼ一定である。

遺物は少量ではあるが、12～13世紀頃を中心とした中世土師器の細片のほか、土師器擂鉢や須恵器高台付盤などの遺物が出土している。

SD34 の西側に位置する SD32、SD35 は基軸が西北西一東北東を向いており、SD34 とはほぼ直交するように配置され、さらにこの直交する区画の北側には柱根を含む柱穴跡と考えられるピット状遺構が多数検出されている。以上のような遺構の配置状況から考えると、遺構の機能としては、中世建物跡の区画を示す溝である可能性が強く、時期的には 12～13世紀にかけて築かれたものであろう。

SD 34 の出土遺物（第 9 図）

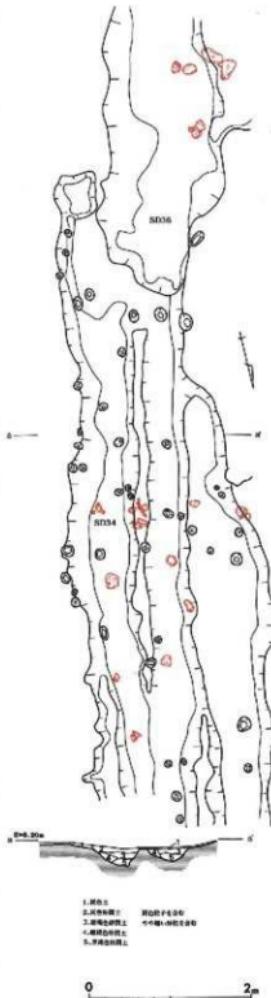
1 は、土師器擂鉢である。部体から口縁部にかけて直線的に立ち上がる逆「ハ」の字状を呈しており、口縁端部はほぼ平坦におさめている。外面口縁端部付近は横方向、下位は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、下位には擂目が認められる。このような土師器擂鉢は、12～13世紀頃の特徴をもつもので、市内では藤ヶ森遺跡（1 地点）や矢野遺跡（2 地点）からも出土している。2 は、須恵器高台付盤であろう。内外面ともナデ、底部は糸切り後にナデによる調整が行われている。やや長めに伸びる高台は、直立して端部はほぼ平坦におさめている。焼成時にかなり変形しているが、器形から推察すると平安時代初期頃に相当する資料であろう。

その他の遺物は小片であるが、12～13世紀頃と考えられる中世土師器が中心であり、古い様相を示す資料も混在しているものの、当該期に築かれた遺構である可能性が強い。

SD 22（第 10 図）

51 Gr～54 Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西南西一東北東方向に伸びている。両端とも調査区外へと達してさらに伸びているが、この溝は後述する SD21・SD25・SD26 などと切合関係にあり、これらの中で最も古い時期に築かれたことが明らかである。検出した状況では、長さ 17.5m 以上、最大幅 1.1m を測る。なお、検出高は標高 8.07m である。

覆土には、上層に褐色粒子を含む褐灰色土や灰褐色砂質土が堆積しており、下層には褐色や灰色の粘質土が堆積して基



第 8 図 SD34 実測図

盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しているが、南側肩部では一度平坦面を有する箇所も認められる。

最深部までは北側で38cmであるのに対し、南側では45cmの深さがあり、南に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物が全く出土していないことから築かれた時期については不明であるが、切合関係からSD21やSD25など中世期の遺構よりも古いことが明らかである。遺構の機能については、覆土には粘質土が堆積し底面に緩やかな傾斜が認められることから、水路として機能していた可能性が強い。

SD 37（第10図）

57Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南南西—北北東方向に伸びている。北側は調査区外へと達しており、前述したSD34とはほぼ並列するように配置されている。検出した状況では、長さ3.2m以上、最大幅70cmを測る。なお、検出高は標高8.14mである。

覆土には、上層に褐色粒子を含む黄褐色粘質土や暗褐色粘質土が堆積し、下層には黒褐色砂質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、最深部では26cmを測る。なお、中央部で深くなっている、北側では約15cmと浅くなっている。

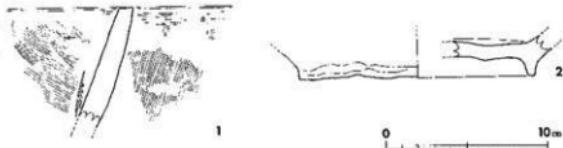
遺物が全く出土していないことから築かれた時期については不明であるが、SD34と並列していることやSD32・SD35と基軸が直交するように配置されていることから考えると、SD34と同様に中世建物跡の区画を示す溝である可能性が強く、新旧関係は明らかではないものの、掘り直しを行った可能性もある。

SD 30（第11図）

59Gr～60Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西北西—東南東方向に伸びている。両端とも調査区外へとさらに伸びるものと予想されるが、検出した状況では長さ7.25m、最大幅52cm、狭いところでは24cmを測る。なお、検出高は標高8.18mである。

覆土には、上層に褐色粒子を含む青灰色粘質土、下層には暗褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちてやや北側に偏った位置にある最深部は丸く作り出しており、中央部では約24cm、その他の部分では約15cmを程度を測り、中央部でやや深くなる傾向を示す。

遺物は、少量ではあるが中世期と考えられる土師器壺片などが出土している。遺構の性格は、SD32やSD35などと同様に西北西—東南東方向に伸び、形状もほぼ同様な特徴をもつ遺構であるこ



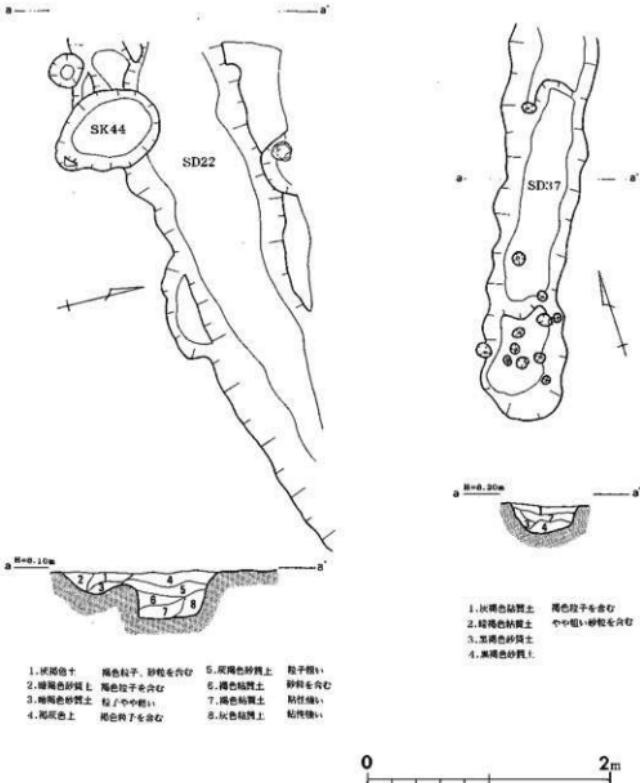
第9図 SD34出土遺物実測図

とを考えると、中世建物跡の区画を示す溝と考えられ、その配置からはこの調査区の中には2軒以上の建物区域の存在が想定される。

SD 32 (第 12 図)

54Gr ~ 56Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西北西—東南東方向に伸びている。検出長 8.80m、最大幅 74cm、狭いところでは約 30cm を測る。なお、検出高は標高 8.20 m である。

覆土には、褐色粒子を含む褐灰色粘質土や暗灰色粘質土が堆積し、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約 45 度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは 8cm で、遺構全体を通してほぼ一定である。



第 10 図 SD22・SD37 実測図

遺物は全く出土しておらず、築かれた時期については明確にできないが、SD34 や SD37 と基軸が直交して配置され、北側には柱根を伴うピット状遺構が存在していることから推察すれば、北に位置する中世建物跡の区画を示す溝である可能性が強い。

SD 35 (第 12 図)

55Gr ~ 56Gr の南端部、黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西北西—東南東方向に伸びている。南側には約 20cm 幅で側溝を設定していることや西側の一部が中世期の井戸跡と考えられる SK41 によって切られているが、長さ 7.40m 以上を測る。なお、検出高は標高 8.20m である。

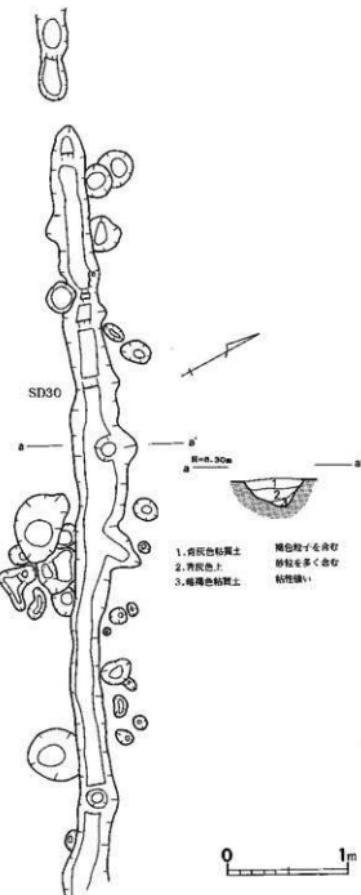
覆土には中央部で暗褐色粘質土、肩部では暗褐色砂質土が堆積し、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、南側では側溝を設定しているために明らかではないが、北側肩部より緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約 8cm と浅い。また、側溝を設定している南側壁の堆積土から推察すれば、この溝は広いところでも約 1m 程度であると考えられる。

遺物には、朱塗りの痕跡が残る管状土錐が 1 点出土しているにすぎず、この遺物から築かれた時期について断定することはできないが、SD32 と並列するように配置されていることから、中世建物跡の区画を示す溝である可能性が強い。なお、SD32 との間には柱穴となるようなピット状遺構が存在しないことから、SD32 とは別の建物跡の区画を示す溝で、南側に建物跡が配置されていた可能性が強い。

その他の溝状遺構

調査区の西端、54Gr では SD33 を検出している。この遺構は、溝というよりは地形的に緩やかに西に向かって落ち込んだ部分で、深さは 3cm 程度の浅いものである。なお、SD33 は SD22 と切合関係にあり、SD22 より新しい時期に築かれた遺構であることが明らかである。

遺物には、この調査区では最も古い時期にあたる口縁部が上下に拡張する弥生時代後期の甕片の



第 11 図 SD 30 実測図

ほか、中世期の六連式の製塩土器なども出土しているが、これらから遺構の築かれた時期について断定するには資料として乏しく、遺構の機能についても不明である。

また、中世建物跡を区画する溝と考えられるSD34の南側では切合関係からこれよりも新しい時期の溝状遺構であるSD36を検出している。約50cmの深さがあり、遺構内からは拳大から人頭大の石がわずかながら出土しているが、これらからは築かれた時期とともに遺構の機能についても明らかではない。

SK 29（第13図）

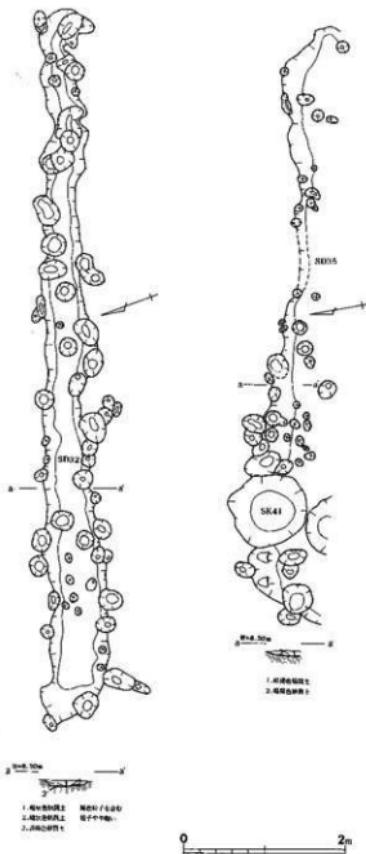
C59Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、長軸1.64m、短軸1.30mの東西に長い隅丸長方形を呈している。なお、検出高は標高8.20mであり、基軸は西北西—東南東を向いている。

覆土には、上層に炭化物を含む暗褐色土や褐色土が堆積し、中層には暗オリーブ色、暗褐色の粘質土、最下層には粘性の強い黒褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは54cmを測る。

遺物には、奈良時代頃と考えられる土師器壺のほか須恵器甕片などが出土しており、当該期に築かれた遺構と考えられる。遺構の機能は、形状や深さなどから推察するかぎり、井戸跡とは考えにくく、土塼墓であった可能性が強い。

SK 29の出土遺物（第14図）

1は、土師器壺の底部である。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。小片で器形が十分に把握できないため、時期的な判断は難しい。2は、須恵器甕の口縁部である。口縁端部は外反して丸くおさめ、端部から2cmほど下位には一条の沈線が施されて内外面ともにナデによる調整が行われている。3は、須恵器甕の胴部であろう。外面は粗いタタキ、内面には一部ケズリによる調整が行われているが全体的にやや雑



第12図 SD 32・SD 35 実測図

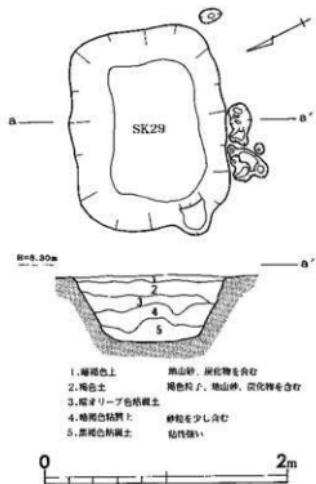
に仕上げられており、至るところに指頭圧痕が認められる。2・3のような須恵器小片からは明確な時期を判断することは難しいが、およそ奈良時代頃に相当する資料と考えられる。

SK 31 (第 15 図)

調査区の東端、B63Gr の黄褐色砂質土上面において検出した土坑状遺構である。この遺構は、奈良時代から平安時代にかけて築かれたと考えられる SD31 と切合関係にあり、SD31 よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。平面プランは、長軸 1.60m、短軸 1.02m を測る南北に長い隅丸長方形形状を呈している。なお、検出高は 8.10m であり、基軸は東西一北東方向を向いている。

覆土には上層にオリーブ黒色土、オリーブ色土が堆積し、中層には暗オリーブ、暗褐色、褐色といった粘質土、下層には黒褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。このうち、褐色粘質土中には木片を多量に含んでいることが注意される。断面の形状は、肩部からはほぼ垂直に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは 98cm の深さを測る。

遺物は少量ではあるが、12～13世紀頃に相当する資料である土師器鉢や壺が出土していることから、遺構が築かれた時期も当該期であろう。遺構の性格は、土塙墓としては 98cm も深さがあることから、むしろ井戸跡と考えたほうが自然であり、覆土中に多量の木片が認められることなどから、杭あるいは木棒が破損したものと考えられる。

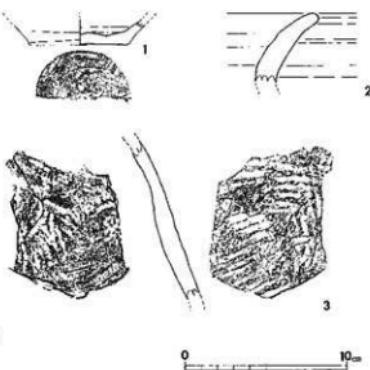


第 13 図 SK29 実測図

SK 31 の出土遺物 (第 16 図)

1 は、土師器鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に伸びる逆「ハ」の字状を呈しており、口縁端部にはやや凹面を作り出している。外面は縱・横方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。このような特徴をもつ土師器鉢は、12～13世紀頃に相当する資料と考えられる。

2 は、土師器壺である。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。



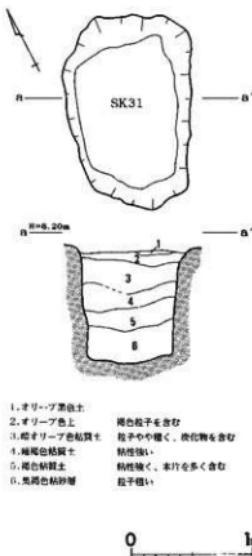
第 14 図 SK29 出土遺物実測図

SK 35 (第 17 図)

C54Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは径約 70cm を測る円形状を呈し、東南部にやや張り出した部分を有している。なお、検出高は標高 8.08m である。

覆土には、上層に褐色粒子を含む灰色粘質土、灰色土が堆積し、中層には砂粒を含む暗褐色土、下層には淡褐色砂質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約 45 度の角度で落ちて、やや南に偏って位置する底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは 34cm を測る。

遺物には、奈良時代頃に相当する資料である土器器坏や須恵器壺片が遺構底部直上から出土しており、遺構が築かれた時期も当該期と考えられる。遺構の機能を判断する資料には乏しいが、形状から推察すると井戸や土壤墓などとは考えにくく、柱穴あるいは貯蔵穴といった類の遺構であろう。



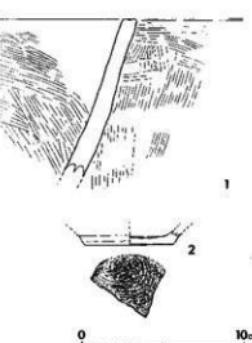
SK 35 の出土遺物 (第 18 図)

1 は、土器器坏である。底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさまっている。内外面ともに回転ナデによって仕上げられ、回転水引き痕が明瞭に残っている。底部は糸切り後、ナデによる調整が行われ、外面体部にススが付着している。また、この遺物は内外面ともに赤色塗彩されており、祭祀的な意味合いをもつものと考えられる。このような特徴をもつ土器器坏は、奈良時代頃に相当する資料と考えられる。2 は、須恵器壺の胴部であろう。外面はタタキによる調整が行われ、一部ではタタキを磨り消した痕跡が認められる。内面は當て具による円形の青海波文が施されている。このような特徴をもつ須恵器は 1 と同様に奈良時代頃に相当する資料と考えられる。

SK 27 (第 19 図)

B59Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、西側は既設用水路、北側は調査区外へと達しているために平面プランは明らかではない。覆土には中層から下層にかけて粘質土や粘砂土が堆積しており、最深部までは 1.04m を測る。

遺物が全く出土していないため時期的な判断は難しいが、周辺の遺構配置から考えると中世期に築かれたものと考えられる。遺構の性格としては、深さがあることなどから井戸として機能していた可能性が強い。



第 16 図 SK31 出土遺物実測図

SK 28 (第 19 図)

B59Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、西側は既設用水路によって切られているために平面プランは明らかではない。覆土下層には SK27 と同様に粘砂層が堆積しており、最深部までは 96cm を測る。

遺物には 4 面に使用痕が残る砥石が 1 点出土しているにすぎず、築かれた時期について判断することは難しいが、遺構の深さや SK27 と形状が類似していることなどから、中世期に築かれた井戸である可能性が強い。

SK 30 (第 19 図)

C63Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、長軸 1.14m、短軸 90cm のややいびつな楕円形状を呈し、基軸は南東—北西方向を向いている。覆土には中層から下層にかけて粘質土が堆積し、最深部までは 48cm を測る。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて遺構下位ではオーバーハング気味に掘削されて底面はやや丸く作り出している。

遺物が全く出土していないことから、築かれた時期については不明である。機能としては、東側が調査区外であることから明確な判断はできないが、井戸あるいは大形建物の柱穴である可能性もある。

SK 32 (第 19 図)

B63Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、平面プランは径 95cm ほどの円形状を呈している。覆土には中層から下層にかけて粘質土が堆積しており、最深部までは 64cm を測る。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は平坦に作り出している。

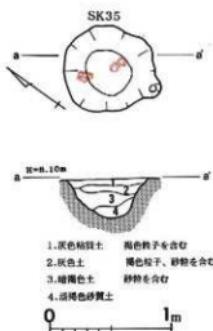
遺物には、回転糸切り痕の残る須恵器壺の底部が出土しており、奈良時代頃に築かれた遺構である可能性が強く、機能としては井戸や大形建物の柱穴などが想定される。また、東側には同時期に築かれたと考えられる SD31 があり、その関連も注意される。

SK 33 (第 19 図)

C63Gr の南端部、黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。

南側は調査区外へと

達しているために平面プランは明らかではないが、検出した状況からは径 1.70m 程度を測り、円形状を呈するものと考えられる。



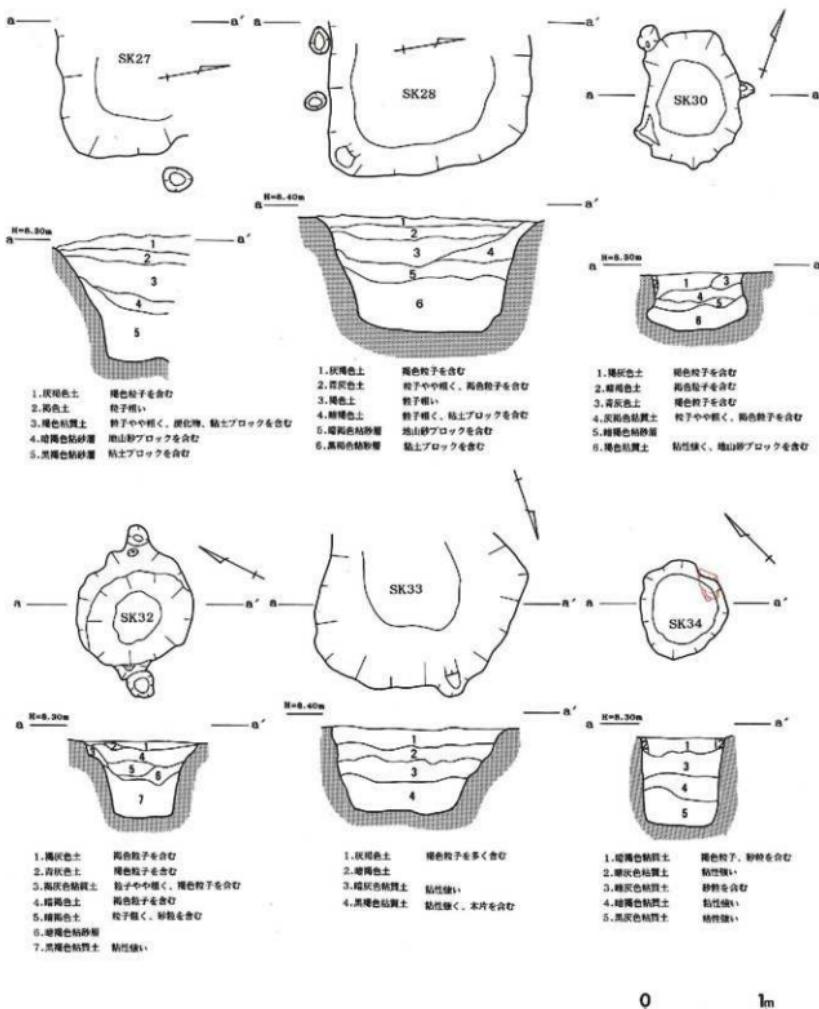
第 17 図 SK35 実測図



第 18 図 SK35 出土遺物実測図

覆土には、下層に粘性の強い暗灰色粘質土、最下層には木片を含む黒褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、東肩部からは鋭角に、西肩部からは約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは88cmを測る。

遺物には、奈良から平安期頃に相当する小形の須恵器高台付焼が出土しており、遺構が築かれた



第19図 土坑状遺構実測図(1)

時期は当該期である可能性が強い。遺構の機能は、大きさや形状、覆土中に木片が認められることなどから、木枠組みの井戸として機能していた可能性が強い。

SK 34（第 19 図）

C55Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、長軸 80cm、短軸 70cm を測る梢円形状を呈している。覆土には上層から下層にかけて暗灰色や黒灰色などの粘質土が一様に堆積している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面は平坦に作り出しており、最深部までは 72cm を測る。

遺物は全く出土していないが、遺構北東部の上層に 20cm 程度の平坦な石が置かれていることが注意される。築かれた時期については不明であるが、深さや堆積土などから推察すれば、井戸として機能していた可能性が高く、上層で検出された石は、井戸を廃棄する際の祭祀的な意味合いをもつ可能性もある。

SK 38（第 20 図）

B57Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、長軸 1.44 m、短軸 1.20m を測り、西側に張り出した面をもついびつな形状を呈している。断面の形状は、西肩部からはやや緩やかに落ちて一度平坦面を有し、そこからさらに鋭角に落ちて最深部を有する底面へと達し、東肩部からは底面に向かって鋭角におちて底面は平坦に作り出している。覆土には中層から下層にかけて粘質土が堆積し、最深部までは 70cm を測る。

遺物は出土していないが、上層には 20cm 程度の平坦な石が置かれていることが注意される。築かれた時期については不明であるが、深さや堆積土などから推察すれば、井戸として機能し、上層で検出した石は井戸を廃棄する際の祭祀的な意味合いをもつ可能性が強い。

SK 39（第 20 図）

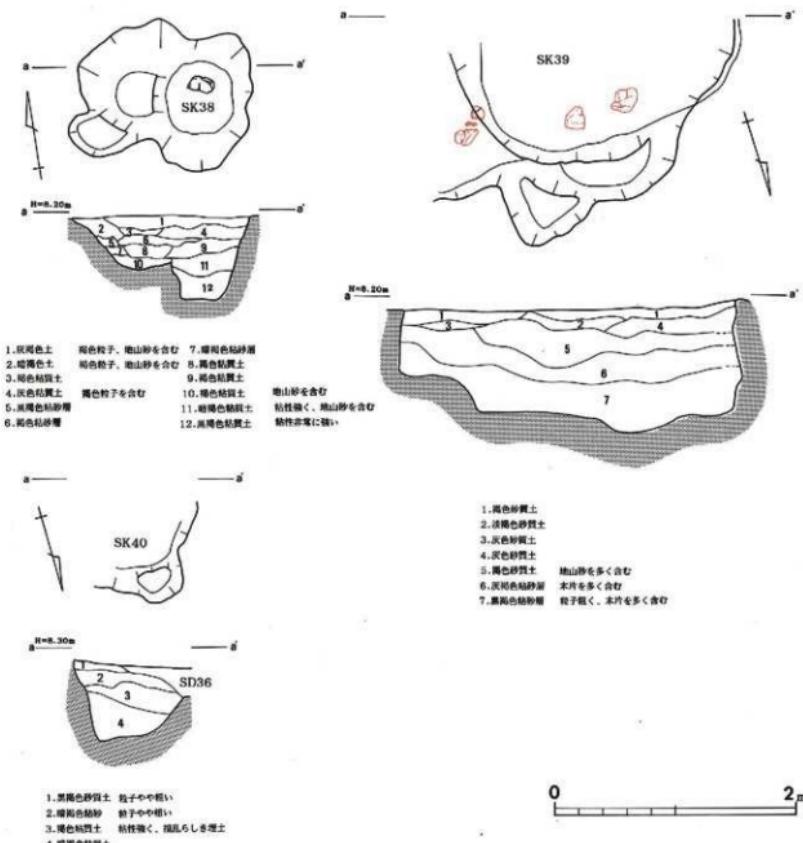
C57Gr の南端部、黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、南側は調査区外へと達している。平面プランは、検出した状況から推察すれば径 2.4m 以上を測る円形状を呈するものと考えられる。なお、切合関係から SD36 よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。覆土には、下層に灰褐色や黒褐色の粘砂層が堆積し、この層位には人頭大の石や木片が多く含まれていることが注意される。断面の形状は、両肩からほぼ垂直に落ちて底面は若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦に作り出されている。また、南西壁沿いには何本もの杭が打ち込まれてややオーバーハング気味に掘削され、最深部までは 1.04m を測る。

遺物には、内面に布目痕のある古瓦小片のほか、曲物の一部を検出している。この遺物から築かれた時期を明確にすることはできないが、およそ中世期に築かれ、曲物や杭が打ち込まれている状況から、井戸として利用されていたものと考えられる。

SK 40 (第 20 図)

C58Gr の南端部、黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、東側は既設用水路によって切られ、南側は調査区外へと達しているために平面プランは不明である。覆土には、中層から下層にかけて褐色、暗褐色の粘質土が堆積し、この層位では腐食した異臭がしている。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは 60cm を測る。

遺物には、土師器壺が 1 点出土している。底部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に開き、底部径に比して口縁部径がかなり大きくなるという特徴をもつ。このような土師器壺は、12～13 世紀頃に相当する資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。部分的な検出であり遺構の機能は明らかではないが、覆土の状況から推察するとトイレとして機能していた可能性もある。

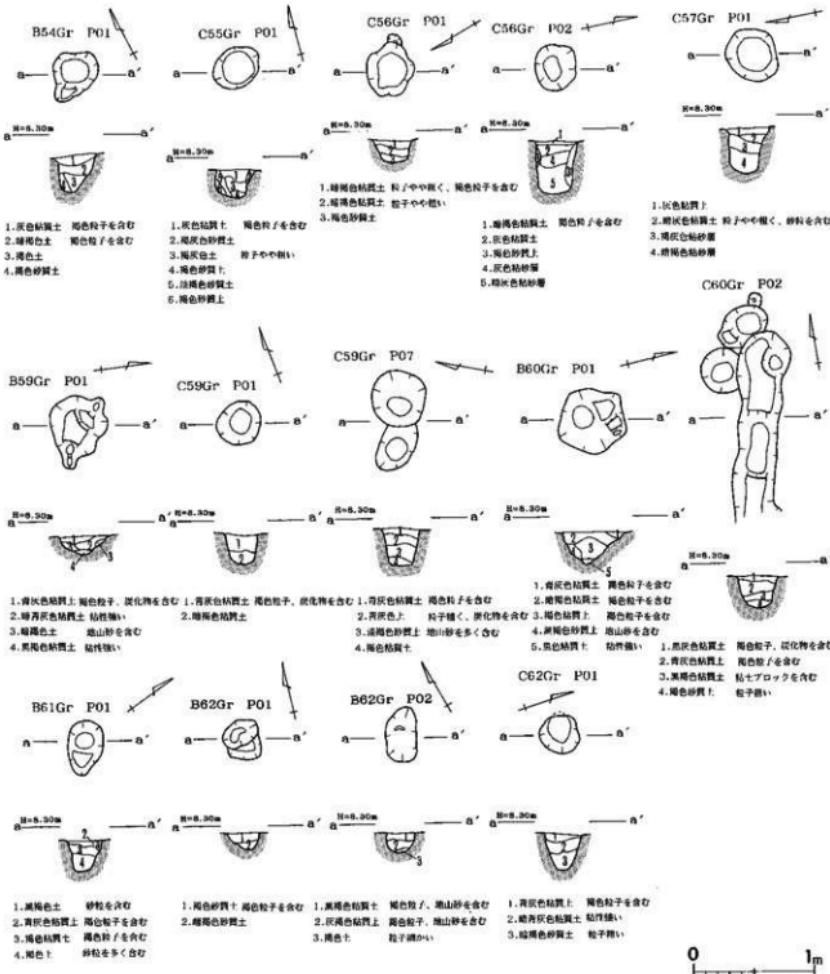


第 20 図 土坑状遺構実測図 (2)

その他の土坑状遺構

B57Gr で SK37 を検出している。長軸 2.10m、短軸 1.20m 程度を測り、ややいびつな隅丸方形状を呈している。深さは約 15cm と浅く、遺物は 1 点も出土していない。大きさや形状から推察すれば、土壙墓として機能していた可能性もある。

その他、C55Gr において SK41、SK42 を検出している。いずれも径約 1m を測る円形状を呈し、深さは約 60cm を測るものと考えられ、井戸あるいは柱穴として機能していた可能性が強いものであ



第21図 ピット状遺構実測図

る。なお、切合関係から SD35 よりも新しい時期に築かれたことが明らかである。

ピット状遺構について（第 21 図）

B 54 Gr P 01

径約 35cm を測り、やや南西側に張り出した部分を有するいびつな形状を呈している。覆土には上層に粘質土、中層には暗褐色土、下層には砂質土が堆積している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約 32cm を測る。遺物には輪状つまみを有する須恵器壺蓋が 1 点出土しており、奈良時代頃に築かれた遺構と考えられる。

C 55 Gr P 01

径約 35cm を測り、やや東西に長い梢円形状を呈している。覆土には上層に粘質土、中層から下層にかけては砂質土が堆積し、深さは約 22cm を測る。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。遺物は出土していないが、前述した B54Gr の P01 との間にもう 1 つのピット状遺構を挟んで約 2m 間隔で直線上に配置されている。掘立柱建物跡とは考えにくいが、柵や堀として機能し、時期的には奈良時代頃のものである可能性が強い。

C 56 Gr P 01

長軸 44cm、短軸 38cm を測るややいびつな梢円形状を呈し、基軸は北西—南東方向に向いている。覆土には上層に粘質土、下層には砂質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面はやや丸く作り出しており、深さは約 18cm を測る。遺物は出土しておらず、築かれた時期については不明である。また、建物跡となるような配置も認められず、機能についても不明である。

C 56 Gr P 02

長軸 38cm、短軸 34cm を測り、東西方向にやや長い梢円形状を呈している。覆土には上層に粘質土、下層には粘砂層が堆積している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面は平坦に作り出しており、深さは約 42cm を測る。遺物は出土しておらず、配置からも掘立柱建物跡とは考えにくく、築かれた時期や機能については不明である。

C 57 Gr P 01

径約 42cm を測るほぼ円形状を呈している。覆土には上層に粘質土、下層には粘砂層が堆積しており、深さは約 38cm を測る。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸く作り出している。遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

B 59 Gr P 01

長軸 62cm、短軸 45cm を測るいびつな形状を呈している。覆土には上層、下層ともに粘質土が堆積しており、上層には炭化物が認められている。断面の形状は、両肩から約 45 度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約 16cm を測る。遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

C 59 Gr P 01

径約 35cm を測るほぼ円形状を呈している。覆土には粘質土が堆積し、上層には炭化物が認められ

る。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約25cmを測る。遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

B 60 Gr P 01

一辺約52cmを測るややいびつな隅丸方形状を呈している。覆土には主に粘質土が堆積し、深さは約25cmを測る。断面の形状は、南肩部からは鋭角に北肩部からは約45度の角度で落ちて、やや南側に偏って狭い底面は丸く作り出している。遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

C 60 Gr P 02

南側は調査区外へと達しているが、幅約25cm、検出長2.0mを測り、ピットというよりは溝状を呈する遺構である。基軸は南南西—北北東を向き、中世建物跡の区画を示す溝と考えられるSD30と切合関係にあり、これよりも新しい時期の遺構であることが明らかである。覆土には上層に粘質土、下層には砂質土が堆積しているが、上層には炭化物が認められるとともに腐食したような異臭がすることが注意される。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約28cmを測る。遺物には土師器壺が1点出土している。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されており、中世期頃のものと考えられる。機能については不明である。

B 61 Gr P 01

長軸44cm、短軸28cmを測り、南東部に張り出した部分を有したややいびつな椭円形状を呈している。覆土には上層に褐色粒子を含む粘質土、下層には褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約25cmを測る。遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

B 62 Gr P 01

2つのピット状遺構が重なった状態で検出され、径約32cmの円形状を呈している。覆土には砂質土が堆積してやや東に偏った位置にある底面は丸く作り出しており、深さは約15cmを測る。遺物は出土しておらず、遺構が築かれた時期や機能については不明である。

B 62 Gr P 02

長軸45cm、短軸25cmを測り、南南西—北北東に基軸をもつ梢円形状を呈している。覆土には上層に黒褐色、灰褐色の粘質土、下層には褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて北に偏って狭い底面は丸く作り出しており、深さは約15cmを測る。遺物が出土していないことから築かれた時期については不明である。なお、この遺構の北東には約1m間隔で形状や覆土が類似したピット状遺構が直線上に配置されており、塀や橋などの機能をもつ可能性がある。

C 62 Gr P 01

径約32cmを測る円形状を呈している。覆土には上層から下層にかけて粘質土が堆積し、西側ではオーバーハング気味に掘り込まれており、深さは約30cmを測る。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸く作り出している。遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

その他のピット状遺構

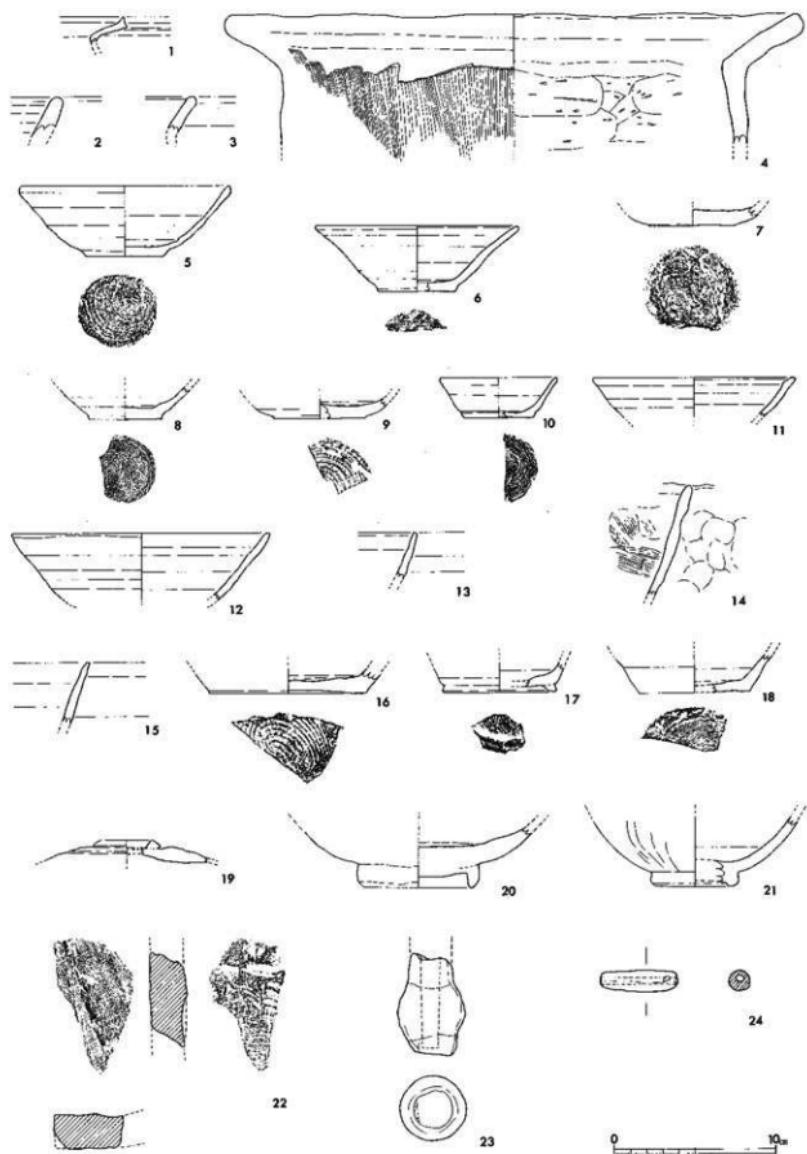
ピット状遺構は調査区内で1,000以上検出しているが、すべての遺構が黄褐色砂質土上面で検出されており、上層に堆積する前の段階である程度削平されているものと考えられる。これらの中には近世以降の杭跡なども含まれていると考えられるが、遺跡の中心時期は奈良時代から平安時代初期、12～13世紀頃の遺構が多数を占めるものと推察される。このうち、建物の区画を示すと考えられる溝に対して明確な掘立柱建物跡となる配置を示すものは少ないが、柱根を伴うピット状遺構が調査区内で10基余り検出されている。

その中にあって、B55GrからはP02、P06、P07から柱根が検出されていることが注意される。柱根は伴わないピットも含め、約2m間隔で4つのピットが配置されるがことから、建物跡と目されるものである。また、建物跡の配置とはならないものの、等間隔で直線上に配置されるピット状遺構は54Gr～56Gr、59Gr～60Grから検出されている。これらは区画を示すと考えられる溝が検出されているところに配置されていることから、塀や柵といった機能をもつものと推察される。

遺構に伴う出土遺物（第22図）

1は、SD33から出土した弥生土器甕である。口縁部は外方に強く屈曲し、口縁端部はやや上下に拡張して内外面ともにナデによる調整が行われている。松本編年Ⅲ-2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。2・3は、土師器甕の口縁部であろう。いずれも口縁端部は丸くおさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。2はSD32、3はSD30から出土しているが、時期的判断は難しい。4は、口径30.7cmを測る大形の土師器甕である。口縁部は外方に緩く屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。奈良時代以降の遺物と考えられ、B55GrのP04から出土している。

5～13は、土師器坏である。5は、底部から体部にかけてやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。B60Gr、P03からの出土である。6は、底部から口縁部にかけて大きく逆「ハ」の字状に開き、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、外面にはススが付着している。SK40からの出土である。5・6は、いずれも底径に比して口径がかなり大きくなるという特徴をもち、12世紀頃に相当する資料と考えられ、松江市石台遺跡や斐川町西石橋遺跡などからも出土している。7は器壁が厚く、底部は回転糸切りによって切り離されている。5・6と同様に底径に比して口径がかなり大きくなるタイプのものと考えられ、C62GrのP03から出土している。9は7と同様に底部の器壁が厚く、C60GrのP02から出土している。10は小形の坏で、底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。C60GrのP04からの出土である。11・12は体部から口縁部付近にかけての破片で、いずれもやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われ、11はC60GrのP01、12はC59GrのP09・P10からの出土である。13は内外面ともに朱塗りされた坏で、内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。C55GrのP02から出土しており、奈良時代頃に相当する資料であろう。



第22図 遺構内出土遺物実測図(1)

14は、SD33から出土した土師器の製塩土器である。砲弾状を呈する六連式と呼ばれるもので、内外面の至るところに指頭圧痕が認められる。製塩土器は、角田遺跡の北に位置する藤ヶ森遺跡（I地点）のほか、市内各地の遺跡からも出土しており、地域的な特色として内面に布目痕が認められないことがあげられる。

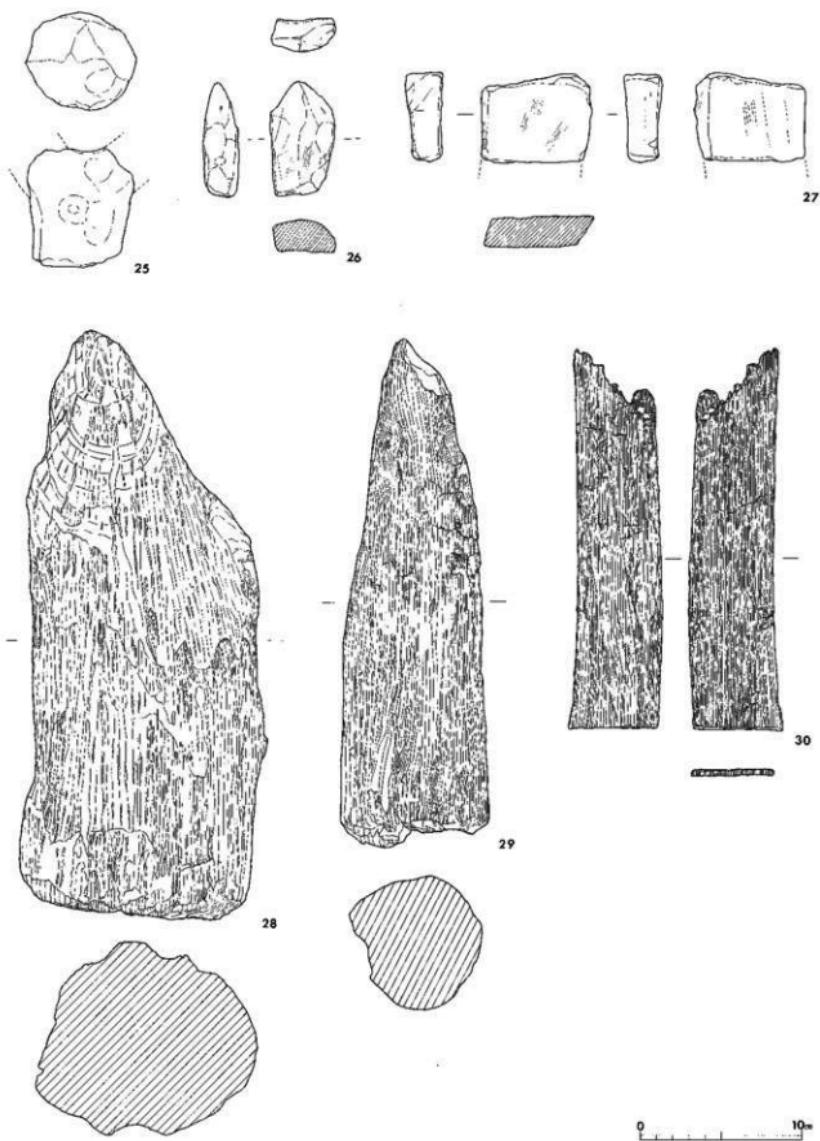
15は須恵器壺の口縁部で、B61GrのP02から出土している。16は須恵器壺の底部で、回転糸切りによって切り離され、漆のような黒色の不純物が付着していることが注意される。SK32上層からの出土である。17は、小形の須恵器高台付壺である。高台部は短く外傾し、内外面ともにナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。SK33からの出土である。18は無高台の須恵器壺で、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。C59GrのP04から出土している。19は輪状つまみを有する須恵器壺蓋である。山本編年IV期に相当する資料で、奈良時代頃のものであろう。B54GrのP01から出土している。15～19の須恵器については、それぞれに特徴をもつものではあるが、総じて時期的には奈良時代頃に相当する資料と考えられる。

20は、陶器高台付碗である。直立した高台を有し、内外面の底部を除いて淡緑灰色に施釉されている。C60GrのP04からの出土である。21は、青磁の高台付碗である。直立した高台を有し、外面底部を除いて淡緑灰色に施釉されている。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、外面体部には間隔の広い錦蓮弁文が施されている。このような特徴をもつ青磁は、13世紀頃に相当する資料と考えられ、C59GrのP13から出土している。

22は、古瓦である。平瓦と考えられ、裏面は成形型の細かな布目圧痕が認められ、表面はナデによる調整が行われている。SK39からの出土であり、古瓦は第2次発掘調査の際にも出土していることが注意される。23は、土師質の用途不明品である。片端には貼り付け部が剥離したと考えられる痕跡が認められ、中央部には1cm程度の孔が空たれているが貫通はしていない。中央部に膨らみを有し、先端部は細くなっている。C60GrのP03からの出土であり、壺などの装飾として貼り付けたものではないだろうか。24は、管状土錐である。朱塗りの痕跡が認められ、C55GrのP04からの出土である。第23図-25は、土製支脚である。欠損しているが2本の突起部をもつもので、背面中央部には凸状の膨らみを有して全面が粗いナデによる調整が行われている。C55GrのP04からの出土である。土製支脚は通常、移動式壺や瓶、甕などと共に共することから、6世紀後半から8世紀初頭にかけてのものと考えられる。市内では三田谷I遺跡や壱丁田遺跡などからも出土している。

26・27は砥石である。26は一部欠損しているが、両面に使用痕が認められ、石材には細粒凝灰岩を用いている。ほぼ完形でかなりかなり使用されたものと考えられ、C55GrのP03から出土している。27は片端が欠損しているが、4面に使用痕が認められる。SK28からの出土で、石材には流紋岩質細粒凝灰岩を用いている。

28は、C62GrのP04から検出した柱根で、現状で径約13cmを測る。29は、C60GrのP05で検出した柱根で径約8cmを測る。この2つの遺構は、間にもう1つピット状遺構を挟んで約3mの間隔に一直線上に配置されており、掘立柱建物跡となる可能性をもつものである。なお、これらの柱根には杉材を使用している。30は、井戸跡であるSK39から出土した曲物と目されるものである。大部分は欠損しているが、表面には曲げやすくするために小刀でつけたような切り込みが認められる。井戸底部にこの曲物を据え置いたものであろう。なお、第2次発掘調査や北方に位置する藤ヶ森遺



第23図 遺構内出土遺物実測図(2)

跡（I 地点）においても曲物を伴う井戸跡が検出されている。

以上のように、調査区内の遺構からは時期的には弥生時代中期から近世に至るまでの遺物が出土しているが、その多くは 12 ~ 13 世紀頃にかけてのものと考えられる。注目すべき遺物としては、第 2 次発掘調査においても検出された古瓦があり、この近辺に古代から中世期にかけての寺院が存在していたことを窺わせる資料である。

遺構外の出土遺物（第 24 図～第 27 図）

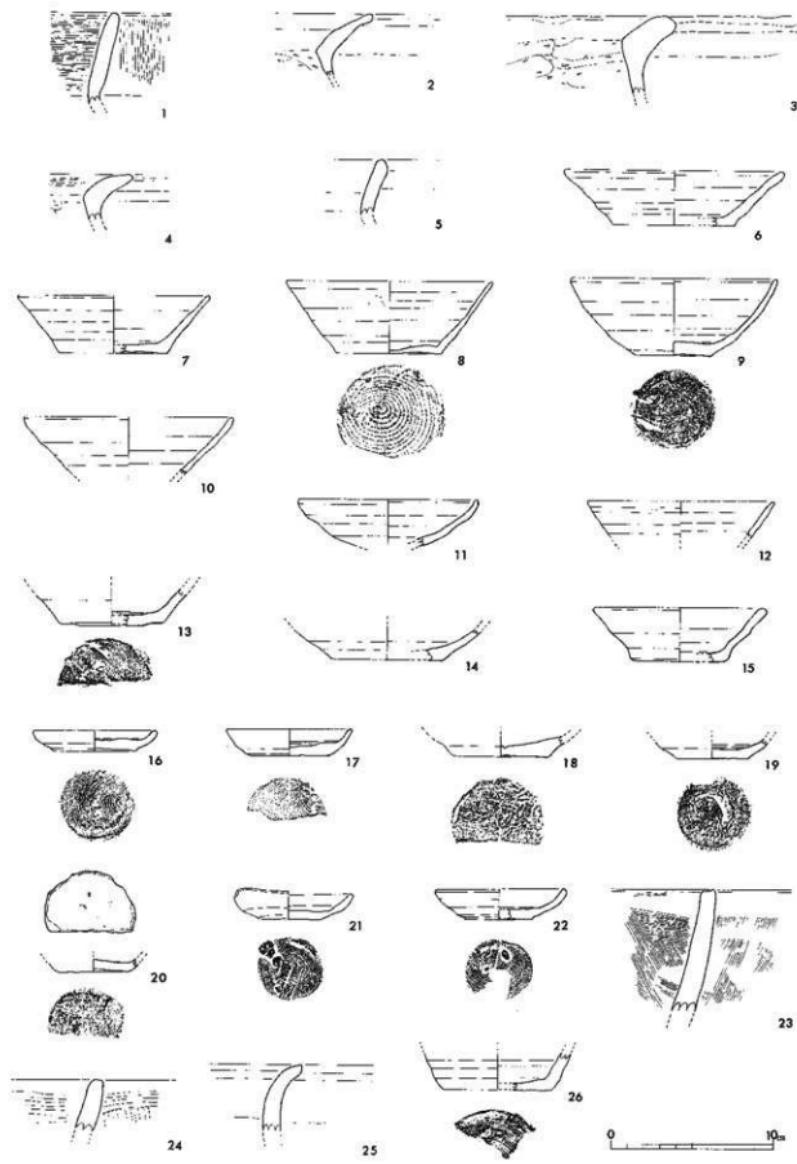
第 24 図 1 ~ 5 は、土師器甕である。1 は、頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面は縱方向、内面は横方向のハケによる調整が行われ、外面にはススが付着している。2 は、頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。3 は頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、内面頸部下はケズリによる調整が行われ、全体的に粗雑な作りで内外面にはススが付着している。4 は 2 と同様な成形である。5 は、頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部はやや外方に膨らみを有して丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。以上のような土師器甕は、2・5 がやや古い様相を示すものと考えられるが、その他は古墳時代後期から奈良時代頃に相当する資料であろう。

6 ~ 22 は、土師器壺あるいは小皿である。6 は、底部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。7 も同様のタイプであるが、外面底部を除いて朱塗りされている。8 も器形は同様であるが、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、外面体部にはススが付着しているとともに文字とはならないが墨の痕跡が認められる。以上のような器形の土師器壺は、およそ奈良時代から平安時代初期頃に相当する資料と考えられる。

9 は底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。10 は、体部から口縁部付近にかけての破片で、内外面ともナデによる調整が行われている。11 は小皿であろうか。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内側に折り曲げて丸くおさめている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。12 は体部から口縁部にかけての破片であるが、外面体部には 8 と同様に墨の痕跡が認められる。この 2 つの遺物は出土位置が近く色調や胎土も類似していることから同一個体である可能性が強く、墨痕は製作地あるいは集落などの意味合いを示す記号と考えられる。13・14 は底部付近の破片で、いずれも内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。15 は小形の壺で、底部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともにナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。なお、外面には朱塗りの痕跡が認められ、ススが付着している。

17・18 は、小皿である。いずれも内湾しながら立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

18・19 は、壺の底部付近の破片である。いずれも内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって



第24図 遺構外出土遺物実測図(1)

切り離されている。20は壺の底部で、底部は静止糸切りによって切り離されている。また、内面には「水」の墨書が認められるものである。

21・22は、小皿である。いずれも内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。この2つの遺物は出土地点や器形、胎土、色調が類似していることから、同じ粘土塊から同じ窯で焼成された可能性が強いものである。

23は、土師器鉢である。口縁端部にはやや凹面を作り出し、外面上位はナデ、下位は斜め方向のハケ、内面上位はナデ、下位は横・斜め方向のハケによる調整が行われている。このような特徴をもつ鉢は、13世紀頃に相当する資料と考えられ、調査区内からはSK31からも類似した鉢が出土している。24も土師器鉢であろう。口縁端部には平坦面を作りて外面は縦・横方向、内面は横方向のハケによる調整が行われている。23と同様に13世紀頃に相当する資料であろう。

25は、須恵器壺の口縁部付近の破片である。頸部から口縁部にかけて緩く外反し、口縁外面には稜を作り出して端部は丸くおさめている。26は、須恵器壺である。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。奈良時代頃に相当する資料であろう。

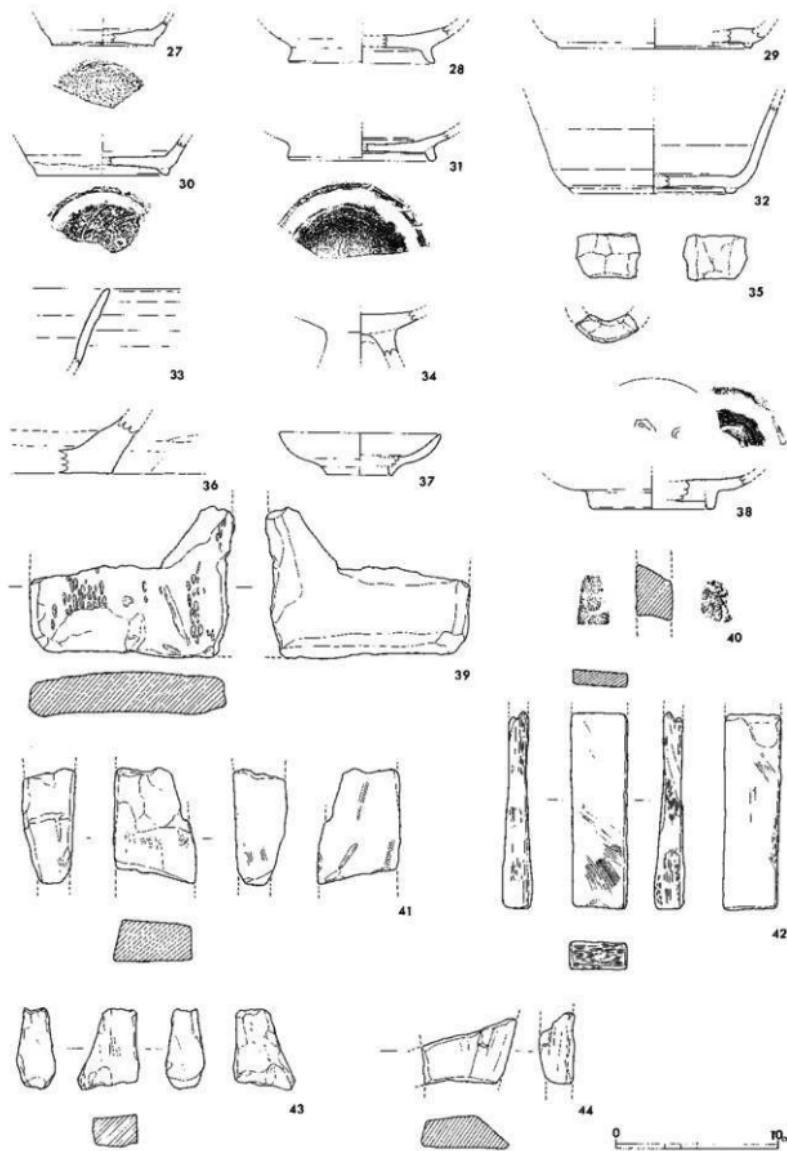
第25図-27～33は、須恵器壺あるいは塊である。27は無高台で、底部は回転糸切りによって切り離されている。28はやや外傾する高台をもつもので、端部は丸くおさめている。29は短く直立する高台をもつもので、端部は半坦におさめ、断面は四角形を呈する。30も29と類似した高台を有し、底部は回転糸切りによって切り離されている。31は、短くやや外傾する高台を有し、壺部内外面は淡緑色に施釉されている。内外面ともナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。32は高台付の塊で、高台は短くやや内傾して端部は平坦におさめている。壺部は内外面ともに回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。33は壺の体部から口縁部にかけての破片で、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、やや軟質であるという特徴をもつ。以上のような須恵器は、その特徴から27・28は奈良時代頃、その他は平安時代初期頃に相当する資料と考えられる。

34は、須恵器高壺である。脚部には三角形の透かし孔が2ヶ所に認められ、ナデによる調整が行われている。古墳時代後期以降のものであろう。35は、須恵質の用途不明品である。両端が欠損しているものの形状から推察すれば、断面は中央が空洞の円形を呈すものと考えられる。外面はヘラ状工具による細かな面取り、内面は粗いナデによる調整が行われ、至るところに指頭圧痕が認められる。

36は陶器の鉢で、全体にナデによる調整が行われている。中世末から近世にかけての遺物と考えられる。37は口径9.8cmを測る小形の青磁皿で、全面が淡緑色に施釉されている。38は高台をもつ青磁碗である。高台は短く直立して端部は平坦におさめている。外面底部を除いて淡緑色に施釉され、内面底部には円形を描く線とその中央にも文様が描かれている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

39は、平瓦であろう。外面はタタキ、内面はナデによる調整が行われている。成形や胎土などから、裏面に布目痕をもつ瓦よりも新しい時期のものであろう。40は、裏面に布目圧痕がある平瓦である。第22図-22と同様な特徴をもち、表面はナデによる調整が行われている。

41～44は、砥石である。41は両端が欠損しているが、4面に使用痕が認められる。石材には流紋岩を使用している。42はほぼ完形で、かなり使用したものと考えられ、厚さが1.7cmと薄くなっている。



第25図 遺構外出土遺物実測図(2)

いる。5面に使用痕が認められ、細かい鉄器も低いだものであろう。石材には緑色凝灰岩（グリーンタフ）を用いている。43は両端が欠損しているが、4面に使用痕が認められる。石材には流紋岩を用いている。44は部分的なものであるが、2面に使用痕が認められる。石材には珪長岩を用いている。第26図-45も砥石である。両端が欠損しているが、4面に使用痕が認められる。石材には石英安山岩を用いている。以上のように調査区内からは多くの砥石を検出している。遺跡としての中心時期は12～13世

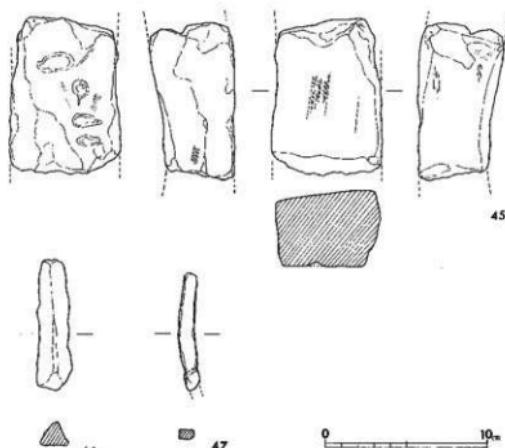
紀頃で、これらの砥石も当該期のものである可能性が強いが、この時期には鉄器の需用が庶民クラスにおいてもある程度高まり、日常的なものとして砥石が使用されていたことが窺える資料である。

第26図-46は、用途不明の鉄製品である。完形と考えられ、長さ8.0cm、幅2.1cmを測る。断面はほぼ正三角形を呈している。47は片端が欠損し、断面は長方形を呈すものであるが、用途は不明である。鉄製品としてはその他鉄鋤なども出土しており、日常的な鉄器の使用とともに第2次発掘調査で検出された櫛の羽口などとともに鍛冶関連施設の存在が窺える資料である。

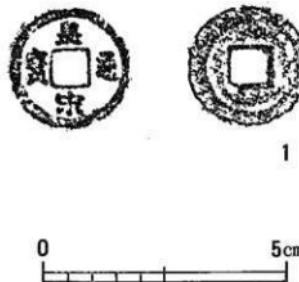
第27図-1は、古銭の「皇宋通寶」である。平安期から室町時代にかけて幕府または民間貿易によって輸入された渡来銭である。広く流通したもので、初鋤は1039年である。なお、裏面は無文である。

以上のように、遺構外においても古墳時代から近世にかけての幅広い時期の遺物を検出している。これらの遺物は、時期的に大きく区分すると奈良時代から平安時代初期にかけての時期、12～13世紀にかけての時期に2分することができる。なかでも遺物の出土量は12～13世紀頃のものが圧倒的に多く、遺跡としての中心は当該期にあったものと推察される。

注目すべき遺物としては、古瓦がある。古瓦には明らかに時期の異なる2種類のものが出土しており、付近に古代から中世期にかけての寺院が存在した可能性を窺わせるとともに、この古代寺院は立て直し



第26図 遺構外出土遺物実測図(3)



第27図 出土古銭実測図

が行われた可能性もある。その他、「皇宋通寶」の出土は遺跡の中心時期と符合する資料である。

3. 小 結

当該地においては、溝状遺構7、土坑状遺構17のほか、ピット状遺構を多数検出した。

溝状遺構は、そのほとんどが中世の建物跡の区画を示すものと考えられ、西北西—東南東、南南西—北北東に基軸をもち、直交するように配置されている。その中には掘り直しとみられるSD34なども検出されている。また、この区画の中には柱根を伴うピット状遺構が存在し、建物跡や塀、柵といった機能をもつ可能性がある。

土坑状遺構には、平面プランが円形または椭円形を呈する井戸が多く検出されている。中でもSK39からは曲物が検出され、壁面には杭を立てて崩れにくくしている。また、井戸の多くからは人頭大の石が検出されているが、これは井戸の浄化あるいは埋め戻しの際の祭祀的な意味合いをもつものと考えられる。その他、土坑状遺構には土壙墓と考えられるSK29やSK31も検出されている。建物跡の区画を示す溝や井戸は、その出土遺物から、総じて12～13世紀頃に築かれたものと推察され、遺跡としての中心時期が当該期にあることは明らかである。

遺物には中世期のものが大部分を占めているが、中には特異な遺物も出土している。古瓦は、第2次発掘調査の際にも出土しており、この近辺に古代から中世期にかけての寺院の存在が窺われるとともに、時期の異なる瓦片も出土していることから、建て直しが行われた可能性もある。また、最も古い時期の遺物としては弥生時代後期のものも出土しており、南に位置する宮松遺跡との関連が注意される。

註

- (1)『藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1998年
- (2)『矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1991年
- (3)『石台遺跡』島根県教育委員会 1986年
- (4)『古文化談第18集』「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」川原和人・桑原真治 1987年
- (5)『出雲市埋蔵文化財調査報告書第8集』「角田遺跡」出雲市教育委員会 1998年
- (6)『三田谷遺跡vol.3』島根県教育委員会 2000年
- (7)『老丁田遺跡発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1998年

出土遺物観察表（土器）

掲番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
7-1	B63Gr SD31	上部器 坏	-	4.6	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／淡褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-2	C63Gr SD31	上部器 高坏	-	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／朱色 内／朱色 底／淡褐色	密	良好	外面と朱塗り
-3	B63Gr SD31 1期	須恵器 高台付 坏or瓶	-	11.4	-	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り	灰色	密 1mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	
-4	C63Gr SD31	須恵器 壺	-	-	-	内外面ナデ	灰色	密	良好	外面に自然釉がかかる 内面に接觸斑痕あり 火帶跡有り
-5	B63Gr SD31 C63Gr SK31	須恵器 壺	-	-	-	外／タタキ 内／ナデ、当て具痕あり	外／淡緑灰褐色 内／灰色 底／灰色	密 石英・雲母を含む	良好	外面に自然釉がかかる
9-1	B58Gr SD34	十輪器 鉢	-	-	-	外／斜め方向ハケ 内／斜め方向ハケ 旋方向擣目	淡褐色	密 石英・雲母・褐色砂粒を含む	良好	
-2	B58Gr SD34	須恵器 高台付 壺	-	-	-	内外面ナデ	灰色	密	良好	焼成時変形あり
14-1	C59Gr SK29	上部器 坏	-	6.9	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲母・全雲母を含む	良好	
-2	C59Gr SK29	須恵器 壺	-	-	-	内外面ナデ	淡灰色	密	良好	
-3	C59Gr SK29	須恵器 壺	-	-	-	外／タタキ 内／ナデ、ケズリ	外／暗褐色 内／灰色 底／灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
16-1	B63Gr SK31	上部器 鉢	-	-	-	外／縱・横方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	密 褐色砂粒・石英を含む	良好	
-2	B63Gr SK31	土師器 坏	-	5.4	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／淡褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
18-1	C54Gr SK35	上部器 坏	11.3	4.35	7.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ナデ	褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	外面体部にスス付着 内外面に朱塗り痕あり
-2	C54Gr SK35	須恵器 壺	-	-	-	外／タタキ、一部タタキを 磨り消し 内／当て具痕	外／ぶい緑 灰色 内／灰色 底／灰褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
22-1	B54Gr SD33	朱佐土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 腹部下内ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-2	C59Gr SD32	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	

辨認番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
22-3	C60Gr SD30	土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 底部下外/縦方向ハケ 内/ケズリ	外/淡褐色 内/淡褐色 断/褐褐色	やや粗い 1mm 大の砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-4	B55Gr P04	土師器 甕	30.7	--	-	口縁部内外面ナデ 底部下外/縦方向ハケ 内/ケズリ	外/褐褐色 内/淡褐色 断/褐褐色	密 1mm 大の砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
-5	B60Gr 1号 B60Gr P03	土師器 坏	12.7	4.7	4.4	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	一部淡褐色
-6	C58Gr SK40	土師器 坏	12.4	4.7	4.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
-7	C59Gr P11	土師器 坏	--	5.1	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 1mm 大の砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	風化著しい 内面底部に指痕 圧痕残る
-8	C62Gr P03	土師器 坏	-	4.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/淡褐色 内/淡褐色 断/淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-9	C60Gr P02	土師器 坏	-	5.5	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/褐色 内/淡褐色 断/淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-10	C60Gr P04	土師器 坏	7.1	4.2	2.5	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 褐色粒子・石英を含む	良好	
-11	C60Gr P01	土師器 坏	12.3	--	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-12	C59Gr P10 B59Gr P09	土師器 坏	15.8	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面口縁部にスス付着
-13	C55Gr P02	土師器 坏	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	外/朱色 内/朱色 断/褐褐色	密 石英を含む	良好	内外面ともに朱塗り
-14	B54Gr SD33	土師器 瓢箪上巻	-	-	-	外/ナデ 内/ナデ	外/褐褐色 内/褐褐色 断/褐灰色	密	良好	内外面に指痕圧痕残る
-15	B61Gr P02	須恵器 壺	-	9.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	密	良好	外面に自然釉がかかる
-16	B63Gr SK32 上巻	須恵器 壺	-	6.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/灰色 内/灰色 断/淡灰色	密	良好	黒色の不純物付着
-17	C63Gr SK33	須恵器 高白付 坏	-	6.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密	良好	
-18	C59Gr P04	須恵器 坏	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密	良好	

探査番号	出土地点	器種	法 量(cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
22-19	B54Gr P01	須恵器 壺蓋	-	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密 1mm以下白色砂 粒・石英を含む	良好	輪状つまみあり
-20	C60Gr P04	陶器 高台付 瓶	-	6.4	-	外／ナデ 内／ナデ	外／淡緑灰色 内／淡緑灰色 断／褐色	密 1mm以下白色砂 粒を含む	良好	外面底部を除き、 淡緑灰色に施釉
-21	C59Gr P13	青磁 高台付 瓶	-	4.3	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／淡緑灰色 内／淡緑灰色 断／淡灰色	密	良好	外面底部を除き、 淡緑灰色に施釉
-22	C57Gr SK39	平瓦	-	-	-	外／ナデ 内／布目	外／淡灰褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	密 1mm人の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	
-23	C60Gr P03	土師器 ?	-	-	-	外／ナデ	淡褐色	密 1mm大の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	良好	片面に貼り付け 部が剥離した痕 跡あり 径1.05cmの孔あ り、見通はしない
-24	C55Gr SD35	土師器 管状上巻	-	-	-	ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英・雲母を含 む	良好	朱塗りの痕跡あ り
-25	C55Gr P04	土師器 土製支撑	-	-	-	ナデ	にぶい淡褐色	やや粗い 1mmの白色・褐 色砂粒・石英・雲母 を含む	良好	スス付着
24-1	B55Gr 造像向	土師器 甕	-	-	-	外／縱方向ハケ 内／横方向ハケ	褐色	密 1mm大の白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	
-2	B55Gr 2層	土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	淡褐色	密 1mm大の砂粒・石 英・雲母を含む	良好	II縁部内外面にス ス付着
-3	拂土巾	土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	密 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	
-4	C55Gr 2層	土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	
-5	B50Gr	土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-6	B63Gr 1層 C59Gr 1層	土師器 壺	13.3	7.4	3.4	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／未切り後、ナデ	淡褐色	密	良好	
-7	B61Gr 1層	土師器 壺	11.4	6.6	3.6	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／未切り後、ナデ	褐褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面底部を除き、 朱塗り痕あり
24-8	C60Gr 1層	土師器 壺	12.6	6.5	4.5	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転余切り	褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英・雲母を含 む	良好	外面全体にスス付着 外部部にスス付着 あり 24-12と同一個体の 可能性あり
-9	B61Gr 1層 造像面	土師器 壺	13.5	4.6	4.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転余切り	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	

種類番号	出土地点	器 種	法 量(cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
24-10	C60Gr 1層	土師器 壺	12.8	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	
-11	C69Gr 遺構面 小皿	土師器 小皿	11.0	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡橙褐色	密 褐色粒子・石英・雲 母・金雲母を含む	良好	
-12	C60Gr 1層	土師器 壺	11.4	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	褐色	密 石英を含む	良好	外面部に墨斑あり 24-8と同一個体の 可能性あり
-13	拂土中	土師器 壺	-	6.4	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	
-14	C63Gr 1層	土師器 壺	-	6.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-15	C63Gr 遺構面	土師器 壺	10.3	5.4	3.35	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ナデ	外／淡橙褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面部にスス付 着 外側に朱塗りの痕 跡あり
-16	B56Gr	土師器 小皿	7.4	5.0	1.25	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英・雲母・金雲 母を含む	良好	
-17	B56Gr 1層	土師器 小皿	7.6	4.9	1.65	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密	良好	外面部にスス付 着
-18	B61Gr	土師器 壺	-	5.7	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英・雲母・金雲 母を含む	良好	
-19	C61Gr 1層	土師器 壺	-	4.4	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／淡橙褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	
-20	C66～C64 側溝	土師器 小皿	7.05	3.7	1.7	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英・雲母を含 む	良好	
-21	C63Gr 1層 C66～C64 側溝	土師器 小皿	8.0	4.1	1.85	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英・雲母を含 む	良好	
-22	C55Gr 側溝	土師器 壺	-	4.2	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／静止糸切り	橙褐色	密 1mm以下の白色・褐 色砂粒・石英を含 む	良好	内面部に「木」 の墨書きあり
-23	C55Gr 側溝	土師器 鉢	-	-	-	外／上位はナデ、下位は 斜め方向ハケ 内／上位はナデ、下位は 横・斜め方向ハケ	淡褐色	密 褐色砂粒・石英を含 む	良好	内面にスス付 着
-24	C59Gr 1層	土師器 鉢	-	-	-	外／縱・横方向ハケ 内／横方向ハケ	外／淡橙褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母 を含む	良好	
-25	C55Gr 1層	土師器 鉢	-	-	-	内外面ナデ	灰褐色	密 1mm以下の白色砂 粒・石英を含む	良好	外面に自然釉が かかる

揮出番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎上	焼成	備考
			口径	底径	器高					
24-26	B55Gr	須恵器 坏	-	6.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転未切り	淡灰色	密	良好	
25-27	B55Gr 1層	須恵器 坏	-	6.3	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転未切り	灰色	密	良好	
-28	C55Gr 1層	須恵器 高台付 坏	-	8.8	-	外/ナデ 内/ナデ 底/未切り後、ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	
-29	拂土中	須恵器 高台付 坏	--	11.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	
-30	B57Gr 蓮瓣面	須恵器 高台付 坏	-	8.0	--	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転未切り	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
-31	B56Gr	須恵器 高台付 坏	-	8.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/未切り後、ナデ	淡灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	坏部外面に淡緑色の釉がかかる
-32	B61Gr	須恵器 高台付 壞	-	9.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/未切り後、ナデ	灰色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
-33	C60Gr 蓮瓣面	須恵器 坏	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡灰色	密	良好	軟質
-34	B54Gr 1層	須恵器 高坏	-	-	-	坏部 外面ナデ 脚部 内外面ナデ	外/灰色 内/淡褐色 断/淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	脚部に三角形透かし孔2ヶ所にあり
-35	B-C54Gr	須恵器 土玉?	-	-	-	外/ヘラ状工具による丸取り 内/ナデ、指痕压痕残る	外/暗灰色 内/暗灰色 断/灰褐色	密	良好	両端欠損
-36	C63Gr 1層	陶器 鉢	-	-	-	外/ナデ 内/ナデ 底/ナデ	外/淡赤褐色 内/茶褐色 断/灰色	密	良好	外面に自然釉がかかる
-37	B57Gr 1層	青磁 皿	9.8	4.0	2.6	外/ナデ 内/ナデ	外/淡緑色 内/淡褐色 断/灰白色	密	良好	
-38	C60-C64 側溝	青磁 高台付 碗	-	7.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転未切り	外/淡褐色 内/淡褐色 断/淡灰色	密	良好	内面底部に線、文様あり
-39	C55Gr 2層	平瓦	-	-	-	外/タキ 内/ナデ	外/橙褐色 内/褐色 断/棕褐色	密 1mm以下の白色・褐色砂粒・石英・雲母を含む	良好	部分破片
-40	C60Gr 1層	平瓦	-	-	-	外/ナデ 内/本目	淡灰褐色	密 石英を含む	良好	部分破片

出土遺物観察表（その他の遺物）

博物館番号	出土地点	遺存状況	製品名	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
23-26	C55Gr P03	ほぼ完形	砥石	細粒凝灰岩	6.9	3.9	1.9	63	両面に使用痕残る
-27	B59Gr SK28 下層	片端欠損	砥石	流紋岩質細粒凝灰岩	5.5	5.7	2.5	106	4面に使用痕残る
-28	C62Gr P04	部分	柱根	杉	35.7	16.3	16.3	-	
-29	C60Gr P05	部分	柱根	杉	31.5	9.1	9.1	-	
-30	C57Gr SK39	部分	曲物	杉	23.5	5.6	0.4	-	鉄器による切れ込みがある
25-41	C59Gr 1層	両端欠損	砥石	流紋岩	5.6	4.9	2.9	107.5	4面に使用痕残る
-42	B55Gr 遺構面	ほぼ完形	砥石	緑色凝灰岩	12.1	3.4	1.7	104	5面に使用痕残る
-43	B57Gr 1層	両端欠損	砥石	流紋岩	4.7	3.6	2.3	45	4面に使用痕残る
44	C63Gr 遺構面	部分	砥石	珪長岩	4.0	5.5	2.05	55	2面に使用痕残る
25-45	C60Gr 1層	両端欠損	砥石	石英安山岩	9.4	6.8	5.1	540	4面に使用痕残る
-46	C59Gr 1層	完形	不明	鉄	8.0	2.1	2.1	65	断面三角形
-47	C59Gr 1層	片端欠損	不明	鉄	7.3	1.0	0.65	15	
27-1	C54Gr 1層	完形	古鏡	銅	2.4	2.4	0.1	3	表／草宋通寶 裏／無文

V. 5Gr ~ 53Gr の発掘調査

IV. 5Gr ~ 53Gr の発掘調査

1. 発掘調査の概要

調査地は道路拡幅部分にあたり、これまで水田として利用されていた地域である。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの水田耕土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北ともに5m間隔のグリッドを設定し、西から5Gr ~ 53Grとした。なお、調査地は一部に道路を挟んで南北にまたがっているが、この既設道路部分については1996年に宮松地区圃場整備事業に伴って発掘調査が行われている。調査面積は、平成13年度が道路拡幅部分の南側幅4m、北側が幅1m、長さ約150mの約750m²、平成14年度が道路新設部分の幅10m × 55mの約550m²であり、総発掘面積は約1300m²である。発掘調査は、平成13年（2001）8月6日に開始し、平成14年（2002）8月2日に終了している。

層序（第28図・第31図～第33図）

調査区が東西に長いため、堆積土は一様ではなく、若干異なった様相を示している。5Gr ~ 31Grでの基本的な層序は、耕作土を除くと上層から褐色粘質土、褐灰色土、褐色粘土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。また、12Gr ~ 22Grにかけては盛土されているために上層に堆積する層は大きく削平を受けている。

一方、32Gr ~ 53Grにかけての基本的な層序は、耕作土を除くと上層から灰色土、暗灰色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達する。なお、堆積土中には褐色粒子を多く含み、基盤層は西に向かって粗く、30Gr付近からは細かくなつて黄褐色砂質土へと変化している。

遺構は、すべて基盤層の上面において検出しておらず、この面から時期の異なる遺構が検出されている。このことから、基盤層の上面に堆積する以前にかなりの削平を受けているものと考えられる。

遺構（第28図～第30図）

遺構は、溝状遺構33、土坑状遺構25のほかピット状の遺構を多数検出している。古墳時代前期前葉から近世に至るまでのものが複雑な切合関係をもつて検出されており、時代的にも多岐にわたっている。中心となる時期は12～13世紀にかけての中世期であるが、そのほか古墳時代前期前葉、奈良時代から平安時代初期頃、近世の遺構と時期的に区分できる。

古墳時代前期前葉頃の遺構としては、水路あるいは集落を囲繞する環濠と考えられるSD06がある。また、旧河道からも当該期の遺物が多く出土している。奈良時代から平安時代初期頃にかけての遺構には、水路あるいは旧河道と考えられる溝1～溝5、建物跡の区画を示すSD15～SD17、井戸と考えられるSK12やSK21などが検出されている。中世期の遺構は最も多く、水路と考えられるものにはSD20・SD21・SD25・SD26がある。このうち、SD20・SD21・SD26からは鉄滓が出土しており、鍛冶関連施設に伴う溝である可能性をもつ。井戸跡と考えられるものにはSK16・SK20、土壙墓にはSK18などが検出されている。近世の遺構は少ないが、SK05・SK07の土壙墓を検出している。いずれも人骨とともに櫛や数珠玉を副葬するもので、当該期の墓制を知る上で貴重な資料となっている。そのほか、ピット状遺構には掘立柱建物跡であるSB01や堀あるいは構として機能して

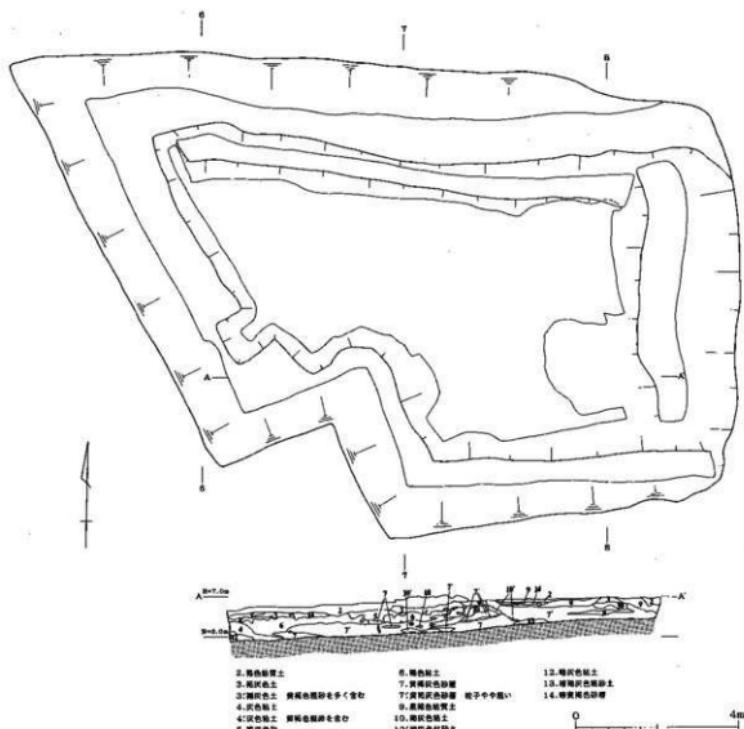
いたと考えられる柱穴列なども検出されている。

遺 物

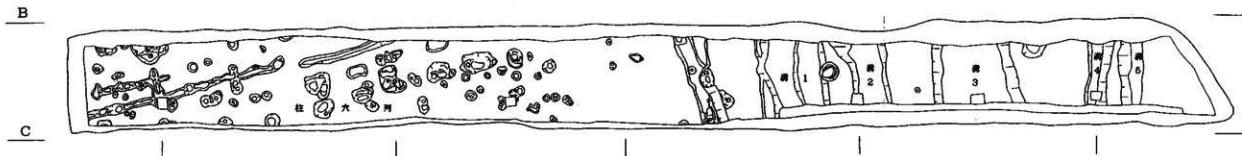
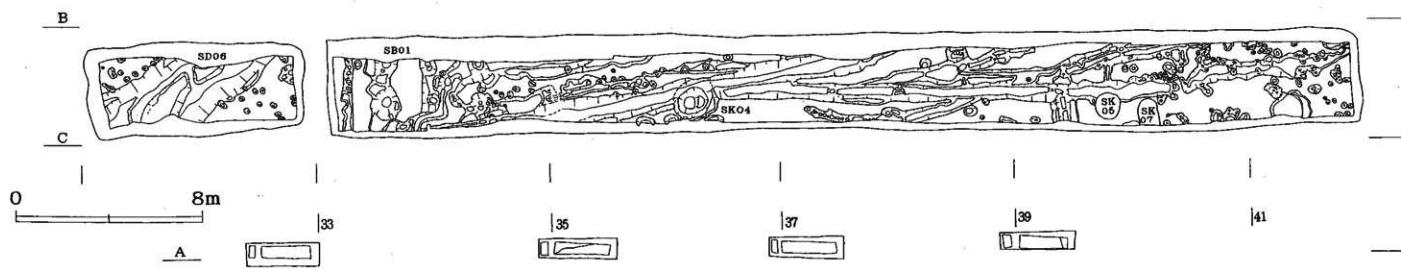
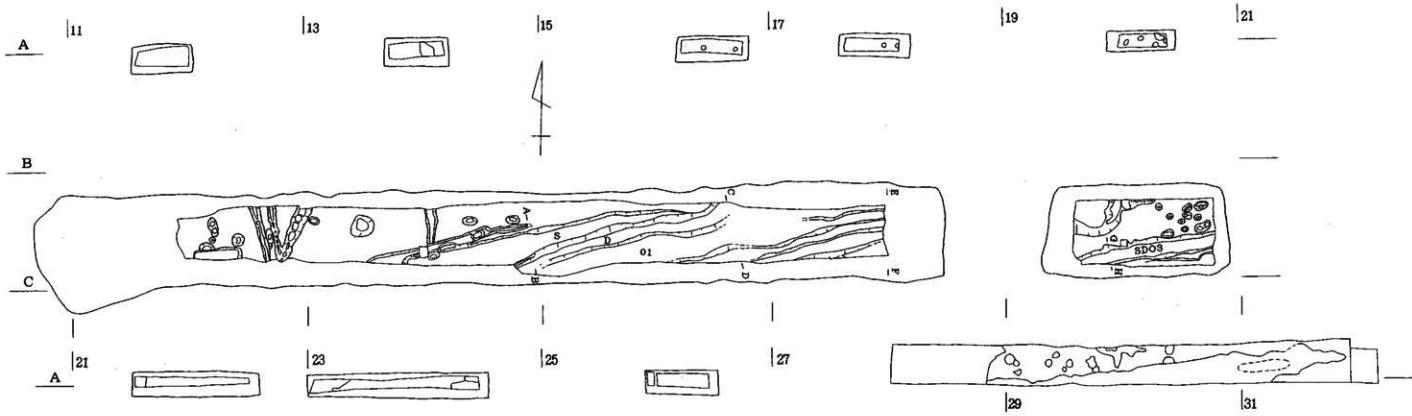
遺物は基盤層上面に堆積しているすべての層に包含しており、中世土師器を中心として弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、磁器、陶器などの土器のほか、石器や木製品も出土している。出土量は多く、コンテナ 50 箱分にも及んでいる。

弥生土器には、壺や壺の頸部にヘラ描直線文や胴部に斜軸木葉文を施した前期後葉頃のものが多く出土しており、出雲平野では稀少な資料となっている。古式土師器は古墳時代前期前葉頃のもので、中には畿内系や西部瀬戸内系のものも出土している。

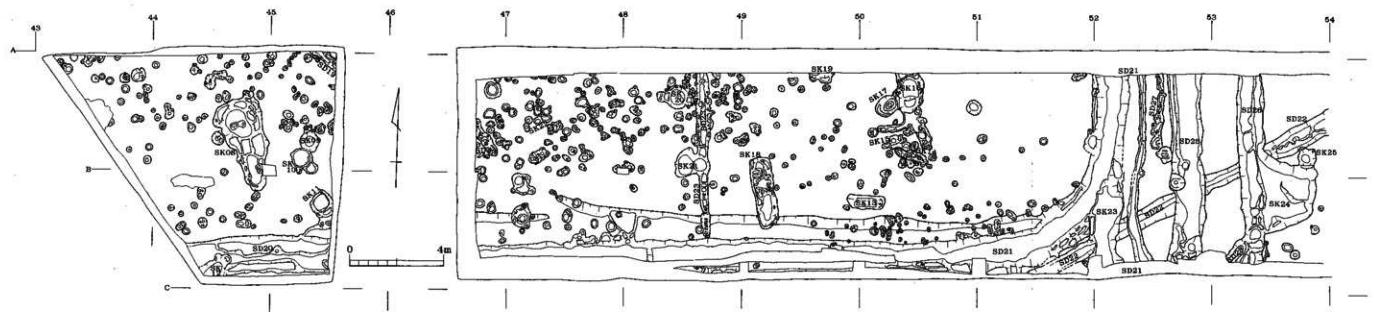
特異な遺物としては、古瓦や鉄滓、轆の羽口がある。古瓦には時期の異なるものが出土していることから、この近辺に古代から中世期にかけての古代寺院あるいは官衛施設の存在を示すとともに、何回かの建て直しが行われた可能性がある。鉄滓は分析の結果、精錬鍛冶滓の可能性が強いものとされており、近辺で小鎌冶が行われていたことが窺える。



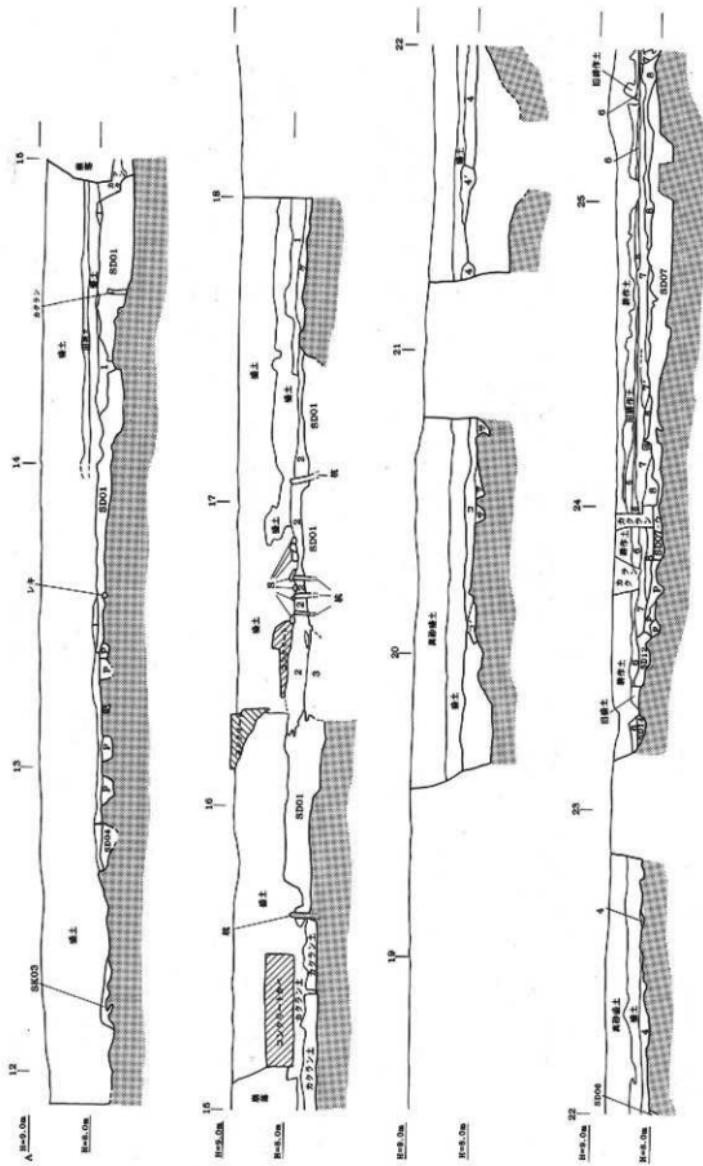
第 28 図 5Gr ~ 8Gr 遺構配図



第29図 11Gr～41Gr 遺構配図

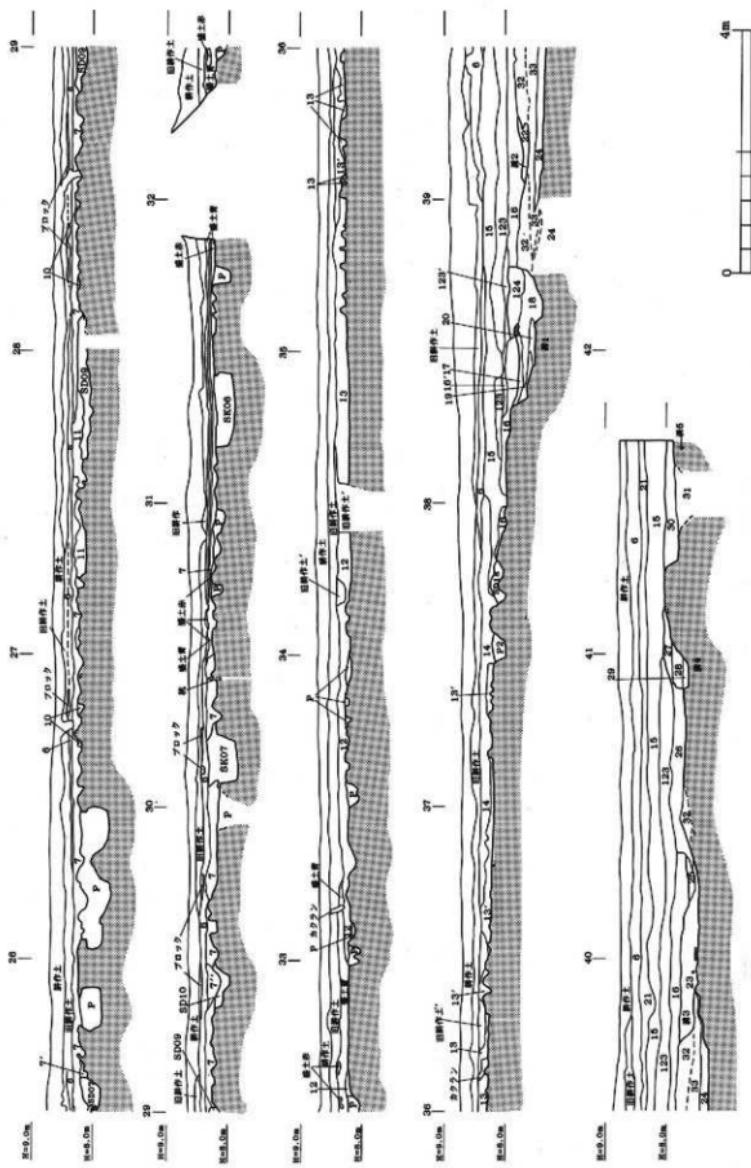


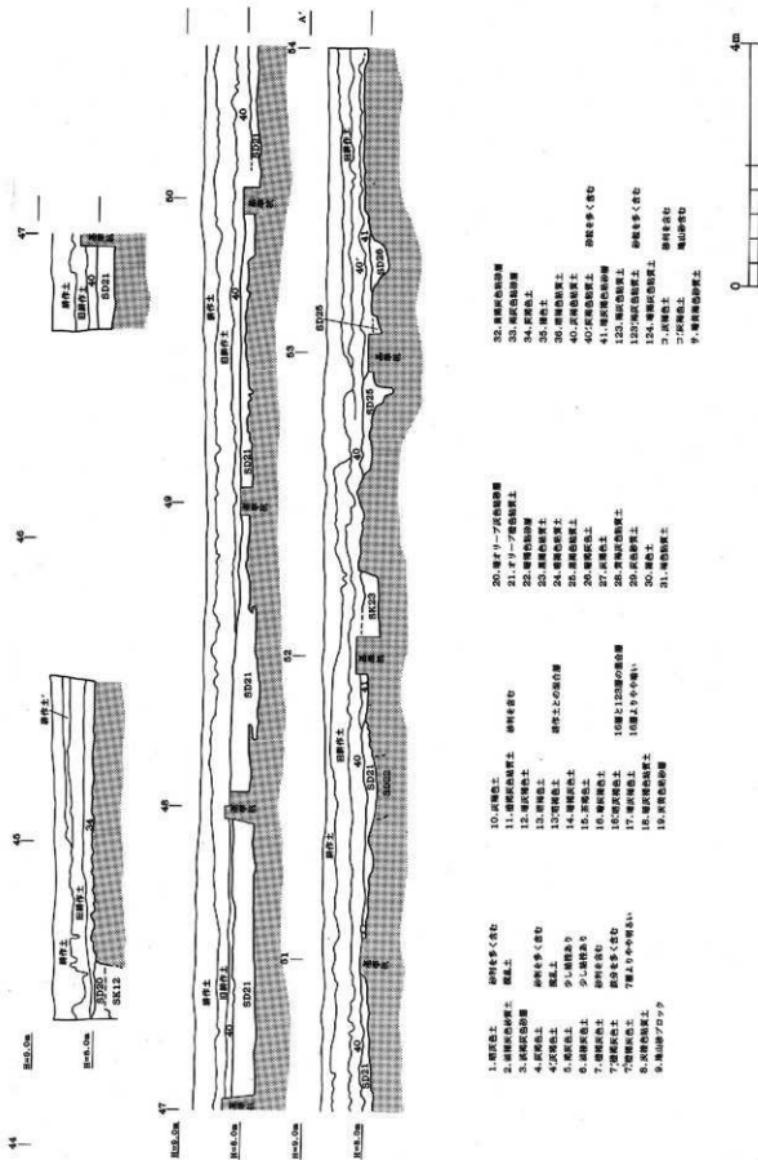
第30図 43Gr～53Gr造構配図



第31図 11Gr～53Gr堆積土層図(1)

第32図 11Gr～53Gr堆積土図(2)





第33図 11Gr～53Gr 増積土層図 (3)

2. 遺構と遺物

旧河道（第34図・第35図）

調査区の西端、5Gr～8Grにかけて検出した溝状遺構で、遺構の基軸は南南東—北北西方向に伸びている。また、両端ともに調査区外へと達してさらに伸びるが、検出した状況からは溝の肩部は検出できず、調査区全体が旧河道内にあたるものと考えられ、少なくとも15m以上の幅を有するものと推察される。

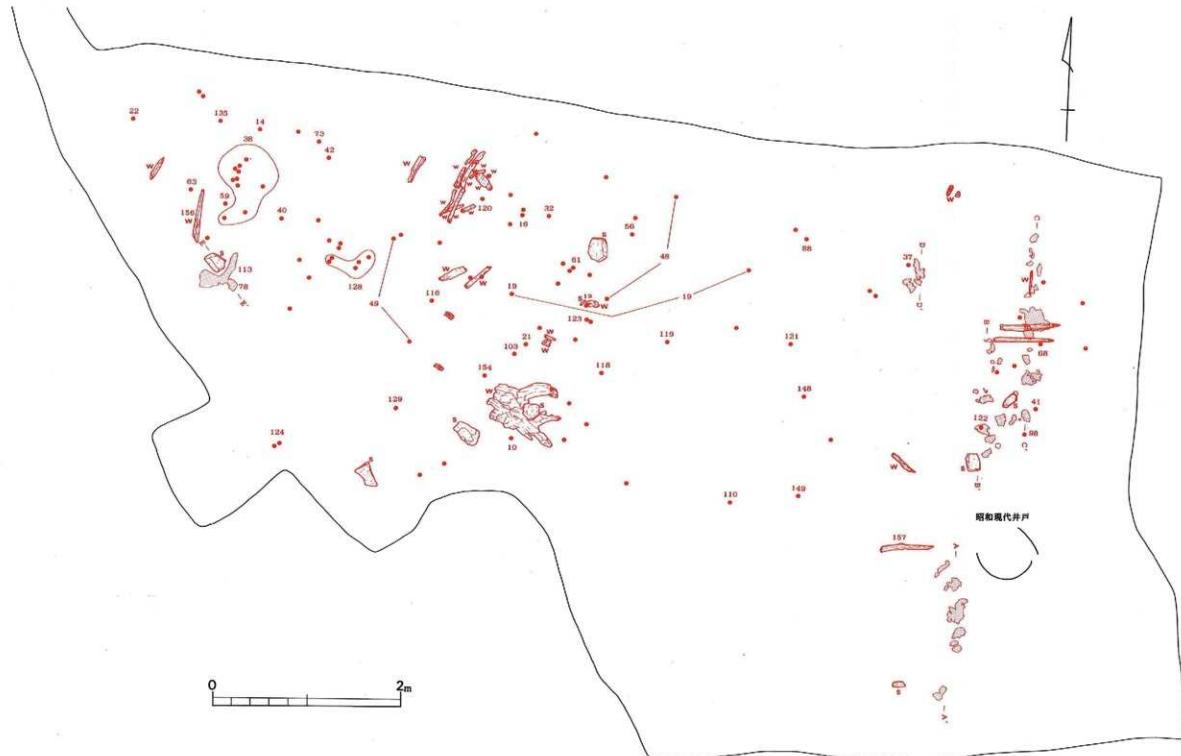
覆土には上層に褐色粘質土、褐色色土、中層には褐灰色砂や褐色粘土、下層には黄褐灰色砂層や暗黃褐色砂層が堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。堆積土のうち7層とした層位より下面が純粋な川跡で、その上層に堆積している砂質土や粘質土は、澱みの状態であったと考えられる。また、7層下面の荒砂は細砂と同じ川の流れで、この砂層中には三瓶の砂が混入していることが注意される。これは、神戸川から直接流れてきたものではなく、古く縄文時代に三瓶山の噴火によって神戸川に堆積し、その当時の地山であった部分が流れによって削られたために含まれているものであろう。近辺の山の礫がほとんど含まれていないため、近辺の山から流れるような川または神戸川の支流とかではなく、微高地の縁辺を雨または流水によって流れていたもので、この旧河道は自然堤防と自然堤防の間の谷に流れていたものと考えられる。¹¹⁾

遺物は、上層から下層まではほぼ万遍なく出土している。検出レベルは地形と同様に東側よりも西方に向かって低くなる傾向にあり、位置的には東西端での出土量が多く、古式土器を中心として弥生土器や土師器、須恵器のほか木製品なども出土している。このうち、古式土器が最も多く出土しており、器種にも壺、壺、器台、高壺、鉢などがあり、バラエティーに富んでいる。これらは、古墳時代前期前葉頃に相当する資料である。角田遺跡においては、後述するSD06を除けば当該期の遺物がほとんど出土していないことから、南に位置する宮松遺跡との関連が指摘される。また、古墳時代後期頃の遺物の出土量も多く、当該期についても同様である。その他、弥生土器は前期後葉のものが数点検出されている。また、木製品には流木も混入しているものの、中にはしがらみ状に配置されるものや杭、柄の実なども認められる。

以上のような遺物の出土状況から推察すれば、この旧河道は古墳時代前期前葉頃からしだいに埋まり始め、その際にさまざまな時期の遺物を包含したものと推定される。なかでも古式土器が中心であることは、この時期に大規模な洪水が起きて流されてきた可能性もある。

旧河道の出土遺物（第36図～第45図）

第36図-1は、弥生土器壺である。頸部から口縁部にかけて緩く外反し、口縁端部は平坦におさめている。外面頸部には2条の凹線文が施され、その上位はハケ、内面はナデによる調整が行われている。2は、弥生土器壺あるいは壺の胴部であろう。外面には2条の凹線文を施し、その下位はハケ、内面はハケの後、ナデによる調整が行われている。3も弥生土器壺あるいは壺の胴部で、外面には3条以上からなる凹線文、その下位はハケ、内面はナデによる調整が行われている。4は、外面に斜軸木葉文が施され、内外面ともにナデによる調整が行われている。以上のような弥生土器は、松本編年I-3～I-4様式に相当する資料と考えられ、弥生時代前期後葉のものであろう。



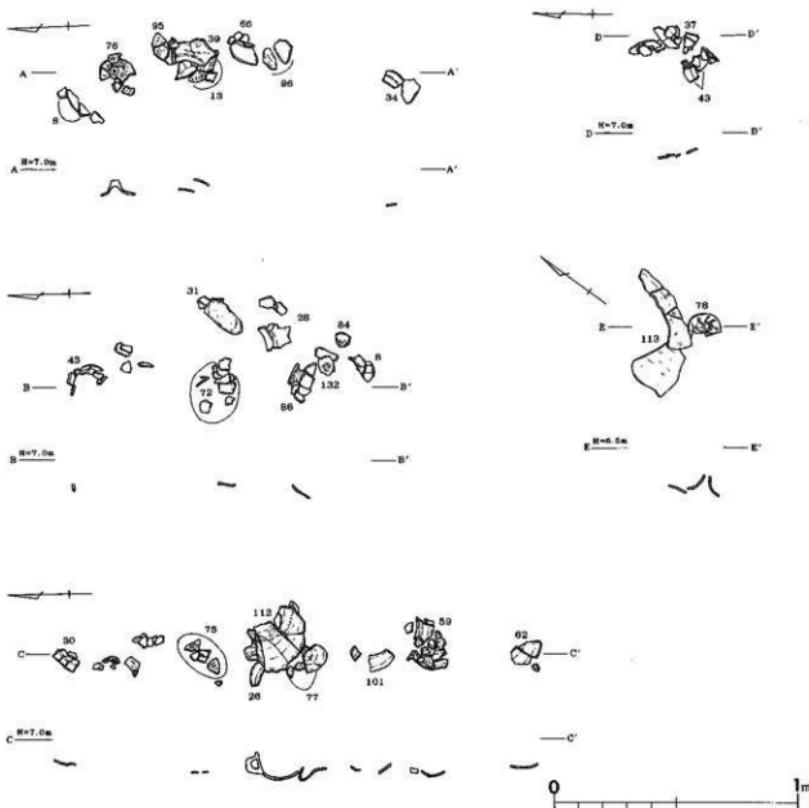
H=7.0m

H=0.0m

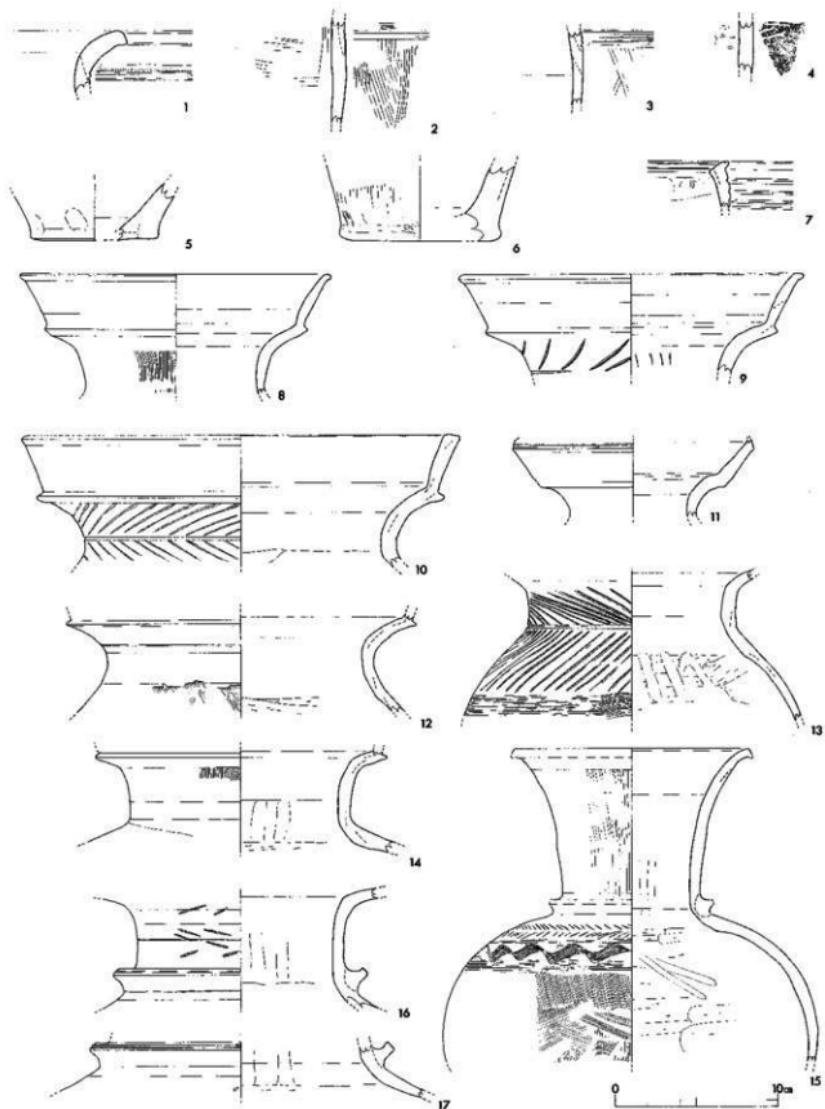
第34図 旧可道遺物出土状況実測図(1)

5・6は、弥生土器甕あるいは壺の底部である。6は、外面の一部にはハケによる調整が認められる。7は、弥生上器鉢である。口縁端部は外方に突出して平坦におさめ、平坦面には3条の凹線文が施されている。また、外面にも3条以上の四線文が施され、内外面ともナデによる調整が行われている。松本編年II-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期前葉頃のものであろう。

8～17は、古式土師器の壺である。8は、複合口縁の稜は水平方向に突出するが、やや鋭さを欠いている。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部はほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、外面頸部はハケによる調整が行われている。9は、外面頸部にはヘラ状工具によって斜線文を施している。口縁端部は外反してほぼ平坦におさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。10は、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内



第35図 旧河道遺物出土状況実測図(2)



第36図 旧河道出土遺物実測図(1)

外面ともにナデ、外面頸部には一条の凹線を挟んで綾杉文を巡らせてある。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。11は、複合口縁の稜は突出せず、口縁端部は外傾して平坦におさめるという特異な壺である。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。12は頸部付近の破片で、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。13は、外面頸部に一条の凹線を挟んでヘラ状工具による綾杉文を施し、胴部はハケによる調整が行われている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。14はやや長めの頸部を有し、外面はハケとナデ、内面はケズリによる調整が行われている。15は、直口壺である。口縁部と頸部の境には明確な段を有して口縁部は直立して立ち上がり、端部は外反して平坦におさめている。口縁部外面は縱方向のミガキ、内面はナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。頸部下外面は上位に綾杉文、その下にはクシ状工具によって凹線と波頂間の広い波状文が施され、その下位はハケによる調整が行われている。16は長めの口頸部を有し、一条の突帯を貼り付けている。外面口縁部には貝殻腹縁による綾杉文状の文様を巡らせ、口縁端部は外反している。内外面ともナデによる調整が行われている。17も同様な調整が行われ、同一個体の可能性をもつものである。以上のような古式土師器の壺は、草田編年7期に相当する資料と考えられ古墳時代前期前葉頃のものであろう。

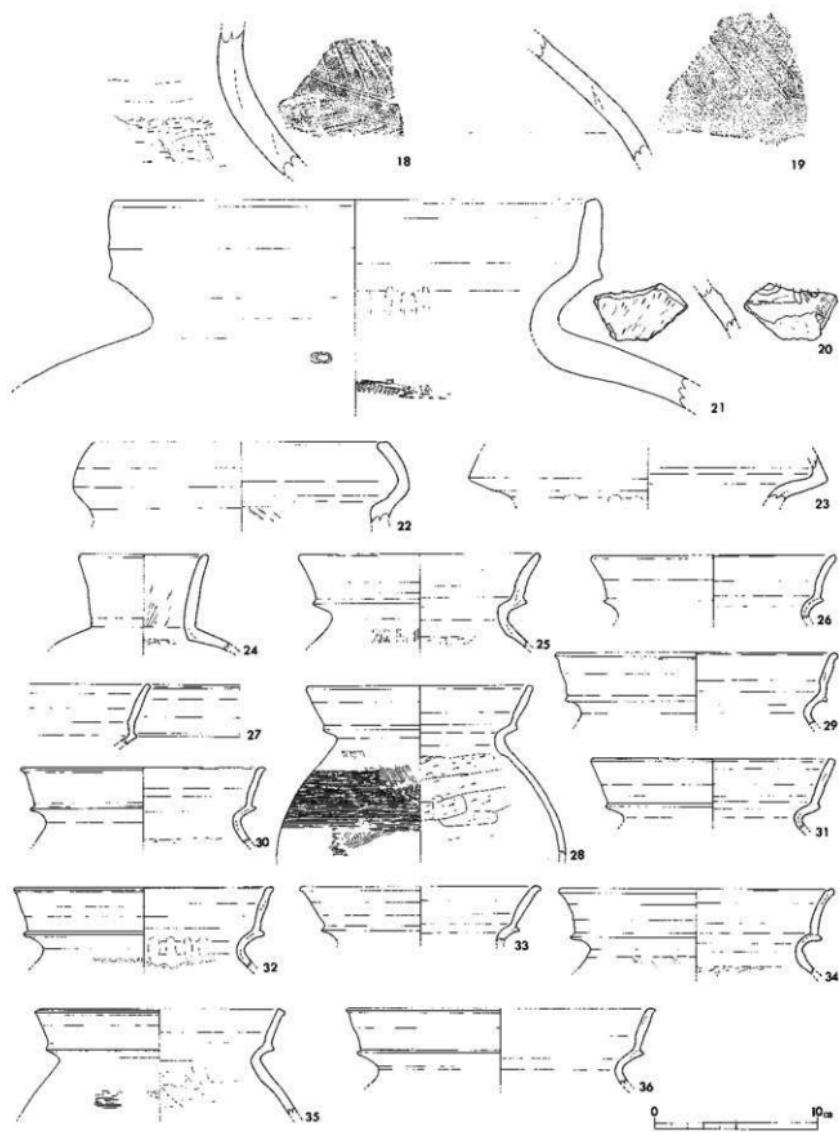
第37図-18～24も古式土師器壺である。18は頸部付近の破片で、外面には2条の凹線文を挟んで綾杉文を施している。内面頸部はミガキ、頸部下はケズリによる調整が行われている。19は、外面に一条の凹線文を挟んで綾杉文を施し、内面はケズリによる調整が行われている。外面の綾杉文が互いに交差していることが特徴である。20は、壺の胴部であろう。破片のために明確ではないが、外面には竹管文とスタンプ状の文様が施され、内面はケズリによる調整が行われている。21は、器壁の厚い大形の壺である。複合口縁の稜は鋭さを欠き、口縁端部はやや内傾して平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、外面頸部下には竹管文が認められる。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。22は内済する口縁部を有し、口縁端部はほぼ平坦におさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。器形から西部瀬戸内系の土器と考えられ、胎土も在地のものとは異なっている。23は22と同様に内傾する口縁部を有し、内外面ともにナデによる調整が行われている。なお、内面には焼成時の黒斑が認められる。24は、直口壺である。口縁部は直立し、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ壺は、古墳時代前期前葉頃に相当する資料と考えられ、このうち22・23については西部瀬戸内系の搬入品と考えられるものである。

25～36は、古式土師器甕である。25は複合口縁の稜は水平方向に突出するが、やや鋭さを欠いている。口縁端部は丸くおさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。26は複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。27も同様な調整が行われている。28は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はクシ描直線文とハケ、内面はケズリによる調整が行われている。29は、口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。30は、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外方に折り曲げて丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。31は、複合口縁の稜は鋭さを欠き、口縁

端部はほぼ平坦におさめている。32は、複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。33は、口縁端部が外反して丸くおさめている。34は、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外反して平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。35は、複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はクシ描直線文、内面はケズリによる調整が行われている。36は、口縁端部を平坦におさめるものである。以上のような古式土師器の壺は、25～29については草田6期、30～36は草田7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期前葉頃のものであろう。

第38図-37～50も古式土師器壺である。37は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はクシ描直線文、波状文とハケ、内面はケズリによる調整が行われている。38は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は平坦におさめている。頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。39は、複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。頸部下外面はクシ描直線文とハケ、内面はケズリによる調整が行われている。40は、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。頸部下外面はクシ描直線文、内面はケズリによる調整が行われている。41は、複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。42は、複合口縁の稜は水平方向に突出するが、鋭さを欠いている。器壁は厚く、口縁端部は平坦におさめている。43は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。44は小形の壺で、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部内面には指頭圧痕が認められ、下位はケズリによる調整が行われている。45も小形の壺で、複合口縁の稜は鋭さを欠き、口縁端部は丸くおさめている。46は胴部の器壁が厚い小形の壺である。複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。47は、古式土師器壺あるいは壺の口縁部であろう。複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は平坦におさめている。外面はナデと縱方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。このように口縁部外面が縱方向のミガキによって調整されるものは、類例が少ない。48・49は同一個体と考えられるもので、複合口縁の稜は鋭さを欠き、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はクシ描直線文とハケ、内面はケズリによる調整が行われている。50は、複合口縁の稜は鋭さを欠き、口縁端部は外方に向けて平坦面を作り出している。内外面ともにナデによる調整が行われている。以上のような古式土師器の壺は、44・45は草田6期、37～43、46・47は草田7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期前葉頃のものであろう。49・50については複合口縁の稜が形骸化した段階にあるものと考えられ、古墳時代前期中葉頃に相当する資料であろう。

第39図-51～61は、壺である。51は単純口縁で頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が

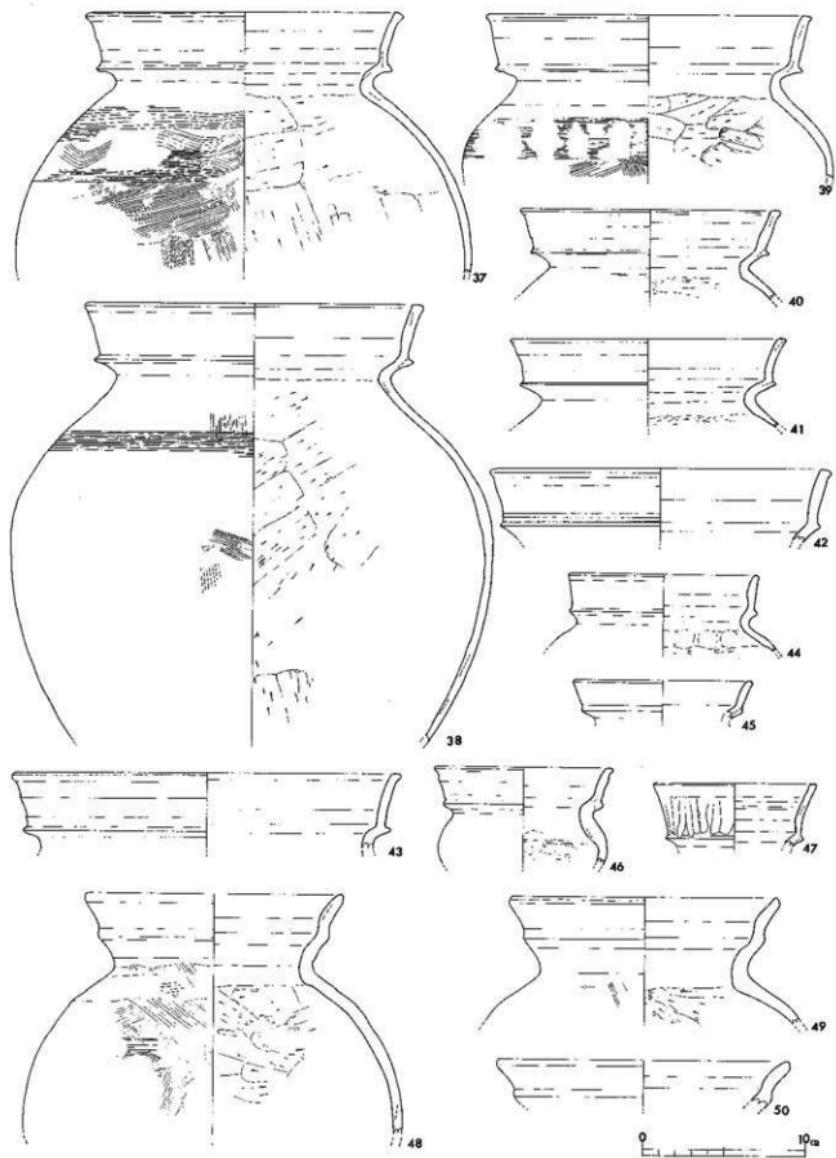


第37図 旧河道出土遺物実測図 (2)

行われている。畿内布留式の系統を引くもので、搬入品と考えられる。52も単純口縁の壺で、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。胎土は在地のものと違いが認められないことから、畿内系の壺を模倣したものであろう。53は、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。54は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。胎土は在地のものと考えられるが、単純口縁で畿内系の壺を模倣したものであろう。55も54と調整は同様で、同一個体である可能性が強いものである。56は、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は細かなハケ、内面はケズリによる調整が行われている。57も56と調整は同様で、同一個体である可能性が強いものである。58は、頸部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。56などと比べ、大きく内湾していることが特徴である。59は、頸部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。口縁部の外面はナデ、内面の一部にはハケによる調整が認められる。頸部下外面は縱・斜め方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。60は、頸部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。61は、複合口縁の壺である。複合口縁の稜は水平方向に突出するが、やや鋭さを欠いている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面にはクシ描直線文と一条の凹線が施されている。頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。

以上のように、旧河道からはさまざまな形態的特徴をもつ壺が出土している。51・52・54・55については単純口縁で畿内系の壺と考えられるが、胎土や胴部の調整が在地の土器と相違が認められないことから、人的交流により製作されたものと考えられる。このうち51については、搬入品の可能性をもつものである。時期的には古墳時代前期前葉頃に相当する資料であろう。53・56～60については、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁中位にわずかな稜をもつもので、古墳時代前期後葉頃に相当する資料と考えられる。このうち53は古い様相を示しており、やや先行するものであろう。当該期の遺物は、市内中野西遺跡^{〔四〕}や井原遺跡^{〔五〕}などからも出土している。また、61は複合口縁を有する古式土師器であるが、当該期の壺胴部に凹線を施すものは類例が少ない。

62～65は、壺あるいは壺の胴部である。62は、胴部がかなり張り出して球形状を呈するものと考えられ、外面上位は8本単位からなるクシ描直線文、下位はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。63は器壁が厚く、外面にはハケと波頂間が大きく開いた形骸化した波状文が施され、内面はケズリによる調整が行われている。64は、外面はクシ描直線文とハケによる調整が行われ、一条の凹線によって波状文を意識した曲線を施している。内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。65は、外面は横方向のハケとヘラ状工具による刺突文を巡らせ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような部分破片からは明確な時期について判断すること



第38図 旧河道出土遺物実測図(3)

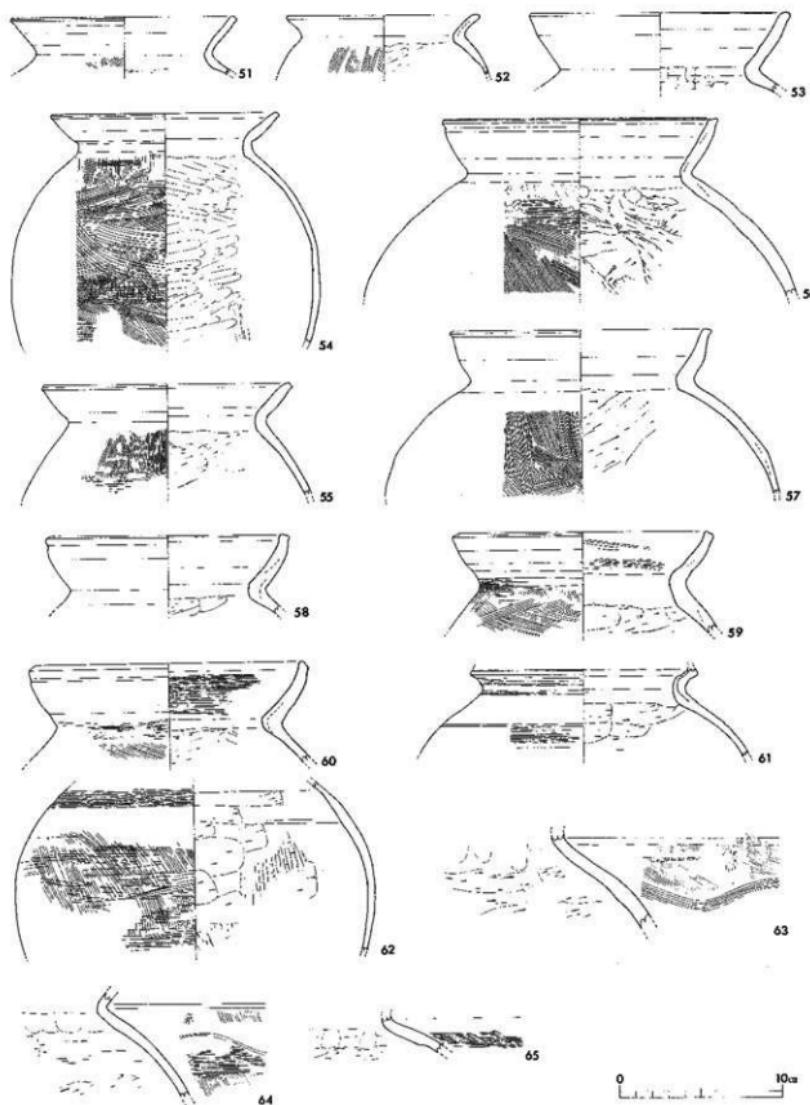
は難しいが、外面がクシ描直線文や波頂間の開いた波状文が施されるものについては、古墳時代前期前葉から前期中葉にかけてのものと考えられる。

第40図—66は、前述した第39図—61と同一個体と考えられる古式土師器の壺で、胴部外面上位には一条の凹線が施され、下位はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。67も古式土師器壺の胴部と考えられ、外面にはハケと2本単位のクシ状工具によって波頂間の開いた波状文を施し、内面はケズリによる調整が行われている。68は底部付近の破片で、外面はハケ、内面上位はケズリ、下位には指頭圧痕が認められる。69は、平底を有する壺あるいは壺の底部である。外面はハケとナデによる調整が行われるが、内面の調整は風化が著しく不明である。旧河道からは少量ながら弥生時代前期の遺物も出土していることから、当該期のものである可能性がある。70は、古式土師器壺の底部であろう。かすかに平底を意識したものと考えられ、外面は細かなハケ、内面はケズリと指頭圧痕が認められる。71は平底を有する壺で、外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような壺あるいは壺は部分破片であるが、69については弥生時代前期、66～68、70・71については外面の調整や器壁の薄さなどから古墳時代前期前葉頃に相当する資料と考えられる。なお、71は平底を有するもので、やや後出するものであろう。

72は、古式土師器高坏の坏部である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反して口縁端部は丸くおさめている。風化が著しいが、外面はナデ、内面はミガキによる調整が一部に認められる。73・74は、高坏の坏底部付近の破片である。73は、内外面ともに丁寧なミガキによる調整が行われ、坏部と脚部とは円盤充填法によって接合されている。74は、外面はナデと細かなハケ、内面はミガキによる調整が行われている。坏部と脚部とは円盤充填法によって接合され、円盤には小孔が穿たれている。72～74の高坏は部分破片であり、時期的な判断をすることは難しいが形態的特徴とその他の出土遺物から推察すれば、おおよそ古墳時代前期頃に相当する資料と考えられる。

75～78は、高坏の脚部から裾部にかけての破片である。75は裾部が大きく開き、脚端部はやや内傾して平坦におさめている。裾部から脚部にかけての外面は縦方向の細かなハケ、裾部と脚部の間には、径7mmの透かし孔が認められる。裾部内面は横方向のハケ、脚部はケズリによる調整が行われている。坏部と脚部とは円盤充填法によって接合され、円盤には小孔が穿たれている。76は、裾部が大きく開き、脚端部は丸くおさめている。裾部から脚部にかけての外面は縦方向の細かなハケによる調整が行われ、裾部と脚部の間には径9mmほどの透かし孔が4ヶ所に認められる。裾部内面は横方向のハケ、脚部内面はケズリによる調整が行われている。77は裾部が大きく開き、脚端部はやや内傾して平坦におさめている。外面裾部は横方向、脚部は縦方向のミガキによる調整が行われている。内面裾部はナデ、脚部はケズリによる調整が行われている。78は裾部の開きが非常に大きく、脚端部は内傾して平坦におさめている。外面裾部から脚部にかけては全面に縦方向のハケ、内面裾部は横方向のハケ、脚部はケズリによる調整が行われている。以上のような高坏は、外面の調整がハケにより行われるものとミガキにより調整されるものが存在するものの、おおよそ草田6期から7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期前葉頃のものであろう。

79～81は、高坏の脚部破片である。79は、脚部外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調



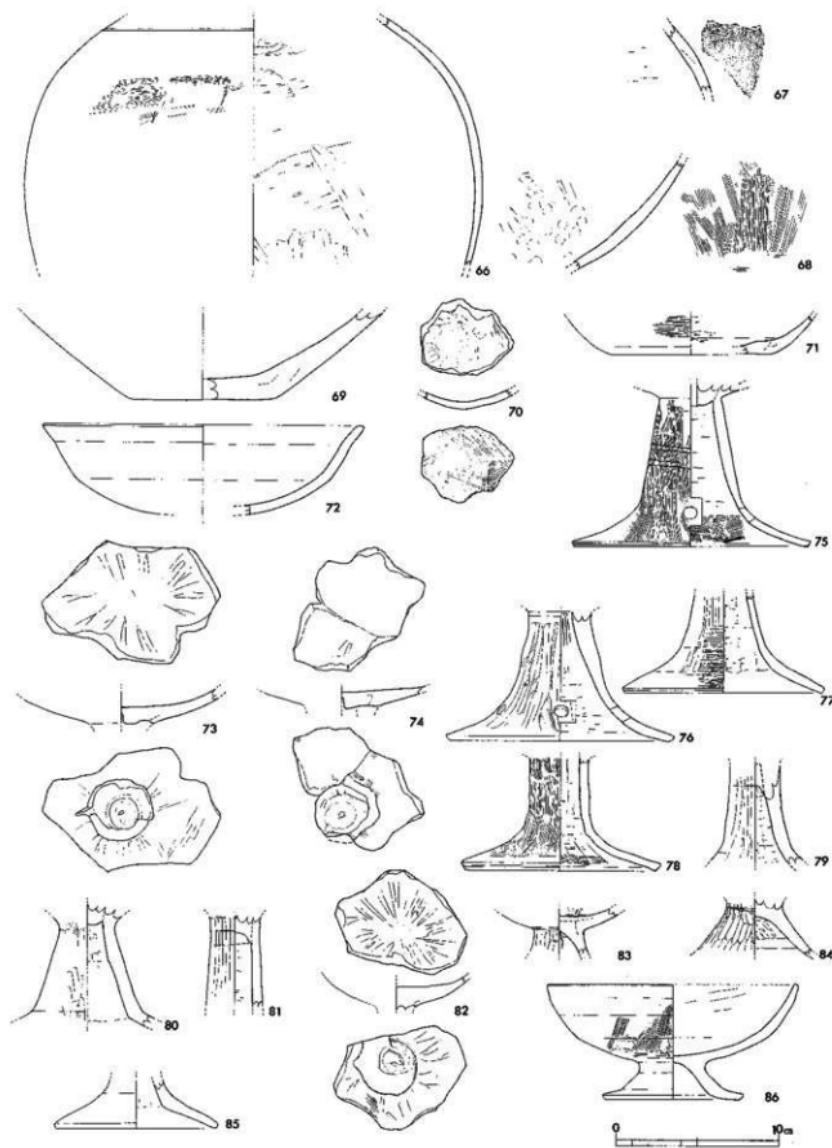
第39図 旧河道出土遺物実測図(4)

整が行われ、坏部と脚部とは円盤充填法によって接合されている。80は外面が縦方向のミガキ、脚部内面上位はケズリ、下位はナデによる調整が行われている。82は、高坏の坏部破片で、外面はハケとミガキ、内面はミガキによる調整が行われている。83は脚部と坏部付近の破片で、坏部と脚部とは付加法によって接合されている。坏部外面はハケとナデ、坏部内面と脚部外面はミガキによる調整が行われている。以上の高坏についても、古墳時代前期前葉頃に相当する資料と考えられる。

84は、低脚坏であろうか。脚部は大きく開き、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。85は、低脚坏の脚部であろう。脚端部はやや内傾して平坦におさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。86は、低脚坏である。内湾しながら立ち上がる深めの坏部を有し、口縁端部は丸くおさめている。坏部外面はナデとハケ、内面上位は横、下位は縦方向のミガキによる調整が行われている。脚部は短く外傾して開いて脚端部は丸くおさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。このような低脚坏は古墳時代前期前葉頃の資料と考えられるが、器壁が厚く、⁽⁴⁾坏部が深いという在地的な特徴をもつものである。市内では天神遺跡や井原遺跡からも同じような特徴をもつ低脚坏が出土している。

第41図-87～92は、古式土師器の低脚坏である。81は、坏部が外方に向けて扁平に大きく開き、口縁端部は丸くおさめている。坏部外面は縦方向のミガキ、内面は縦・横方向のミガキによって丁寧に仕上げられている。脚部は短く外傾して脚端部は丸くおさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。このようなプロポーションをもつ低脚坏は、出雲地方では一般的なもので、市内では山持川川岸遺跡などからも出土している。⁽⁵⁾88は坏部の破片で、内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。第40図-86と同様に深めの坏部を有するもので、外面はナデ、内面は縦・横方向のミガキによる調整が行われている。89は脚部と坏部との破片で、坏部は内外面ともにミガキ、脚部は内外面ともにナデによる調整が行われている。90は、87と同様に坏部が扁平に大きく広がるタイプのもので、坏部外面はナデ、内面はミガキによる調整が行われている。また、脚部は内外面ともにナデによる調整が行われている。91・92はいずれも脚部で、脚端部は丸くおさめ、内外面ともナデによる調整が行われている。以上のような低脚坏は、古墳時代前期前葉頃に相当する資料と考えられ、坏部には在地的な特徴をもつものも認められるが、脚部は内外面ともにナデによる調整が行われている。

93～98は、鼓形器台の受部破片である。93は、口縁端部が外反して平坦におさめている。外面上位は縦方向のミガキ、下位はナデ、内面は縦・横方向のミガキによる調整が行われている。94は、口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。95は、口縁端部が外反して丸くおさめている。外面はナデ、内面は縦・横方向の丁寧なミガキによって仕上げられている。96も95と調整はほぼ同様であるが、外面の稜は鋭さを欠いている。97は、94と同様に口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリの後にミガキによる調整が行われている。98は外面の稜が水平方向に鋭く突出し、外面はナデ、内面は丁寧なミガキによる調整が行われている。以上のような鼓形器台の受部については、口縁端部のおさめ方にはさまざまな特徴があるが、外面はナデ、内面はミガキによって調整されるのが一般的である。



第40図 旧河道出土遺物実測図(5)

99・100は、鼓形器台の筒部付近の破片である。99は短い筒部を有し、受部内面はミガキ、脚部内面はケズリ、外面はナデによる調整が行われている。100も筒部は短く同様の調整が行われるが、外面の稜は鋭さを欠いている。101は鼓形器台の脚部破片で、脚端部は外反して丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。102は、やや小形な鼓形器台の受部である。口縁端部は外方に折り曲げて丸くおさめている。外面は縦方向のミガキ、内面は縦・横方向のミガキによる調整が行われている。このように内外面ともミガキによって調整されるものは、市内天神遺跡からも出土している。93～102のような鼓形器台は、筒部が短縮する草田6期から7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期前葉頃のものであろう。

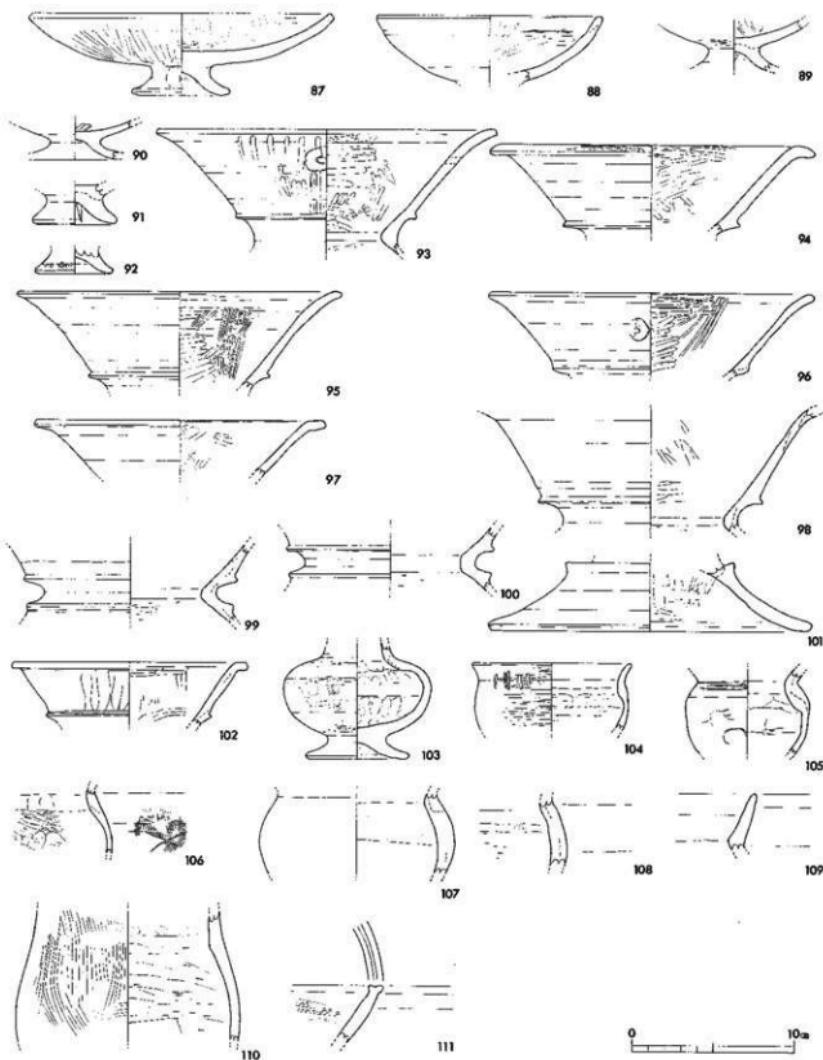
103は、台付の小形壺である。低脚壺と同様に内外面ともナデによる調整が行われ、脚端部は丸くおさめている。壺の胴部は大きく張り出して外面はハケとミガキ、内面は丁寧なナデによる調整が行われている。このような壺は、時期的には古墳時代前期前葉頃のものと考えられるが、類例は少ない。104は、単純口縁の小形壺である。頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。外面は全面が横方向の丁寧なミガキ、内面口縁部はナデ、頸部下はケズリによる調整が行われている。105は、小形壺であろうか。内外面ともナデによる調整が行われている。焼成不良で胎土が緻密なことから、中世期の遺物である可能性もある。106は、小形の壺あるいは壺であろう。外面は細かなハケとヘラ状工具によって特異なリボン状の文様を描いている。内面はケズリによる調整が行われている。

107・108は、壺の胴部であろうか。いずれも内外面ともに赤色塗彩されている。107は外面にススが付着し、108の内面にはケズリによる調整が認められる。なお、いずれも高壺の壊部である可能性がある。109は、土師器直口壺である。単純口縁で頸部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。また、内外面ともに赤色塗彩されている。110は、土師器無頸壺であろう。外面全面と内面の口縁部から頸部付近までは赤色塗彩されている。外面は縦方向の粗いハケ、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。111は、土師器鉢であろう。口縁端部は内外に拡張して凹面を作り出している。内外面ともにナデによる調整が行われている。107～111については特異な遺物であり、器種とともに時期的な判断はできない。

第42図—112は、瓶形土器である。外面上位にはタガ状の突帯を貼り付け、その下位には把手を貼り付けている。上端部は平坦におさめ、外面上位はナデ、下位は縦方向のハケによる調整が行われている。内面突帶上位はナデ、突帶貼り付け部には指頭圧痕が認められ、下位はケズリによる調整が行われている。手捏ねで半環状の突帯には、指頭圧痕が顕著に認められる。113は、瓶形土器の下方部にあたるものと考えられ、外面は縦方向のハケ、内面は横方向のケズリによる調整が行われている。112・113は同じ層位からの出土であり、同一個体である可能性が強い。このような瓶形土器については、出雲平野を中心とする地域に報告例が多く、市内古志本郷遺跡や下古志遺跡などからも出土しているが、その用途については明らかとなっていない。時期的には弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけての短期間に使用されたものと考えられている。

第43図—114は、土師器壺である。頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。口縁部の外面中位にはやや膨らみを有し、内外面ともナデによる調整が行

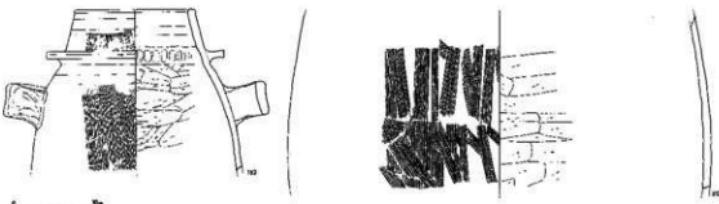
われている。外面頸部は縦方向のハケ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。115は、土器器臺である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は外反して丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面に



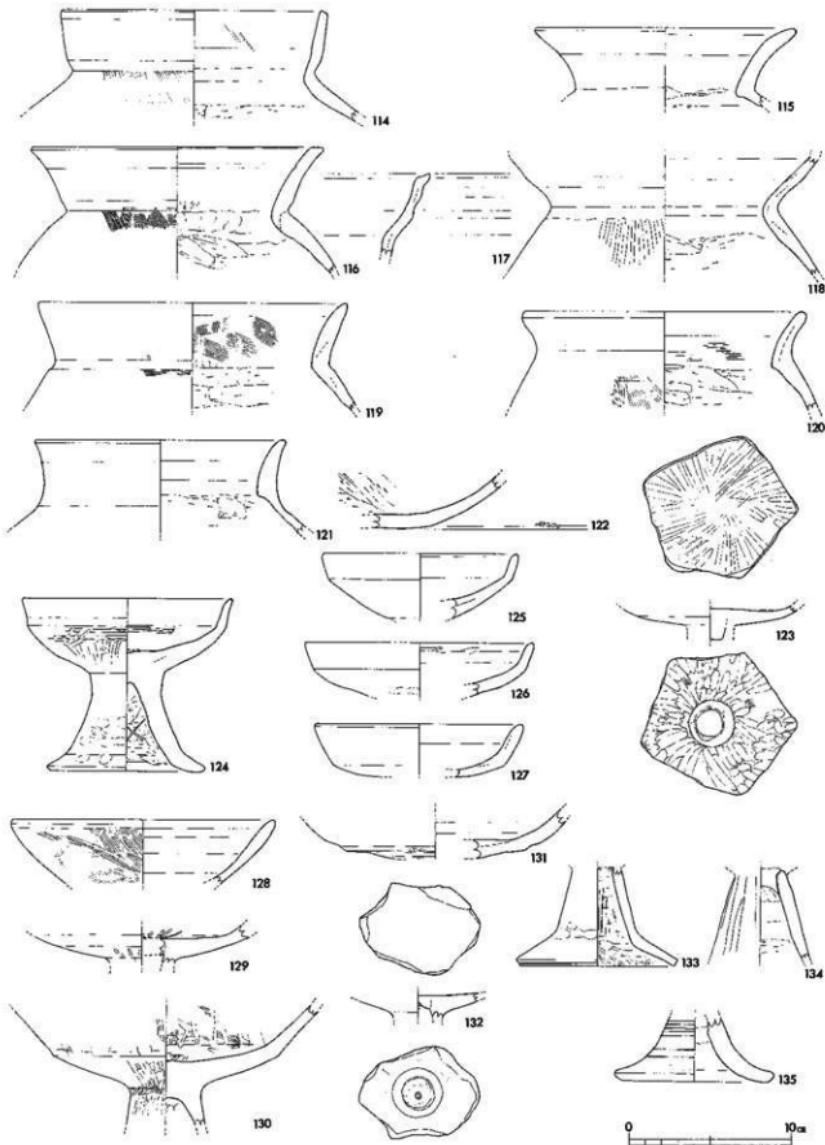
第41図 旧河道出土遺物実測図 (6)

はススが付着している。116は頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部は外反して丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は細かなハケ、内面はケズリによる調整が行われている。117は、土師器甕である。頸部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がり、口縁端部は外反して先細りとなり丸くおさめている。外面中位には膨らみを有して稜を作り出し、内外面ともにナデによる調整が行われている。118も土師器甕で、口縁部外面中位にかすかに稜をなすものである。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。119は、土師器壺である。頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は外反して先細りとなって丸くおさめている。口縁部外面はナデ、内面は細かなハケとナデによる調整が行われ、外面にはススが付着している。頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。120は、土師器甕である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面はナデ、内面はハケとナデによる調整が行われ、外面にはススが付着している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。121は、土師器壺である。頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。122は、土師器甕あるいは壺の底部である。かすかな平底を有し、外面の一部はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような土師器は、さまざまな形態的特徴をもつものであるが、口縁部中位に稜をなす114・116のような甕は、古墳時代前期後葉から中期前葉頃にかけての資料と考えられる。その他は、これよりもやや先行するものと考えられ、古墳時代前期後葉頃の資料であろう。

123は、土師器高坏である。内外面ともに放射状の丁寧なミガキによる調整が行われ、外面の一部にはハケによる調整が認められる。坏部と脚部とは付加法によって接合されている。124は、ほぼ完形の土師器高坏である。坏部は2段に作られ、外面中位には明確な段をもち、口縁端部は外反して丸くおさめている。坏部はやや浅く、2段に作られる上位は内外面ともナデ、下位外面はミガキとカキメ、内面はミガキによる調整が行われている。裾部の開きはさほど大きくななく、脚端部はナデとハケ、内面はケズリによる調整が行われ、全面が赤色塗彩されている。125～132は、高坏の坏部付近の破片である。125は、内外面ともに赤色塗彩され、口縁部中位には稜をなし、口縁端部は丸くおさめている。126は、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、外面中位にかすかに稜を作り出している。内外面とも赤色塗彩され、ミガキによる調整が認められる。127は、口縁部はほぼ



第42図 旧河道出土遺物実測図(7)



第43図 旧河道出土遺物実測図(8)

直立し、外面中位には稜をなして口縁端部は丸くおさめている。内外面とも赤色塗彩され、ナデによる調整が行われている。128は、体部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面はハケ、内面はミガキによる調整が行われ、脚部は内外面ともナデによる調整が行われている。129は、内外面ともに丁寧なミガキによって仕上げられている。130は、脚部と坏部とは円盤充填法によって接合されている。坏部は2段に作られ、外面下位には明確な段を有し、体部から口縁部にかけて大きく聞くものと考えられる。坏部内面はミガキと一部にハケ、外面下位はミガキ、上位は放射状のハケによる調整が行われている。131は高坏の坏部破片で、外面には明確な段を有し、2段に作られるタイプのものであろう。外面下位はハケ、上位はナデ、内面はナデによる調整が行われている。132は風化が著しいが、坏部外面下位にはハケによる調整が認められる。以上のような高坏は、坏部が2段に作られるものと境をもたないものとに大別することができる。これらは並存する時期があると考えられ、古墳時代前期後葉頃のものであろう。なお、123・129・132などのような部分破片からは、時期的な判断はできない。

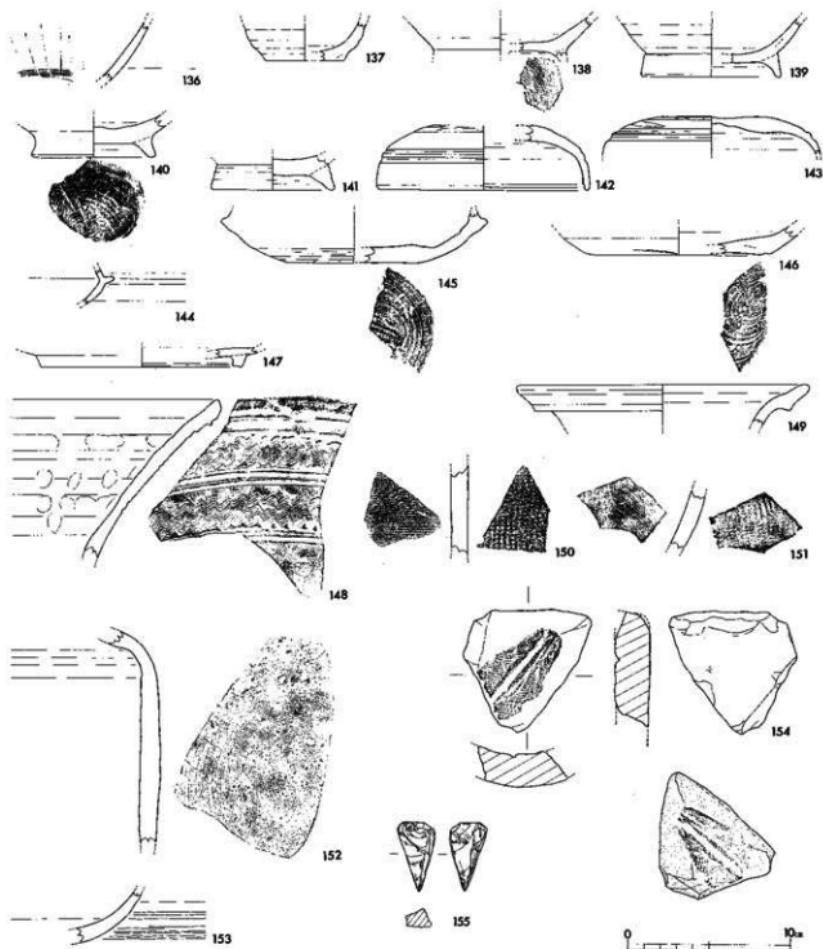
133～135は、土師器高坏の脚部破片である。133は、裾部が末広がりに開き、脚端部は内傾して平坦におさめている。外面はミガキ、内面裾部はハケ、脚部はケズリによる調整が行われている。脚端部の特徴から、古墳時代前期前葉頃の資料と考えられる。134は、外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われ、坏部と脚部とは円盤充填法によって接合されている。135は、外面が赤色塗彩されている。内外面ともにナデによる調整が行われ、脚端部は丸くおさめている。低脚坏の脚部の可能性をもつものである。

第44図—136は、土師器高坏の坏部であろう。外面はナデ、内面はミガキによる調整が行われ、内面には放射状の暗文が施されている。他の出土遺物から考えれば、古墳時代前期後葉頃の資料であろう。137は、土師器塊であろうか。底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。中世期の資料と考えられるものである。

138～141は、土師器高台付坏である。138は、高台はほぼ直立している。坏部内外面とも回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。139は高台がほぼ直立し、端部は丸くおさめている。坏部は内外面ともにナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。140は高台部が外傾し、端部は丸くおさめている。坏部内面は回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。141もほぼ同様の形態的特徴をもち、ナデによる調整が認められる。以上のような高台付坏は高台部が直立するもの（138・139）と外傾するもの（140・141）に類別することができる。11世紀後半以降の遺物であるが、明確な時期的判断については難しい。

142は、須恵器坏蓋である。口縁部から天井部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面中位には2条、口縁部内面にも1条の凹線が施され、外面上位は回転ヘラケズリ、下位と内面は回転ナデによる調整が行われている。143も坏蓋で、ほぼ同様の調整が行われている。このような須恵器坏蓋は、高広編年Ⅰ期に相当する資料と考えられ、6世紀後半から7世紀初頭頃のものであろう。144は須恵器坏身で、内側にかえりを有するものである。内外面ともにナデによる調整が行われている。145は、須恵器坏蓋あるいは坏身である。外面は回転ヘラケズリによる調整が行われている。146は、須恵器坏である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切

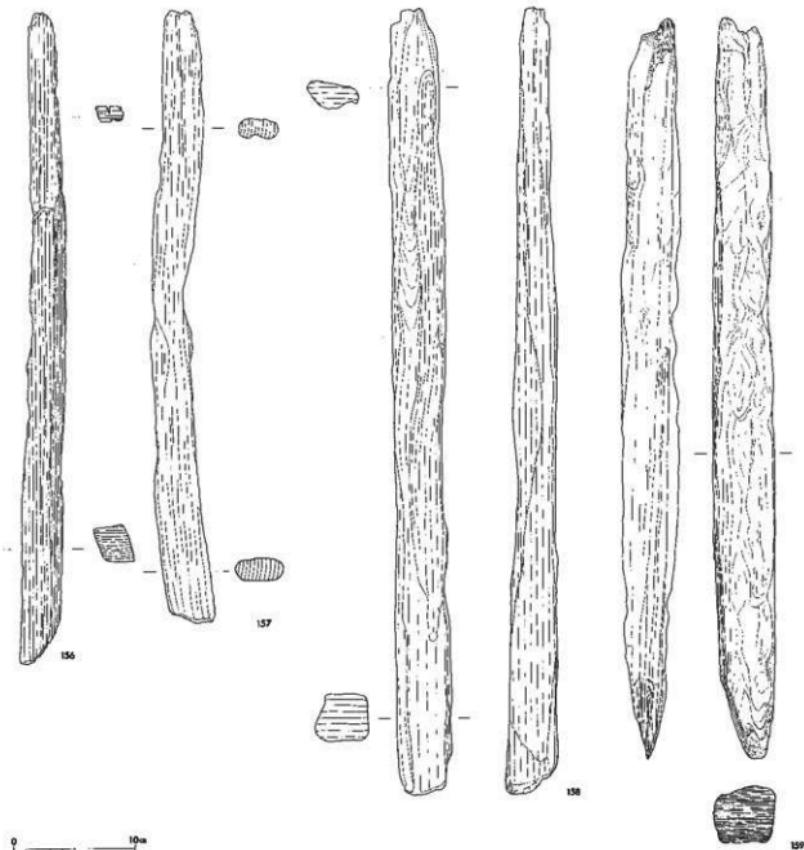
り離されている。奈良時代以降の資料であろう。147は、須恵器の高台付壺である。高台は短く直立し、端部は平坦におさめている。奈良時代以降の資料であろう。148は、須恵器長頸壺である。大形品で、口縁端部は内傾して平坦面を作り出している。外面は上位に三角形の突帯を有し、その下位は3条の凹線文によって2区画に分けられ、その間にクシ状工具による波状文を巡らせている。内外面ともナデによる調整が行われている。6世紀後半から7世紀前半にかけての資料と考えられる。



第44図 旧河道出土遺物実測図(9)

149は、須恵器壺の口縁部である。口縁端部は丸くおさめ、2cmほど下位には明確な段を有し、内外面ともにナデによる調整が行われている。古墳時代後期に相当する資料であろう。150・151は、須恵器壺あるいは壺の胴部であろう。外面は格子状のタキ、内面はハケによる調整が行われている。152は、須恵器提瓶である。胴部は扁平で、外面は円形状にナデ調整されている。高広編年IA期に相当する資料と考えられ、6世紀後葉頃のものであろう。

153は、青磁碗である。高台が付くものと考えられ、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。全面が淡緑灰色に施釉されている。15世紀以降の資料であろう。154は、丸瓦である。外面はナデ、内面には布目压痕が認められる。また、内面には1本の切れ込み状の線が認められる。54Gr



第45図 旧河道出土遺物実測図(10)

以東においても古瓦が出土しており、この付近に古代から中世期にかけての寺院が存在したことを窺わせる資料である。155は、黒曜石の剥片である。良質な黒曜石で、調査区内ではこの1点のみの出土である。

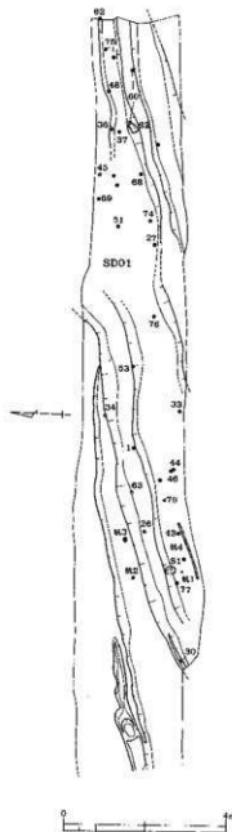
第45図—156～159は、旧河道から出土した木製品である。156は欠損しているが、残存する3面が平滑に加工されている。また、片端が斜めに削り出されている。157は、片端が斜めに削り出され、中央部がくびれて細くなっている。広い面は平滑に仕上げられるが、狭い面は部分的に粗く加工されている。いずれも用途不明であるが、何かの部材として利用されたものであろう。158は、1面のみが平滑に加工されている。片端を尖らせており、杭として利用されたものであろう。159は杭で、4面がほぼ平滑に仕上げられ、先端は削り出して尖らせている。

SD 01（第46図）

C13Gr～C17Gr、A・B21Gr～22Grにかけての灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西南西—東北東方向に伸びている。調査区が途中で分断されているが、検出した状況から推察すれば、長さ46.0m以上、幅4.0m以上を測る。なお、この遺構の上面は後世に何回かの削平を受け、新しい時期の水路が築かれているのが確認されている。

覆土には、上層に褐灰色土、中層に暗褐灰色土、下層には暗褐灰色粘砂層、暗褐灰色粘質土が堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。なお、東側では後世の搅乱を受けている。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約70cmを測る。また、遺構底面のレベルは東側よりも西側が10cm程度低く、西方に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物の出土状況をみると、遺構の肩部から底面直上にかけて出土しているが、特に底面直上からの出土量が多くなっている。また、時期的には弥生時代前期から近世に至るまでのものが混在して出土している。これは、遺構上面が後世に何回かの削平を受けていることに起因するものと考えられる。その中でも古墳時代終末期から奈良・平安時代初期にかけての遺物の出土量が最も多く、遺構が築かれた時期については当該期である可能性が強い。器種的にも須恵器蓋坏、高坏、壺、上師器壺、壺、高坏、坏などがあり、バラエティーに富んでいる。機能としては、覆土の状況や底面のレベルなどから水路として機能していたことが想定され、西方に向かって



第46図 SD 01 実測図

流れていたものと考えられる。

SD 01 の出土遺物（第 47 図～第 50 図）

第 47 図一 1 は、低脚壺である。脚部と壺部とは貼り付けられている。2 は、鼓形器台の受部であろう。外面はナデ、内面上位はナデ、中位からは横方向のミガキによる調整が行われている。1・2 とも弥生時代終末期から古墳時代前期前葉頃に相当する資料であろう。

3 は、土師器壺である。単純口縁で頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲している。外面はナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。3・4 は古墳時代中期以降に相当する資料であろう。

5 は、土師器高壺の壺部破片である。内面はミガキ、外面はハケによる調整が行われ、壺部と脚部とは円盤充填法により接合されている。6 は、土師器高壺の脚部である。外面はナデ、内面裾部はナデ、筒部はケズリによる調整が行われ、外面には朱塗りの痕跡が認められる。5・6 の高壺は古墳時代中期以降に相当する資料であろう。

7・8 は、須恵器壺身である。短く内傾する返りを有し、外面上位は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。8 は須恵器壺蓋で、短く内傾する返りを有し、天井部にはつまみをもつものであろう。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。7・8 ともに高広編年Ⅱ期に相当する資料と考えられ、7 世紀初頭から中葉にかけてのものであろう。

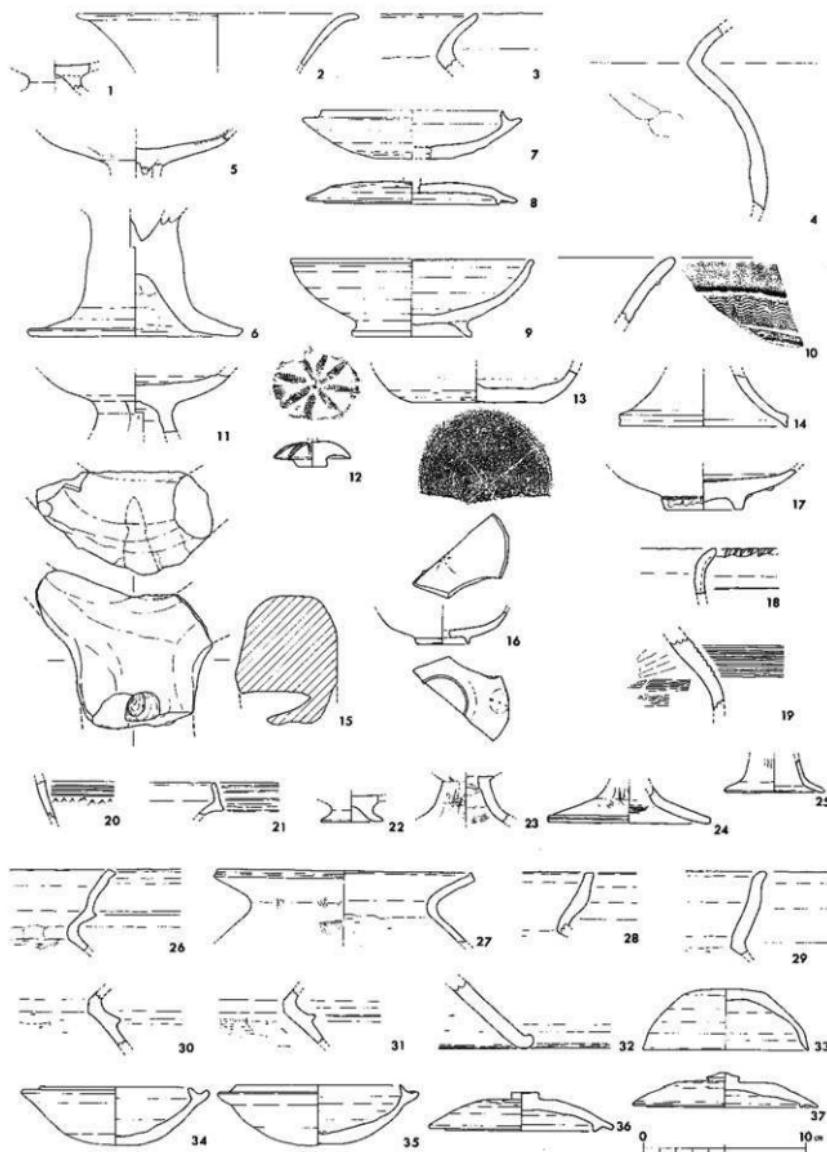
9 は、須恵器高台付碗である。やや外傾する高台を有し、端部は拡張して平坦におさめている。境部は内外面ともに回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。高広編年Ⅳ期に相当する資料と考えられ、7 世紀中葉から 8 世紀前葉にかけてのものであろう。10 は、須恵器壺の口縁部である。外面には一条の突帯を貼り付け、沈線との間に 5 本単位からなる波状文を施している。口縁端部は丸くおさめ、内外面ともにナデによる調整が行われている。11 は、須恵器高壺である。脚部の透かしは線状の切れ込みで、2ヶ所に認められる。外面はヘラケズリ、内面はナデによる調整が行われている。7 世紀以降の資料であろう。

12 は、陶器の蓋であろうか。外面は淡緑灰色に施釉され、貼り付けて花弁状の文様を作り出している。下部には円形の突起を有し、口径の小さな壺の蓋として利用されたものと考えられる。調査区内からは古瓦なども出土していることから、寺院関連の遺物である可能性もある。

13 は、須恵器壺である。無高台で、外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、底部はナデによる調整が行われている。また、外面底部にはヘラ状工具によって製作地あるいは集落の記号と考えられる「×」印が刻まれている。14 は、須恵器高壺の脚部である。脚端部は上下に拡張して段を作り出し、平坦におさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。

15 は、土製支脚である。背面に楕円形状の穴を穿つもので、欠損しているものの 2 本の突起を有している。このように背面に穴を穿ったものは、市内壱丁田遺跡や古志本郷遺跡からも出土している。

16 は、磁器の高台付碗である。内面見込みと外面には文様が染め付けられている。17 は、唐津焼



第47図 SDO1出土遺物実測図(1)

の高台付塊で、露台を除き黄灰色に施釉されている。また、内面には砂目積の痕跡が認められる。

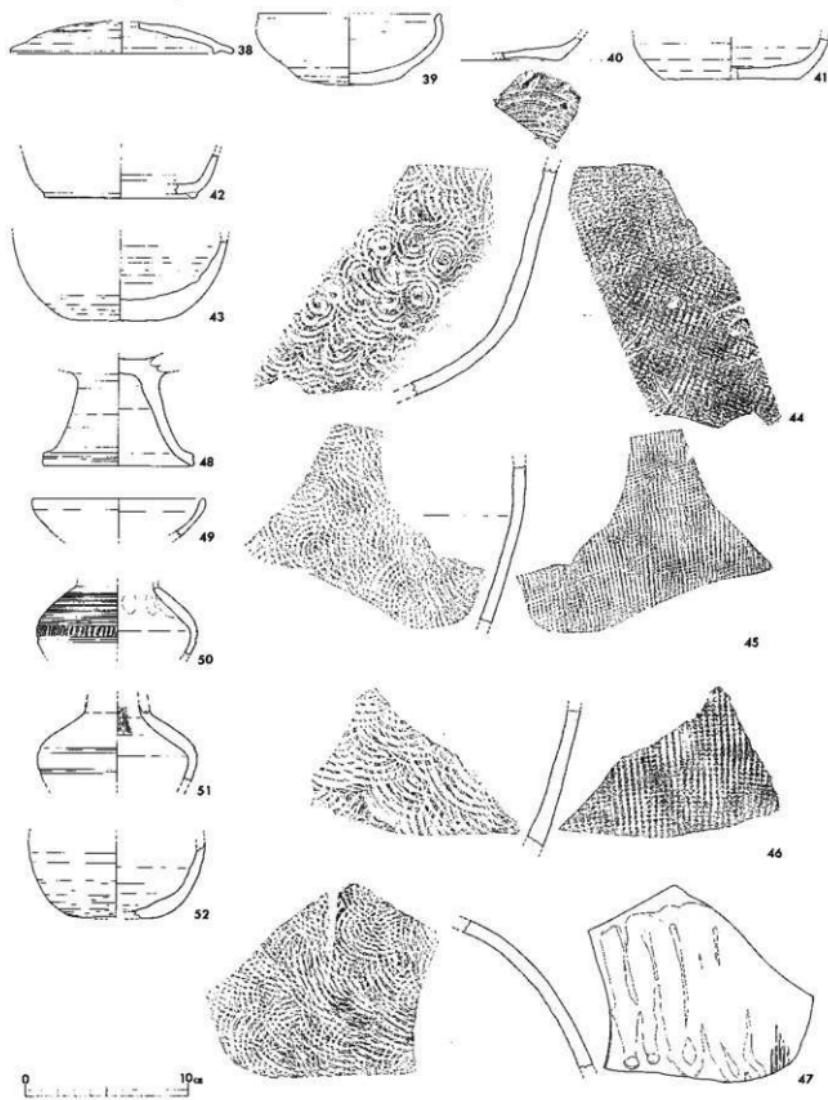
18は、弥生土器壺であろう。口縁部は緩く外反し、口縁端部は丸くおさめて刻目文を施している。また、頸部下位には一条の沈線が認められている。このような壺は、松本編年I-4様式に相当する資料と考えられ、弥生時代前期後葉頃のものであろう。19は、弥生土器壺の胴部であろう。外面にはクシ状工具によって7条の沈線が施され、内面はミガキとハケによる調整が行われている。20は、弥生土器壺である。外面にはヘラ状工具によって3条以上の沈線と刺突による山形文を施し、内面はナデによる調整が行われている。18と同様に弥生時代前期後葉頃に相当する資料であろう。21は、弥生時代後期の壺である。口縁端部はやや内傾して丸くおさめ、外面には4条の凹線文が施され、内外面ともナデによる調整が行われている。22は、低脚壺である。外傾する脚端部は丸くおさめ、内外面ともナデによる調整が行われている。弥生時代終末期から古墳時代前期前葉頃にかけてのものであろう。23は、高壺の脚部である。据部は大きく開いて脚端部は丸くおさめている。外面据部は横・斜め方向のハケ、筒部は縦方向のミガキ、裾部内面は横方向のハケによる調整が行われている。25は、高壺の据部であろう。外面筒部は縦方向のハケ、内面据部は横方向のハケによる調整が行われている。

26は、古式土師器の壺である。頸部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がり、複合口縁の稜は水平方向に突出して口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部内面はケズリによる調整が行われている。このような特徴をもつ壺は、草田7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期前葉頃のものであろう。27は、単純口縁の壺である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内側に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。胎土は在地のものと違ひは認められないが、畿内布留式の土器を模倣したものであろう。28・29は土師器壺である。いずれも頸部から口縁部にかけて直立して立ち上がり、外面中位に稜をなしている。28は口縁端部を平坦に、29は端部がやや外反して丸くおさめている。いずれも口縁部内外面はナデによる調整が行われている。古墳時代前期中葉から中期前葉頃にかけての資料であろう。

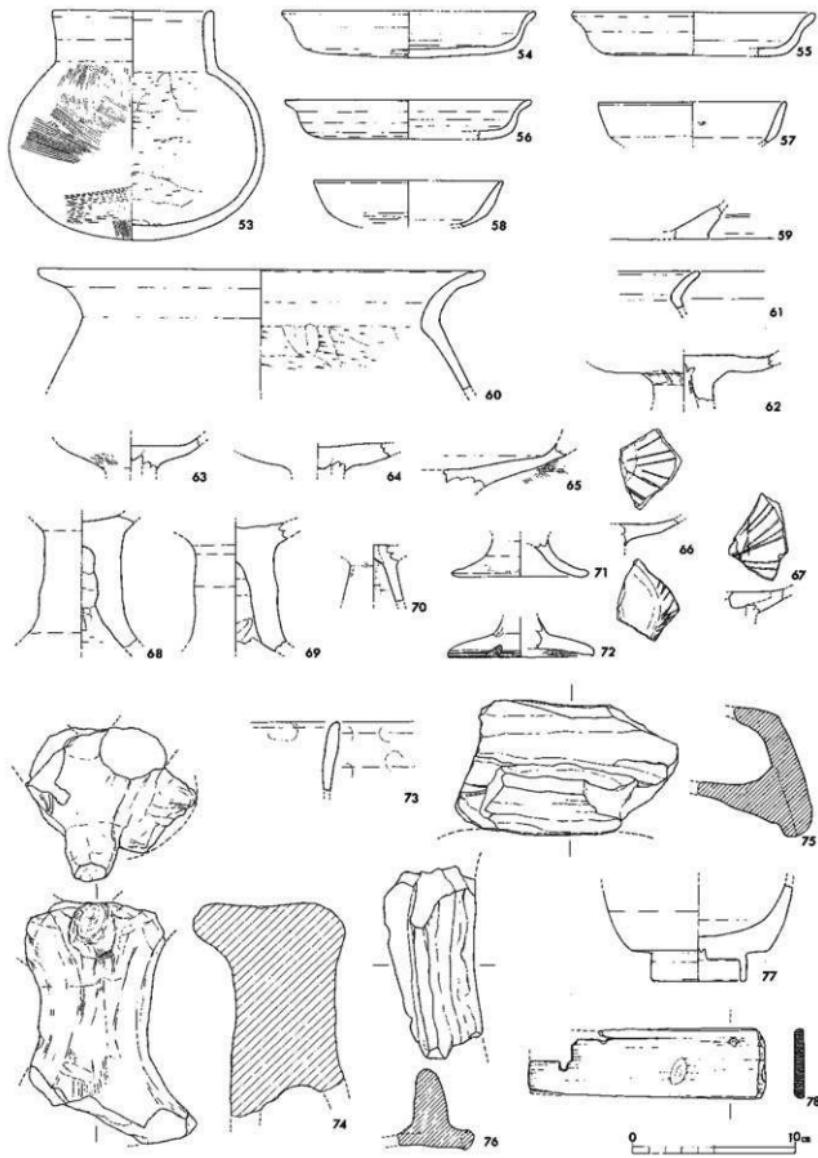
30・31は、鼓形器台である。いずれも筒部から脚部にかけての破片で、外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。32は鼓形器台の脚部破片で、脚端部は外反して丸くおさめている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような鼓形器台は、筒部が短縮化された段階のもので、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉頃にかけての資料であろう。

33は、須恵器坏身である。底部はわずかに平底を意識し、口縁下位には稜をなして口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデによる調整が行われている。34・35は口縁部にかえりを有する須恵器坏身である。立ち上がりは短く内傾し、内外面は回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデによる調整が行われている。36・37は、擬宝珠状のつまみを有する須恵器壺である。いずれも内面には短く内傾するかえりを有し、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。33～37のような須恵器壺は、高広編年IIA-IIIB期に相当する資料と考えられ、7世紀初頭から中葉にかけてのものであろう。

第48図-38は、須恵器坏壺である。短く内傾するかえりを有し、外面上位は回転ヘラケズリ、下



第48図 SD01出土遺物実測図(2)



第49図 SDO1出土遺物実測図(3)

位は回転ナデ、内面は回転ナデによる調整が行われている。擬宝珠状のつまみを有するものと考えられ、35などと同様な時期の資料であろう。39は、須恵器壺である。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデによる調整が行われている。33などよりもやや後出する資料であろう。40・41は、底部が回転糸切りによって切り離される須恵器壺である。41は底部から内湾しながら立ち上がり、焼成は不良である。いずれも内外面とも回転ナデによる調整が行われている。奈良時代頃に相当する資料であろう。42は、須恵器高台付壺である。高台は短く外傾し、脚端部は平坦におさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。8世紀中葉以降の資料であろう。43は、須恵器壺の底部であろうか。器壁は厚く、底部はヘラ切りによって切り離されている。外面上位はナデ、下位は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。

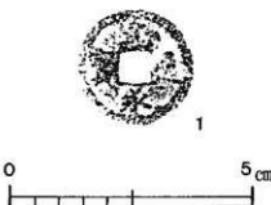
44～47は、須恵器壺の胴部破片である。44は、外面は格子状のタタキ、内面は当て具による青海波文が施されている。45・46も調整はほぼ同様であるが、外面の一部はタタキ痕を磨り消している。47は、外面に緑灰色の自然釉がかかっている。外面の調整は不明であるが、内面には当て具による青海波文が認められる。

48は、須恵器高壺である。脚端部は上方に拡張して平坦におさめ、一条の凹線を施している。内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。49は、須恵器壺であろうか。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、口縁端部は丸くおさめている。50は、須恵器壺の胴部であろう。外面には2条の凹線との間に貝殻腹縁による刻目文を巡らせている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。51も須恵器壺である。50と調整方法は同様であるが、外面胴部には2条の凹線文が施されている。52は、須恵器壺の底部であろう。底部から内湾しながら立ち上がり、底部はヘラ切りによって切り離されている。外面上位は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。

第49図-53は、土師器直口壺である。体部は球形を呈し、頸部から口縁部にかけてはほぼ直立て立ち上がっている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は縦・横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。古墳時代前期頃に相当する資料であろう。

54～56は、土師器皿であろう。いずれも全面が赤色塗彩され、底部から体部にかけては内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデとミガキによる調整が行われている。奈良時代から平安時代頃に相当する資料であろう。57・58は、土師器高壺の壺部であろう。いずれも体部から内湾しながら立ち上がり、壺部中位に稜をなし、口縁端部にかけてはほぼ直立て、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。また、内外面ともに赤色塗彩されている。

59は、土師器壺の底部であろう。器壁が厚く、底部は回転糸切りによって切り離されている。中



第50図 SD01出土遺物実測図(4)

世期のものであろう。60は、土師器壺である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は外面ともにナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。また、外面全体にススが付着している。60・61は胎土も粗く、その器形から



第51図 SD03 実測図

も奈良時代以降の資料であろう。

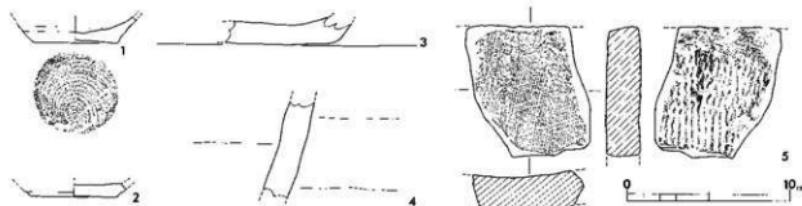
62～67は、土器器高坏の坏部である。62は、全体に粗い作りで坏部内面はナデ、外面下位にはハケによる調整が認められる。坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。63もほぼ同様の調整が行われるものである。64は胎土が非常に緻密で、内外面ともナデによる調整が行われている。65は、内面はミガキ、外面上位は細かなハケによる調整が行われている。66は外面とも赤色塗彩され、外面には稜をなして坏部が2段に作られている。また、内外面ともに放射状の暗文が施されている。67も外面ともに赤色塗彩され、坏部内面には放射状の暗文が施されるものである。これらの高坏は部分的な破片であり、時期的な判断は難しい。このうち、64はやや新しい様相を示すものである。

68は、高坏の脚部である。外面と坏部内面は赤色塗彩され、脚部外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。69も高坏の脚部で、外面と坏部内面は赤色塗彩されている。外面ともにナデによる調整が行われている。70はやや小形の高坏で、外面と坏部内面は赤色塗彩されている。脚部外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

71・72は、低脚坏である。71は外面ともナデによる調整が行われ、脚端部は丸くおさめている。72は外面がナデ、内面は細かなハケによる調整が行われている。脚端部はほぼ平坦におさめている。なお、外面坏部にはわずかながら赤色塗彩された痕跡が残っている。以上のような低脚坏は、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉頃にかけての資料と考えられる。

73は、製塙土器である。六連式と呼ばれる砲弾状を呈するもので、内外面ともに指頭圧痕列が認められる。在地的な特徴としては、内面に布目圧痕が認められないことが注意される。74は、土製支脚である。2本の突起を有し、粗いナデと一部ハケによる調整が行われている。75は、移動式竈の底部である。底は上方に向いて貼り付けられ、口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。76も移動式竈の底部で、底は水平方向に貼り付けられ、焚口部は丸くおさめている。外面は粗いナデ、内面はケズリによる調整が行われている。75・76のような移動式竈は、6世紀後半から8世紀初頭にかけてのものと考えられ、市内では壱丁田遺跡や三田谷遺跡などからも出土している。

77は、木製の漆椀である。直立するはめ込み式の高台を有し、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。内外面ともにベンガラを混和した赤漆が塗られている。樹種にはハンノキ属が用い



第52図 SDO3 出土遺物実測図

られている。器形や塗膜構造から推察すれば、近世の漆椀である可能性が強い。78は、用途不明の板材である。欠損しているが長さ14.5cm、幅4.2cm、厚さ0.6cmを測り、樹種には杉を用いている。

第50図-1は、「寛永通寶」である。新寛永錢と呼ばれるもので、裏面は無文である。1668年以降に鋳造されたものである。

SD 03 (第51図)

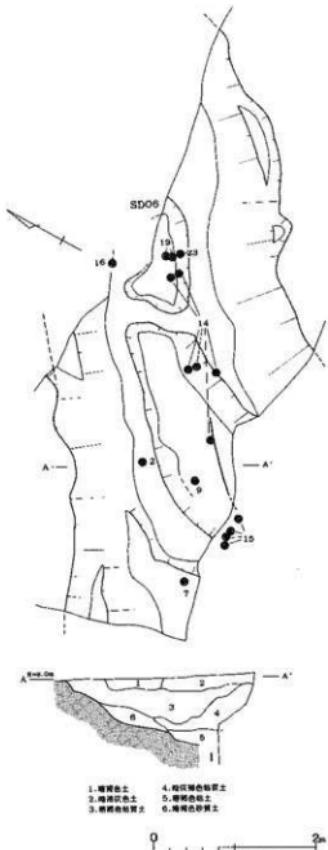
C19Gr～C20Grにかけての灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、東北東～西南西方向に伸びている。両端ともに調査区外へと達しているが、現状からは長さ6.0m以上、最大幅80cmを測る。なお、検出高は標高8.13mである。また、この溝状遺構は東西の隣接する調査区には連続していないことから、調査区外において南北どちらかの方向に屈曲しているものと推察される。

覆土には、上層から茶褐色土、暗褐色粘質土、暗黄褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、東側と西側では若干異なっている。東側では両肩から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。一方西側では、両肩から約45度の角度で落ちて北側に偏って位置する底面は狭く平坦に作り出している。また、遺構底面におけるレベルは、東側で標高7.75mであるのに対し、西側では7.70mと低くなってしまい、西方に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

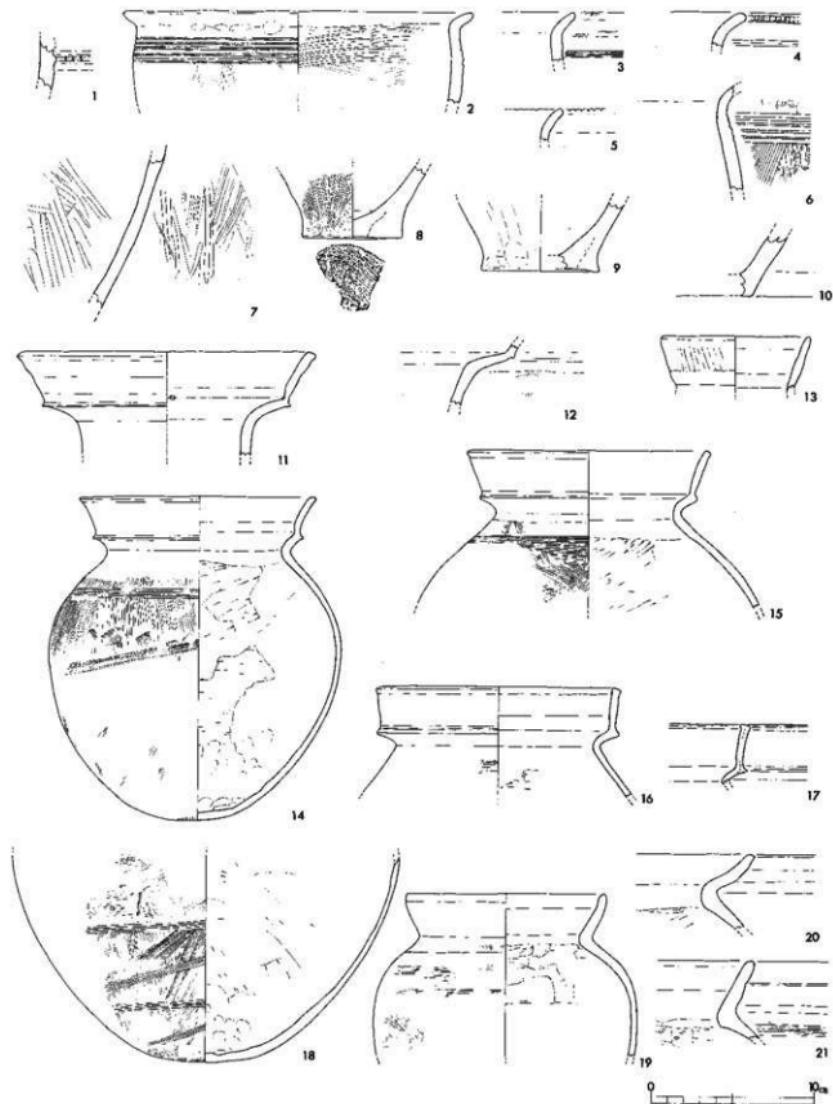
遺物には、土師器壺や陶器鉢、布目瓦などのほか、人頭大の石が遺構底面で数個検出されている。出土量としては少なく、これらの遺物から遺構が築かれた時期について断定することは難しいが、およそ平安時代後期から中世期にかけての遺構である可能性が強い。機能については、覆土の状況や底面におけるレベルの違いから水路などが想定され、西方に向かって流れていたものと考えられる。

SD 03 の出土遺物 (第52図)

1・2は、土師器壺である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。3は、土師器壺の底部であろうか。ナデによる調整が行



第53図 SD 06 実測図



第54図 SD06出土遺物実測図(1)

われている。4は、常滑系陶器である。胴部の破片と考えられ、内外面ともにナデによる調整が行われている。5は、平瓦である。内面には布筒の細かな布目痕が認められ、外面は縄目文状の押型具によるタタキ痕が残っている。端面は面取りされ、ナデによる調整が行われている。外面のタタキ痕は他の瓦片とは異なっており、時期的な違いが認められるものである。これらの遺物からは明確な時期について判断することはできないが、およそ13～14世紀頃に相当する資料であろう。

SD 06（第53図）

C21Gr～C22Gr、A・B23Gr～24Grにかけての灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西南西～東北東方向に伸びている。両端ともに調査区外へと達しているが、検出長15.0m以上、最大幅3.3mを測る。なお、検出高は標高7.96mである。

覆土には上層に暗褐色土、暗褐色灰色土、中層に暗褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、最下層には粘性の非常に強い暗褐色粘土が堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から比較的緩やかに落ちて一度平坦面を作り出し、そこから最深部に向かって鋭角に落ちて、中央に位置する底面はほぼ平坦に作り出し、深さは約1.1mを測る。

遺物には、弥生時代前期後葉頃に相当する土器のほか古式土師器、須恵器もわずかながら出土している。その中でも古墳時代前期前葉頃に相当する資料と考えられる古式土師器の出土量が圧倒的に多く、遺物の出土状況からは上層に古式土師器、下層に弥生時代前期後葉の遺物が多く認められている。この状況から推察すれば、遺構が築かれた時期は古墳時代前期前葉頃で、その際に弥生時代前期後葉頃の遺構を削平しているものと考えられる。また、遺構南側の最下層からは土留め板と考えられる木製品が検出されていることが注意される。機能としては、規模や形状から推察すれば、水路あるいは集落を囲繞する環濠である可能性をもつものである。当該期の確実な遺構は、当調査区では検出されていないことを考えると、南に位置し、大集落遺跡と目される宮松遺跡との関連が注目される。なお、当該期の環濠は、市内天神遺跡や下古志遺跡などからも検出されている。

SD 06 の出土遺物（第54図・第55図）

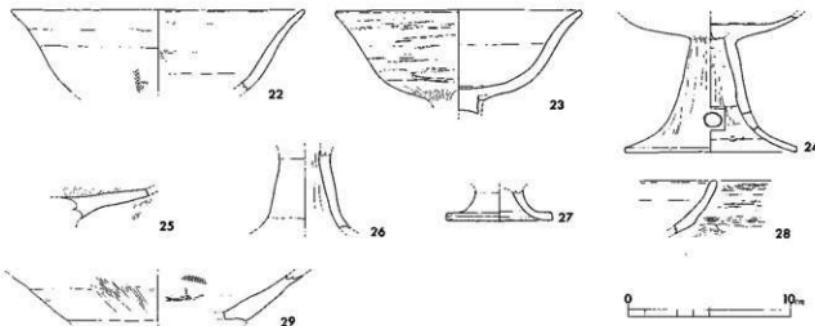
第55図-1は、弥生上器壺である。外面には刻目文を施した2条以上の貼付突帯文を有している。頸部あるいは胴部破片と考えられるものである。2は、弥生上器壺である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下面には5条のヘラ描直線文が施され、その下位は細かな縦方向のハケ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。3は、頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部には刻目文を施して丸くおさめている。頸部下面には2条以上のヘラ描直線文が施され、口縁部、頸部下面の内外面ともにナデによる調整が行われている。4は、頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部に刻目文を施して丸くおさめている。外面頸部下には1条以上のヘラ描直線文が施され、内外面ともにナデによる調整が行われている。5もほぼ同様な調整が行われるものである。6は、頸部下面には5条のヘラ描直線文を施し、その下位は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。以上のような壺や壺は、松本編年I-2～I-3様式に相当する資料と考えられ、弥生時代前期後葉頃のものであろ

う。

7は、弥生土器甕あるいは壺の下方部の破片で、外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のミガキによる調整が行われている。8～10は、弥生土器の底部付近の破片である。8は外面がハケ、内面はナデ、底部はハケ調整によって仕上げられている。9は内外面、底部ともナデによる調整が行われている。10は、風化が著しく調整は不明である。このような底部破片から時期的な判断をすることは難しいが、他の出土遺物から推察すれば、弥生時代後期後葉頃のものである可能性が強い。

11は、古式土師器壺である。複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁部はやや外傾して立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。12もほぼ同様な調整が行われる壺で、複合口縁の稜は水平方向に突出するが、やや鋭さを欠いている。13は、単純口縁の直口壺と考えられる。外面はナデと縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。14は、ほぼ完形の古式土師器甕である。頸部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がり、口縁端部は外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。頸部下外面はクシ描直線文のほか縦横のハケによる調整が行われ、底部は丸底となっている。頸部下内面はケズリ、底部付近には指頭圧痕が認められる。15～17は、古式土師器甕である。15は、複合口縁の稜が水平方向に突出し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はナデと細かなハケ、内面はケズリによる調整が行われている。16は、頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は平坦におさめている。複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。17は小片で、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は内側に折り曲げて平坦におさめている。18は壺の底部で、かすかに平底を意識したものである。外面はクシ描直線文とハケ、内面はケズリによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が認められる。以上のような古式土師器の甕や壺は、草田6期～7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期後葉頃のものであろう。このうち、14についてはやや古い様相を示し、13は後出するものであろう。

19～21は、単純口縁の土師器甕である。19は、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、



第55図 SD06出土遺物実測図(2)

口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。20は、頸部から口縁中位にかけては「く」の字状に屈曲し、中位には稜を作り出してそこから内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部はやや内傾して平坦におさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。21は、やや外傾して立ち上がり、口縁部中位には膨らみを有して口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような土師器甕は、古墳時代前期後葉から中期前葉頃に相当する資料と考えられる。

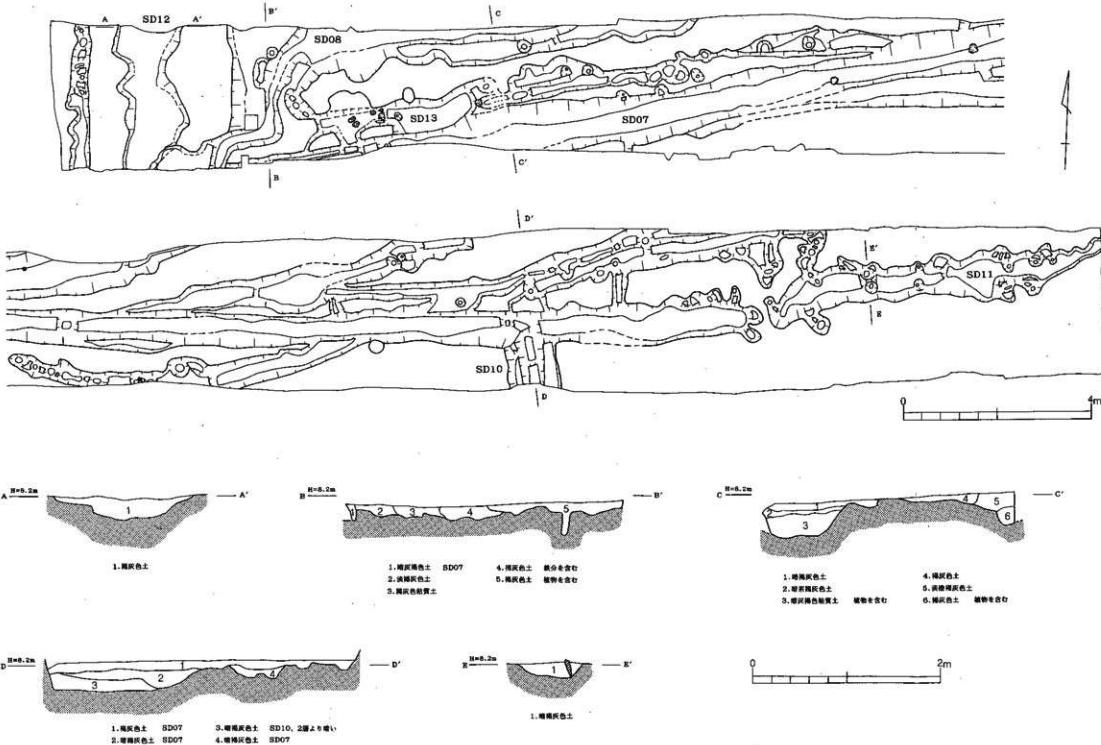
第55図—22～29は、上師器高坏である。22は坏部の破片で、口縁部はやや外反し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。上位は内外面ともナデ、外面下位は縦方向のハケ、内面下位は横方向のハケによる調整が認められる。23は深さのある坏部で、底部から口縁部にかけて内溝しながら立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。外面上位はナデ、下位はミガキ、内面はミガキによる調整が行われている。また、坏部と脚部とは付加法によって接合されている。24は、脚部と裾部の境3方向に円形の透かし孔を有するものである。裾部は大きく開き、脚端部は丸くおさめている。外面脚部は縦方向のミガキ、内面裾部はハケ、脚部はケズリによる調整が行われている。坏部と脚部とは円盤充填法によって接合されている。25は坏部の小片で、外面はハケ、内面は放射状のミガキによる調整が行われている。26は脚部で、外面は縦方向のミガキ、内面はヘラ状工具を押し当てるような調整が行われている。27は脚部片で、脚端部は平坦におさめ、内外面ともナデによる調整が行われている。28は坏部で、内外面ともに赤色塗彩されている。口縁部中位に稜をなし、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。29は坏部が2段に作られるもので、外面は縦方向のハケとナデ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。これらの高坏のうち、22・24については古墳時代前期前葉頃、23・28については古墳時代前期後葉から中期前葉頃に相当する資料と考えられる。

SD 07（第56図）

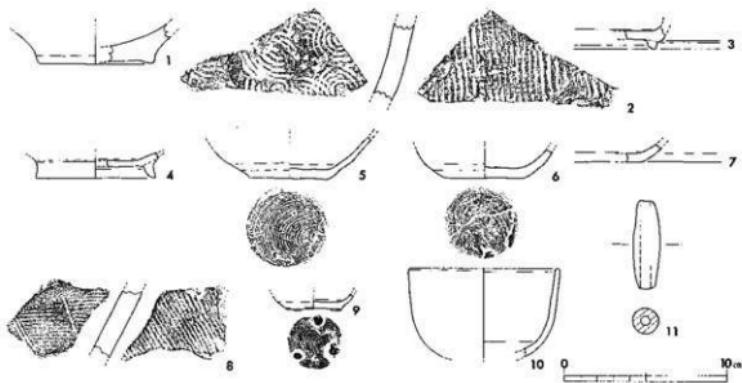
C24Gr～C30Grにかけての灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西南西一東北東方向に伸びている。両端ともに調査区外へと達しているが、現状からは長さ40.75m以上、幅50～90cmを測る。また、この溝は何条もの溝がお互いに切り合うように形成されており、SD09・SD10・SD11とともに一連のものと考えられる。

覆土には上層から暗褐色土、暗茶褐色土、植物を含む暗灰褐色粘質土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約36cmを測る。なお、底面のレベルは西方に向かって低くなっていることが注意される。

遺物は少量であるが、土師器や須恵器片のほか管状土錘などが出土している。これらの中には、弥生土器や近世の遺物も混在しているが、その多くが平安時代後期から中世期にかけてのものであることから、遺構が築かれた時期も当該期である可能性が強い。機能としては、形状や覆土から、水路などが想定される。



第56図 23Gr～31Gr溝状遺構実測図



第57図 SD07出土遺物実測図

SD 08（第56図）

C24Gr～C25Grにかけての灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、両端ともに調査区外へと達している。西端では屈曲しながら南西—北東方向に伸び、そこから基軸を変化させて西南西—北東方向に伸びて現状では長さ8.0m以上を測る。なお、検出高は標高8.24mである。

覆土には上層から褐色土、淡橙褐色土、植物を含む褐色土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。北側が調査区外へと達しているために断面の形状は明らかではないが、南肩部からは緩やかに落ちて一度平坦面を作り出し、そこから約45度の角度でさらに落ちて底面はほぼ平坦に作り出し、深さは約36cmを測る。

遺物は少量であるが、土師器や須恵器片が出土している。これらの遺物から遺構が築かれた時期について判断することは難しいが、SD07と基軸を同一にして配置されることから、平安時代後期から中世期にかけての遺構である可能性が強く、水路などとして機能していたことが想定される。

SD 12（第56図）

C23Grの灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。両端とも調査区外へと達しているが、検出した状況からは長さ3.0m以上、最大幅70cmを測る。また、この溝状遺構の下面には掘立柱建物跡であるSB01が存在し、切合関係にある。なお、検出高は標高8.22mである。

覆土には褐色土が一様に堆積している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、深さは約28cmを測る。

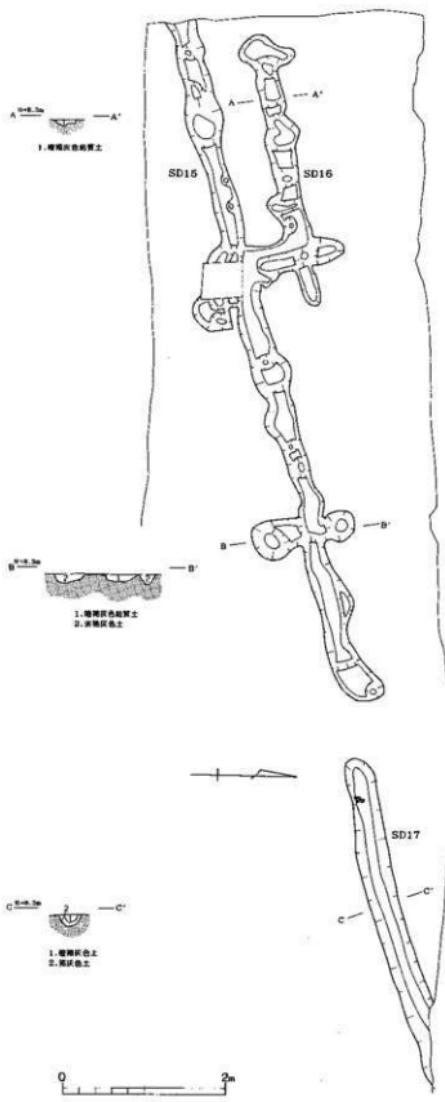
遺物は少量ではあるが、奈良時代から平安時代初期頃に相当する朱塗り土師器が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。形状から機能としては、水路などが想定される。

SD 07 の出土遺物（第 57 図）

1 は弥生土器の底部破片で、ナデによる調整が行われている。混入品と考えられるものである。2 は、須恵器壺の胴部である。外面はタタキ、内面は当て具による青海波文が認められる。軟質で焼成は不良である。3 は、須恵器高台付坏である。高台部は直立し、端部は内傾して平坦におさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。2・3 については部分破片のため時期的判断は難しいが、平安時代以降の資料であろう。

4 は、土師器高台付の坏である。高台部はほぼ直立し、端部はやや外反して丸くおさめている。底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。5 は、土師器坏である。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、底径に比して口径がかなり大きくなるものであろう。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。6 も土師器坏で、体部と底部には明瞭な境をもたない。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによつて切り離されている。7 は土師器坏の小片で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。以上のような土師器坏からは時期的判断は難しいが、5・6 のように内湾しながら立ち上がるるものについては、12世紀後半以降の資料であろう。

8 は、土師器擂鉢である。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のカキメと擂目が認められる。中世期の資料であ



第 58 図 SD 15 ~ SD 17 実測図

ろう。9は須恵質で、小形壺であろうか。底部には重ね焼きの際の胎土目が3方向に認められる。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。10は、唐津焼の碗である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともに淡黄色に施釉されている。13～14世紀頃にかけての資料であろう。11は、管状土錐である。ほぼ完形で、径6mmほどの孔を穿ち、ナデによる調整が行われている。

SD 15（第58図）

C32Gr～C34Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西南西一東北東方向に伸びている。西側は調査区外へと達しているが、現状では長さ8.70m以上、幅28cm～48cmを測る。なお、検出高は標高8.22mである。

覆土には、暗褐灰色粘質土が一様に堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約8cmと浅いものである。

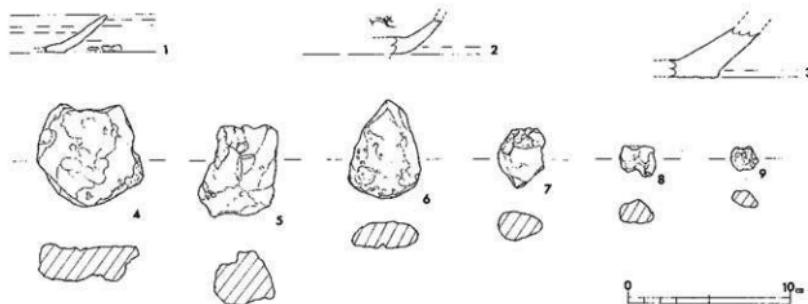
遺物は少量ではあるが、土師器や須恵器の細片が出土している。土師器には奈良時代から平安時代初期頃に相当する朱塗りされたものが出土していることから、遺構が築かれたのも当該期である可能性が強い。機能については、南側で柱穴列が確認されていることから、建物跡を区画する溝である可能性が強い。54Gr以東においても基軸を同一にする溝が検出されており、時期的に若干の開きが生じるもの、当該地に何軒かの建物跡が存在していたことが窺える。

SD 16（第58図）

C32Gr～C34Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、SD15と平行して西南西一東北東方向に伸びている。長さ3.40m、幅22cm～70cmを測る。なお、検出高は標高8.24mである。

覆土には、SD15と同様に暗褐灰色粘質土が一様に堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から銳角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約8cmを測る。

遺物は出土していないが、SD15と平行して配置されていることから考えると奈良時代から平安時



第59図 SD20出土遺物実測図

代初期頃にかけて築かれ、建物を区画する溝として機能していた可能性が強い。

SD 17（第 58 図）

C24Gr ~ C25Gr にかけての灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、西南西一東北東方向に伸びている。東端は調査区外へと達しているが、検出長 3.40m 以上、幅約 38cm を測る。なお、検出高は標高 8.20m である。

覆土には棕褐色灰色土と褐色土がレンズ状に堆積し、基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約 45 度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、深さは約 14cm を測る。

遺物は出土していないが^d、SD15 と一直線上に配置されることから、奈良時代から平安時代初期頃にかけて築かれ、建物を区画する溝として機能していた可能性が強い。なお、SD15 と SD17 の間に約 70cm の開きがあることから、別の建物あるいは木戸口などが存在する可能性もある。

SD 20

C44Gr ~ C45Gr にかけての黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、ほぼ東西方向に基軸を向いて伸びている。東側は既設道路、西側は用水路によって分断され、南側は調査区外へと達しているが、本来は東側に位置する SD21 と連続するものと考えられる。なお、検出高は標高 8.04m である。

覆土には上層から灰褐色土、黄褐色砂、灰褐色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、北肩部からは緩やかに落ちて一度平坦面を有し、そこからさらに落ちて底面はほぼ平坦に作り出し、深さは約 34cm を測る。

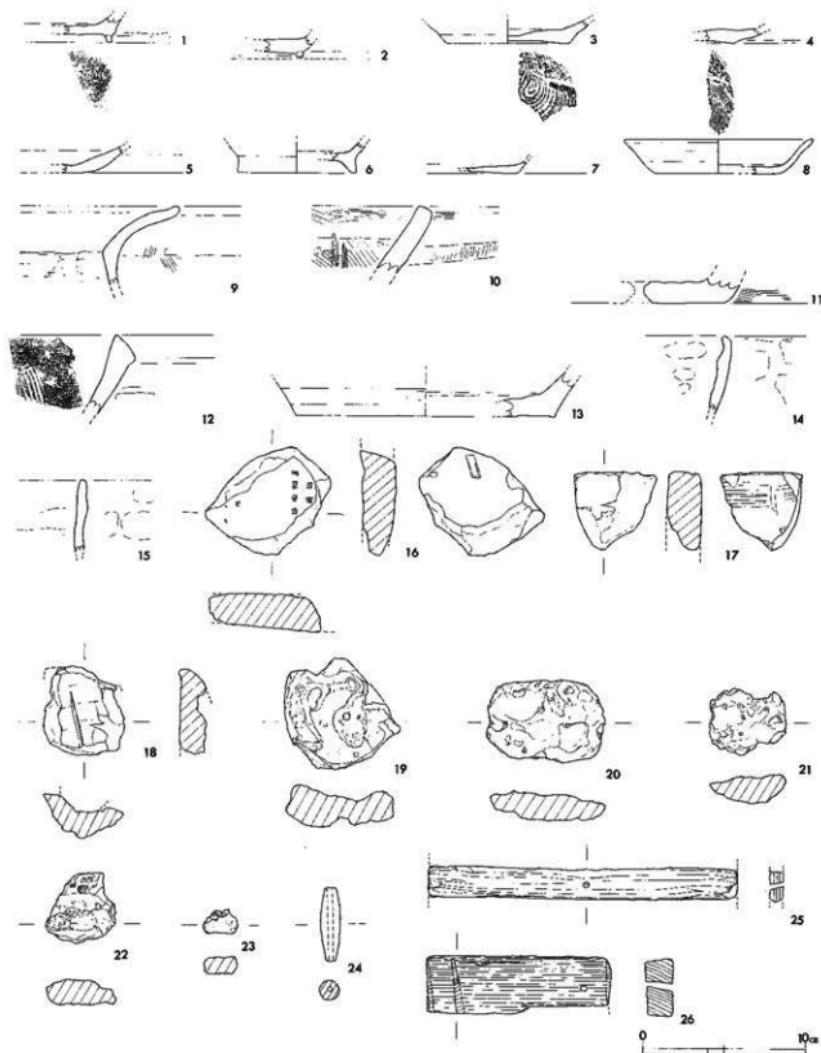
遺物には、土師器小皿や青磁碗などが出土していることから、遺構が築かれた時期については中世期と考えられる。また、特異な遺物として鉄滓が出土している。連続する SD21 からも鉄滓が出土しており、これらは分析の結果、精錬鍛冶滓である可能性が高いものとされている。SD20 の機能については、水路または建物の区画を示す溝などが想定されるが、鍛冶関連施設に伴う遺構である可能性もある。

SD 20 の出土遺物（第 59 図）

1 は、土師器小皿である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。11 世紀後半以降の資料であろう。2 は、青磁碗である。高台が付くもので、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。内外面部には草花文が描かれ、内外面とも淡緑色に施釉されている。13 ~ 15 世紀にかけての資料であろう。3 は、陶器鉢である。厚みがあり、全面にナデによる調整が行われている。4 ~ 9 は、鉄滓である。これらについては分析の結果、精錬鍛冶滓の可能性が高いものとされている。SD20 は、中世期の溝状遺構であると考えられることから、当該期に付近で小鍛冶が行われていたことを窺わせる資料として注意すべき遺物である。

SD 21

C46Gr ~ C52Gr、B51Gr ~ B52Gr の黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構である。遺構の基軸は、



第 60 図 SD21 出土遺物実測図 (1)

46Gr～51Grにかけてはほぼ東西方向に向いているが、52Grで基軸を変化させて屈曲し、南北方向に伸びている。また、南北ともに調査区外へと達し、西側は既設道路によって分断されている。SD21は前述したSD20と連続する溝状遺構と考えられることから、少なくとも延長45.0m以上、最大幅3.40m程度を測るものと推察される。なお、検出高は標高8.14mである。

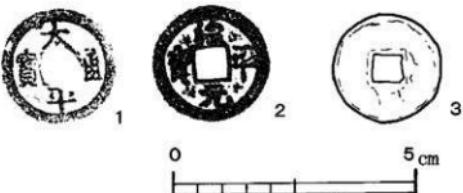
覆土には上層から褐灰色土、暗褐灰色土、黄褐灰色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて北側では一度平坦面を作り出し、そこからさらに落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。深さは約36cmを測り、底面のレベルはほぼ一様である。

遺物には、土師器壺や小皿を中心として須恵器や陶器、古瓦、古鏡なども出土している。これらの遺物の中には混入品も含まれるが、その多くは12～13世紀頃に相当する資料であり、遺構が築かれた時期も当該期であろう。また、SD20でも検出された鉄滓のほか輪の羽口も出土しており、建物の区画を示す溝あるいは鍛冶関連施設に伴う溝である可能性もある。

SD 21 の出土遺物（第60図・第61図）

第60図-1・2は、須恵器高台付の壺である。1は、高台部は短くやや外傾し、端部は平坦におさめている。底部には回転糸切り痕が認められる。2は高台部が短く直立し、端部は平坦におさめている。いずれも平安時代頃の資料であろう。3・4は、無高台の須恵器壺である。底部には回転糸切り痕が認められる。5は、須恵器壺身であろうか。底部はヘラ切り後にナデ、上位は回転ナデによる調整が行われている。

6は、土師器の高台付壺である。高台部はやや外傾し、端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。11世紀後半以降の資料であろう。8・9は、同一個体と考えられる土師器皿である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。底径が口径に比して大きく、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。11世紀後半以降の資料と考えられる。10は、土師器甕である。頸部から口縁部にかけて強く外反し、口縁端部はやや内傾して丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。胎土は粗く、平安時代以降の資料であろう。11は、土師器擂鉢である。口縁端部は平坦におさめ、外面上位は横方向のハケとナデ、下位は縦方向のハケによる調整が行われている。内面上位は横方向のハケ、下位には横・斜め方向のハケと擂目が認められる。このような土師器擂鉢は、54Gr以東からも出土しており、13世紀頃に相当する資料であろう。12は、土師器捏鉢であろう。底部に孔が穿たれているのが観察できる。外面体部はハケ、底部



第61図 SD21出土遺物実測図 (2)

はナデによる調整が行われている。14・15は、製塙土器である。14は口縁端部がやや内傾し、丸くおさめている。内外面とも指頭圧痕が顕著に認められる。15は、口縁端部は直立して丸くおさめている。このような製塙土器は六連式と呼ばれ砲弾状を呈す持ち運び用の土器で、市内各地の遺跡から検出されている。16・17は、平瓦である。16は、表面は刺突具による列点文状のタタキ、裏面は粗いナデによる調整が行われている。17は、表面が繩目文状のタタキ、裏面はナデによる調整が行われている。古瓦は調査区内から10点余り出土しているが、このうちには形態的特徴が異なるもののが存在する。これらの古瓦からは、この周辺に古代から中世期にかけての寺院が存在したものと考えられるが、何回か建て直しが行われたことを窺わせる資料である。

18は、輪の羽口である。先端部にあたるものと考えられ、炉壁の粘土塊が付着している。輪の羽口は、市内大井谷Ⅱ遺跡や上長浜貝塚などからも出土している。19～22は、鉄滓である。鉄滓はSD21と連続するSD20からも出土しており、精錬鍛冶滓と考えられるものである。なお、19は分析に出した資料である。23は、金属滓が付着した土器片である。とりべあるいは堀など精錬関連の遺物であろう。

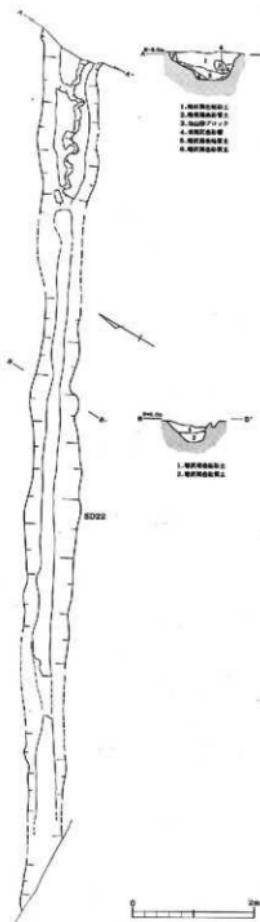
24は、管状土錐である。完形で、径3mmほどの孔が穿たれている。25・26は、用途不明の木製品である。長さ19cm、幅2cm、厚さ0.9cmを測り、ほぼ中央には径3mmほどの小孔を穿っている。樹種には杉を使用している。26は一部欠損しているが、長さ11cm、幅3.5cm、厚さ1.7cmを測る。片端は段を有して平滑に仕上げられている。また、2つの小孔は平行せず、ややずれた位置に穿たれている。樹種には杉を使用している。

第61図1～3は、古銭である。1は「太平通寶」で、裏面は無文である。北宋時代の976年初鋤とされている。2は「治平元寶」で、裏面は無文である。北宋時代の1064年初鋤とされるものである。3は、表裏とも無文の無文銭である。以上のような古銭は、平安時代より鎌倉・室町時代にかけて幕府または民間貿易によって輸入された渡来銭で、伝世期間などを考慮すれば、ほぼ遺跡が営まれた時代と一致するものである。

SD 22（第62図）

C51Gr～C53Gr、B53Gr～B54Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状造構で、西南西—東北東方向に伸びている。東西ともに調査区外へと達しているが、検出長19.5m以上、幅60cm～94cmを測る。なお、検出高は標高8.04mである。

覆土には上層から暗褐色粘土、暗灰褐色粘質土、暗灰褐



第62図 SD 22 実測図

色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約40cmを測る。なお、底面におけるレベルは東方に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

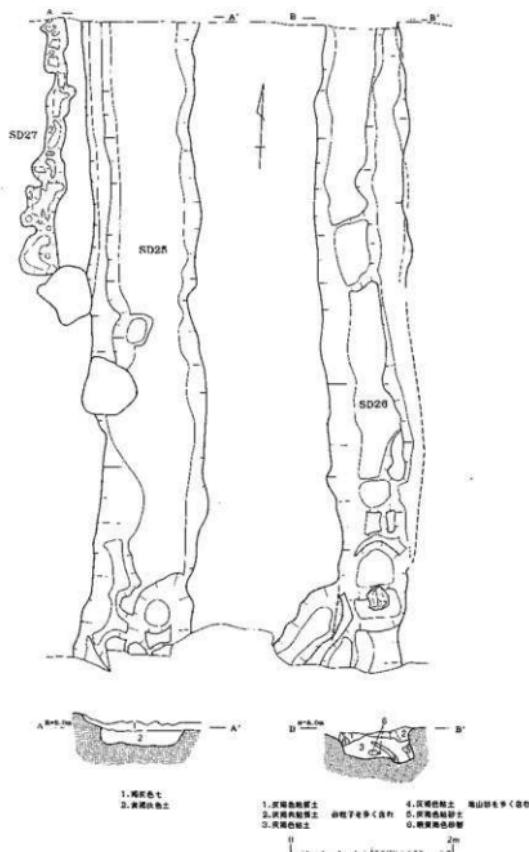
遺物は出土していないが、SD22は中世期に築かれた遺構と考えられるSD21・SD25・SD26・SK23などと切合関係にあり、これらの遺構よりも古い時期に築かれたことが明らかである。機能については、形状や覆土から水路などが想定され、東方に向かって流れていたものと考えられる。

SD 23

B・C48Grの黄褐色砂質土上
面で検出した溝状遺構で、ほぼ南北方向に基軸を向けて伸びている。北側は調査区外へと達しているが、現状では長さ7.20m以上、幅28cm～46cmを測る。なお、検出高は標高8.17mである。

覆土には、褐灰色土が一様に堆積している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、深さは約25cmを測る。なお、底面におけるレベルは南方に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物は、中世土師器を中心として須恵器や製塙土器などが出土している。これらの遺物から、遺構が築かれた時期については中世期と考えられる。54Gr以東においても同様の形状をもつ溝状遺構が検出されている。また、SD23はSD21と直交するように配置されていることなどから推察すると、建物の区画を示す溝あるいは堀や柵などとして機能していた可能性が強い。



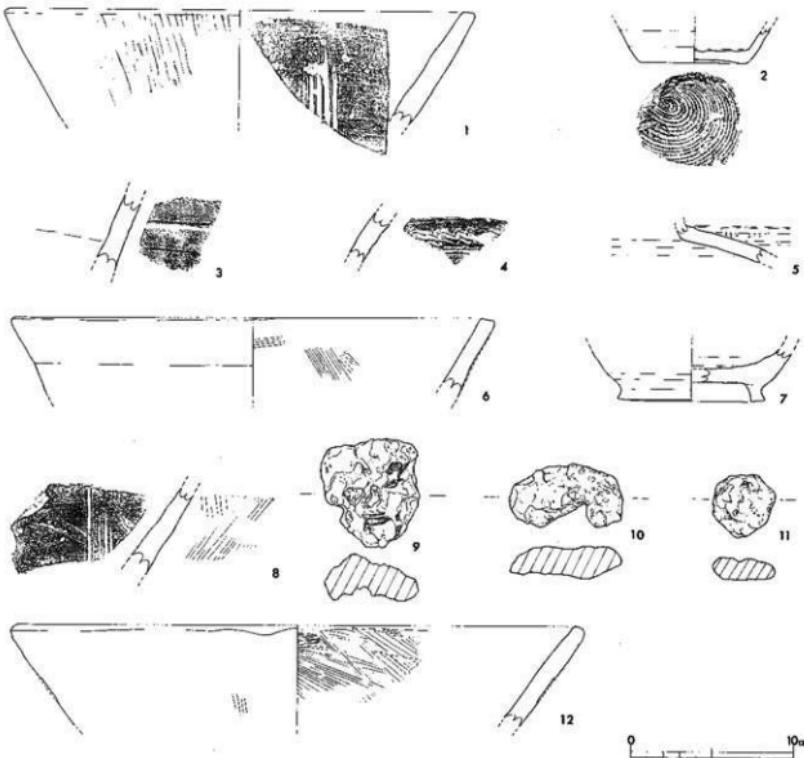
第63図 SD 25・26 実測図

SD 25 (第 63 図)

B・C52Gr の黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、基軸をほぼ南北方向に向けて伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、現状では長さ 7.80m 以上、幅約 1.30m を測る。なお、検出高は標高 8.18m である。

覆土には上層に褐灰色土、下層に黄褐色土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約 45 度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約 35cm を測る。なお、底面におけるレベルは北方に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物には、中世土師器を中心として須恵器小片などが出土している。これらの遺物から、遺構が築かれた時期については中世期と考えられる。機能としては、形状から水路などが想定される。



第 64 図 SD23 ~ SD26・SD28 出土遺物実測図

SD 26（第63図）

B52Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、SD25と並行するようにほぼ南北方向に基軸を向いて伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、現状では7.90m以上、幅84cm～1.14mを測る。なお、検出高は標高8.00mである。

覆土には上層から灰褐色粘質土、暗黄褐色砂層、灰褐色粘土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、西肩部から約45度の角度で落ちて一度平坦面を作り出し、そこからさらに落ちて狭い最深部は丸く作り出している。東肩部からは鋭角に落ちて最深部へと達し、深さは約46cmを測る。なお、底面のレベルは北方に向かって緩やかに傾斜している。

遺物は、中世土器を中心として須恵器や鉄滓なども出土している。これらの出土遺物から、遺構が築かれた時期については中世期と考えられる。機能としては、水路などが想定される。また、SD25やSD21とも関連をもつものと考えられ、鍛冶関連施設に伴う溝である可能性もある。

SD 28

C53Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南側は調査区外へと達しているが、南西一北東方向に基軸を向いて伸びている。なお、東側ではSD26と切合関係にあり、これよりも古い時期に築かれた遺構であることが明らかである。

遺物は少量で、土器窪鉢や須恵器が出土している。これらの遺物から遺構が築かれた時期について判断することは難しく、機能についても部分的な検出であることから不明である。

SD 23～SD 26・SD 28の出土遺物（第64図）

1は、土器窪鉢である。体部から口縁部にかけて大きく逆「ハ」の字状に立ち上がるもので、口縁端部は平坦におさめている。外面は縱方向のハケ、内面はナデと5本単位からなる擂目が認められる。13世紀頃に相当する資料であろう。SD23からの出土である。2は、SD24から出土した須恵器壊である。やや軟質で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。奈良時代以降の資料であろう。3は、須恵器甕の頸部付近の破片である。外面は1条の凹線の上位にクシ状工具によって波状文が施され、内面はナデによる調整が行われている。4は、外面は1条の凹線の上位に2本からなるクシ状工具によって粗雑な波状文が施されている。内面はナデによる調整が行われ、器壁は厚くなっている。5は、須恵器甕の頸部から胴部にかけての破片であろう。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。3～5は、いずれもSD25からの出土であり、古墳時代後期以降の資料であろう。6は、土器窪鉢である。体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に大きく開くものと考えられ、口縁端部は平坦におさめている。外面はナデ、内面上位は横方向、下位は斜め方向のハケによる調整が行われている。SD25からの出土で、13世紀頃に相当する資料であろう。

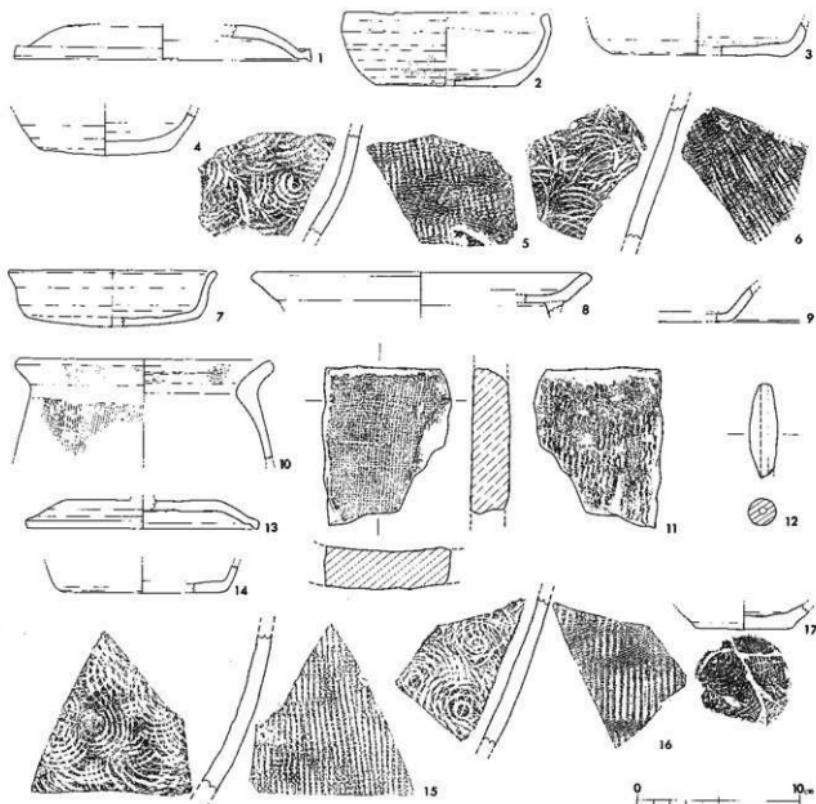
7～16は、SD26から出土したものである。7は、陶器の高台付焼で、高台部はやや外傾し、端部は平坦におさめている。内外面とも回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。8は、土器窪鉢である。外面は粗いハケ、内面はハケと5本単位からなる擂目が認められる。9～11は、鉄滓である。西に配置されるSD20・SD21などから多くの鉄滓が出土しており、調査区内でもこの周辺

に集中して検出されていることが注意される。分析の結果、精錬鍛冶津である可能性が強い遺物である。

12は、SD28から出土した土器器擂鉢である。体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁端部はやや雑に丸みを帯びておさめている。外面上位はナデ、下位は縦方向のハケ、内面は横・斜め方向のハケによる調整が行われている。13世紀頃に相当する資料であろう。

溝 1

C38Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、ほぼ南北方向に基軸を向けて伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、現状では長さ3.34m以上、幅約2.90mを測る。なお、検出高は標高7.95mである。



第65図 溝1～溝4出土遺物実測図

覆土には上層から暗褐灰色土、暗褐灰色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、西肩部から約45度の角度で落ちて一度広い平坦面を有し、そこからさらに落ちて最深部は丸く作り出している。東肩部からは約45度の角度で落ちて最深部へと達し、深さは約30cmを測る。なお、底面のレベルは南方に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物には、土師器壺や須恵器坏蓋、坏身などが出土している。これらは、奈良時代から平安時代初期頃に相当する資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能としては、規模や形状などから旧河道であった可能性が強い。

溝2

C38Gr～C39Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南南東一北北東方向に基軸に向けて伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、現状では長さ2.92m以上、幅1.60m～2.27mを測る。なお、検出高は標高7.95mである。

覆土には上層から暗褐灰色粘質土、暗褐灰色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約30cmを測る。なお、底面のレベルはほぼ一様である。

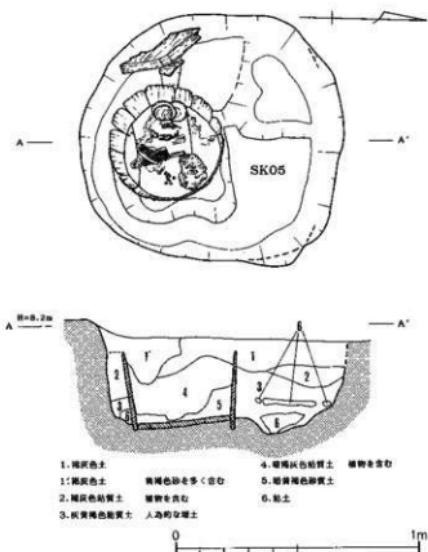
遺物は少量であるが朱塗りされた土師器が出土していることから、奈良時代から平安時代初期頃にかけて築かれた遺構と考えられる。機能としては、溝1と同様に旧河道であった可能性が強い。

溝3

C39Gr～C40Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、基軸をほぼ南北方向に向けて伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、現状では長さ2.90m以上、幅3.30m～3.50mを測る。なお、検出高は標高7.95mである。

覆土には上層から暗灰褐色土、黒褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約35cmを測る。なお、底面のレベルはほぼ一様である。

遺物は少量であるが朱塗りされた土師器などが出土していることから、奈良時代から平安時代初期頃にかけて築かれた遺構と考えられる。機能としては、規模



第66図 SK05実測図

や形状などから旧河道であった可能性が強い。

溝4

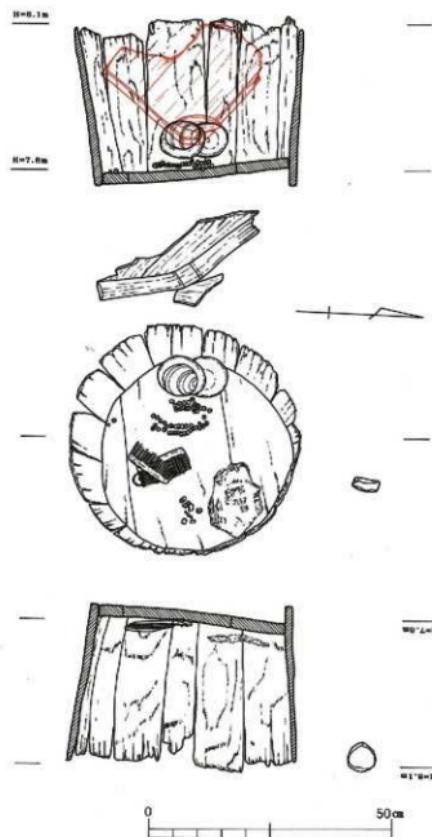
C40Gr～C41Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状構造で、南南西一北北東方向に基軸を向けて伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、現状では長さ3.10m以上、幅75cm～1.10mを測る。なお、検出高は標高8.04mである。

覆土には上層から褐灰色土、褐色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、西肩部からは鋭角に、東肩部からは約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約60cmを測る。なお、底面のレベルはほぼ一様である。

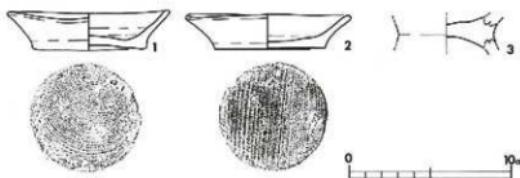
遺物は、回転糸切り痕の残る土器器小片が出土していることから、奈良時代以降に築かれた遺構と考えられるが、明確な時期については判断し難い。機能としては、水路あるいは建物を区画する溝などが想定される。

溝1～溝4の出土遺物（第65図）

1～6は、溝1から出土した須恵器である。1は、須恵器壺蓋である。端部は上下に拡張して平坦におさまる。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。天井に擬宝珠状のつまみを有するもので、8世紀後半以降の資料であろう。2は須恵器壺である。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は上方に向



第67図 SK05 遺物出土状況実測図



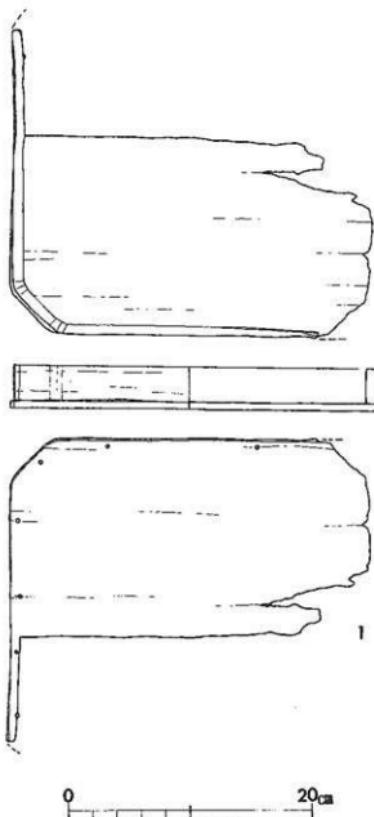
第68図 SK05 出土遺物実測図(1)

いて内側に肥厚し、丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。高廣編年IV-A期に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。3は須恵器坏で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されるものである。4も須恵器坏であるが雑な作りで、底部と体部には明瞭な境をもたないものである。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切り後、ナデによる調整が行われている。5・6は、須恵器壺の胴部である。5はやや軟質で、外面は格子状のタタキと一部にハケによる調整が行われている。内面は当て具による半円形の青海波文が認められる。6は外面がタタキ、内面は半円形の青海波文が認められる。以上のような須恵器は、若干の前後関係はあるものと考えられるが、およそ奈良時代頃に相当する資料と考えられる。

7~9は、溝1から出土している全面が赤色塗彩された土師器である。7は坏で、底部はやや丸みを帯びて体部にかけてはほぼ直立し、口縁端部は外反して丸くおさめている。8は高台が付く皿で、高台部はやや外傾するものと考えられる。底部から口縁部にかけては直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は丸くおさめている。9は無高台の坏で、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。以上のような土師器坏や皿は、奈良時代から平安時代初期頃に相当する資料と考えられる。10は、土師器壺である。器壁はやや厚く、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面はナデ、内面はナデとハケによる調整が行われている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。

11は、平瓦である。外面は繩目文状のタタキ、内面は布目筒による圧痕が認められる。12は、ほぼ完形の管状土錐である。径4mmの孔を穿ち、ナデによる調整が行われている。11・12は、溝1からの出土である。

13・14は、溝2から出土した須恵器である。13は坏蓋で、端部は下方に拡張し

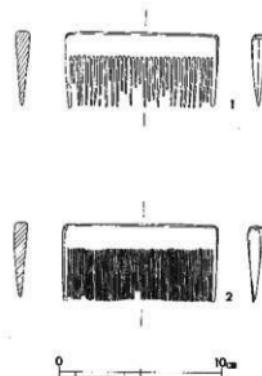


第69図 SKO5 出土遺物実測図(2)

て平坦におさめ、内面には沈線が施されている。外面天井部はヘラケズリ、その他は回転ナデによる調整が行われている。高広編年IV-B期に相当する資料と考えられ、8世紀末以降のものであろう。14はやや軟質な坏で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

15・16は、溝3から出土した須恵器壺の胸部である。15は、外面が格子状のタタキ、内面は當て具による円形の青海波文が認められる。16の外面はタタキと部分的にハケによる調整が行われている。内面には円形の青海波文が認められる。いずれも古墳時代後期以降の資料であろう。

17は、溝4から出土した土師器坏である。器壁は厚く、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。全体の器形は不明であるが、胎土や焼成から推察すれば、中世期の資料である可能性の強いものである。



第70図 SK05出土遺物実測図(3)

SK 05 (第66図・第67図)

C29Grの灰白色砂質土上面で検出した土坑状造構である。平面プランは、径約1.0mを測るほぼ円形状を呈している。なお、検出高は標高8.23mである。

覆土には、上層から褐灰色土、褐灰色粘質土、灰黄褐色粘質土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。このうち灰黄褐色粘質土は、木棺を固定するために人為的に埋められたものと考えられる。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約45cmを測る。

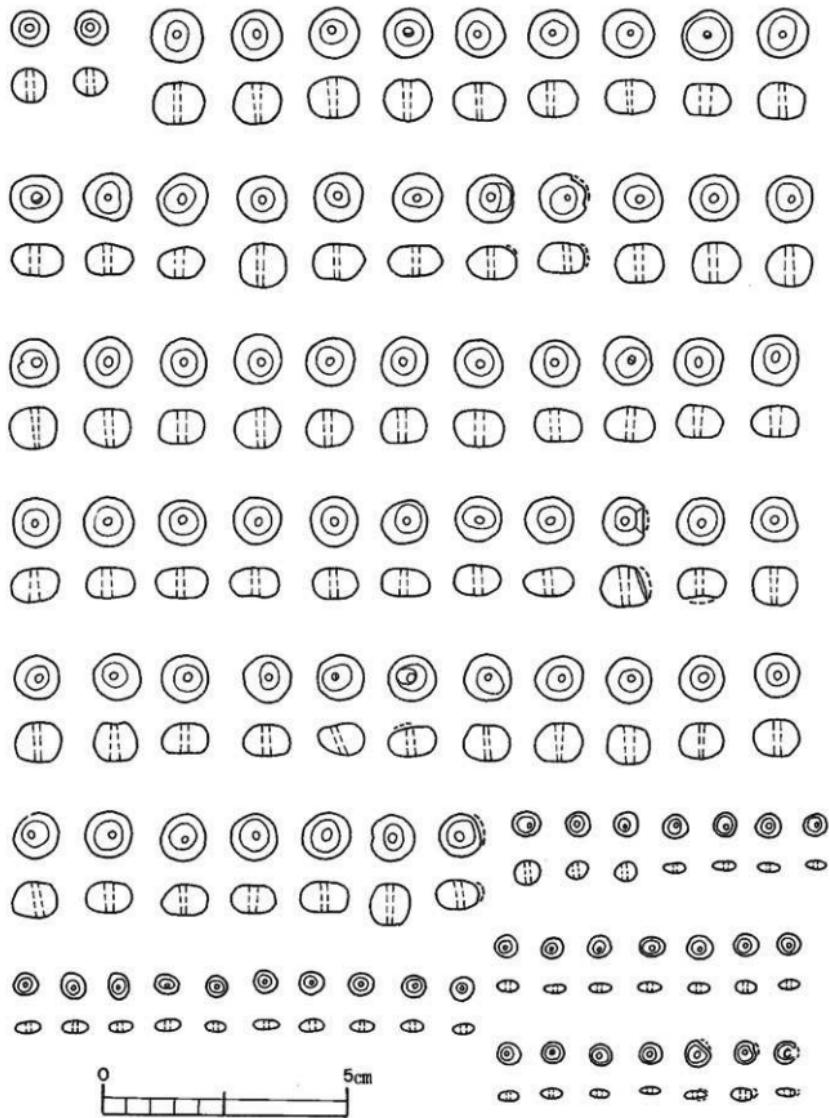
造構の南側に偏って据え置かれている木棺は、径約45cmを測る杉材を使用した組み合わせ式の桶で、深さは約30cmを測る。木棺内の覆土には暗褐灰色土、暗黄褐色砂質土が堆積しており、この覆土中には藁を多量に含んでいる。これは、木棺を据え置いた後に上から藁で覆ったものと考えられる。

遺物には、副葬品として土師器小皿、古銭、数珠玉、櫛などのほか、人骨や歯なども出土している。出土状況は木棺底面からの出土がほとんどで、土師器小皿が西側に重なるようにして2枚置かれ、中央部には櫛が2枚重なった状態、数珠玉がその間で検出され、人骨と歯は棺内南側から出土している。また、木棺外には造構底面から約20cm浮いた状態で折敷が1点検出されている。

以上のような出土状況から推察すれば、近世墓であることは明らかであり、埋葬状態は座葬で比較的小柄な人物が埋葬されたものと考えられる。なお近世墓は、市内では蔵小路西遺跡や井原遺跡などからも検出されている。

SK 05の出土遺物 (第68図～第71図)

第68図-1は、土師器小皿である。底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2も土師器小皿で、1



第71図 SK05出土遺物実測図(4)

よりもやや開きが大きく、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は静止系切りによって切り離されている。3は、土師器の足高高台付の环で、棺外の上層からの出土である。1・2については近世、3は11世紀後半以降の資料と考えられ、3は混入品であろう。

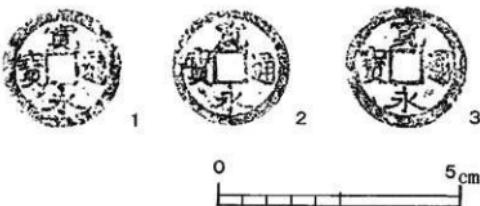
第69図-1は、折敷である。

欠損しているが、現状から推察すれば四隅が角張った八角形を呈するものと考えられ、推定幅30cmを測る。杉材を使用しており、7箇所に釘孔が認められる。棺外に浮いて1枚立てたような状態で出土していることから、埋葬の際に同時に納められたものであろう。

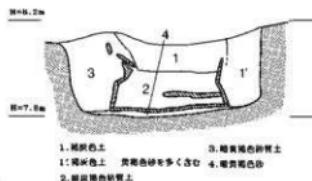
第70図-1・2は黄楊製の櫛である。1は幅9.5cm、長さ4.5cmを測り、一部欠損しているものの粗目で30本の歯を有している。髪梳き用であろう。2も櫛で、幅9.5cm、長さ4.5cmを測り、細目で71本の歯を有している。髪梳き用であろう。いずれも木棺底部から2枚が重なった状態で出土している。生前に被葬者が使用していたものと考えられることから、この棺内に埋葬されていた人物は女性と推察される。

第71図は、木棺底部から出土した数珠玉である。木製で径7mm～1.0cmを測るものが60点、径5mm～6mmの小形のものが31点出土している。断面の形状は球形または胴張りの楕円形で、ほぼ中央に径1mm程度の孔を穿っている。また、径1.0cm程度を測る水晶玉も2点出土しており、おそらく2つの数珠を副葬していたものと推察される。

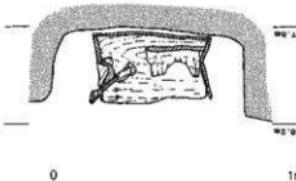
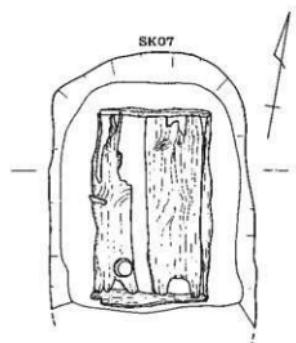
第72図-1～3は、古銭である。いずれも「寛永通寶」の新寛永と呼ばれるもので、径2.4cmを測り、裏面は無文である。



第72図 SK05出土物実測図(5)



1. 黄褐色土
1' 黄褐色土
2. 黄褐色砂を多く含む
3. 黄褐色砂質土
4. 黄褐色粘土



第73図 SK07実測図

SK 07 (第 73 図・第 74 図)

C30Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、基軸は南南東—北北西方向に向いている。南側は調査区外へと達しているために明らかではないが、現状から推察すれば長軸 1.50m、短軸 85cm の隅丸方形形状を呈すものと考えられる。なお、検出高は標高 8.19m である。

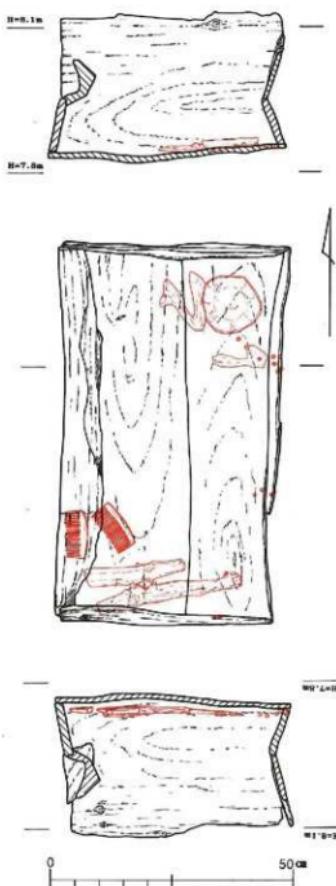
覆土には、上層から褐灰色土、暗黄褐色砂質土、最下層には暗黄褐色砂が人為的に敷かれ、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約 39cm を測る。

遺構底部の暗黄褐色砂が敷かれた上面には木棺が据え置かれている。箱式の木棺で、長軸 80cm、短軸 45cm、深さ約 30cm を測り、5 枚の杉板を使用して底板と側板とは木釘によって接合されている。また、内部で杉板が検出されているが、これは本来、蓋として機能していたものが内部に落ち込んだものと考えられる。

遺物の出土状況は、木棺底部南側に木製の櫛が 2 点置かれており、北側には数珠玉 66 点のほか頭蓋骨と屈曲した状態の腕骨が検出されている。また、木棺の蓋と考えられる木材の上と木棺の下面にそれぞれ 1 点ずつの小皿が出土している。これら人骨や副葬品の出土状況などから、SK05 と同様に近世墓で、頭位を北側に向けて屈葬した状態で葬られたものと考えられる。また、櫛や数珠が副葬されていることも SK05 と同様であり、被葬者は女性であった可能性が強い。

SK 07 の出土遺物 (第 75 図～第 77 図)

第 75 図-1 は、木棺の蓋上から出土した土師器小皿である。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、内外面とも回転ナデ、底部は静止糸切りによって切り離されている。2 は、木棺下面から出土した土師器小皿である。1 よりもやや大きく、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、内外面ともに回転ナデ、底部は静止糸切りによって切り離さ



第 74 図 SK 07 遺物出土状況実測図

れている。1・2は、成形とともに胎土や色調、焼成などが非常によく似ていることから、同じ粘土塊から同じ窯で焼成されたものと考えられる。3は、黄楊製の櫛である。幅9.8cm、長さ4.5cmを測り、粗目で30本の歯を有している。髪梳き用であろう。4も黄楊製の櫛で、幅10cm、長さ4.8cmを測る。細目で80本の歯を有しており、髪梳き用であろう。なお、3・4ともに塗彩された痕跡は認められない。

第76図は、木製の数珠玉である。66点が出土しているが、SK05から出土したものに比べると胴長で棗玉状のものが多いことが特徴である。径5mm～9mmを測り、径1mm程度の孔を穿っている。出土点数が多いことを考えると、2種類の数珠を副葬している可能性が強い。

SK 08 (第77図)

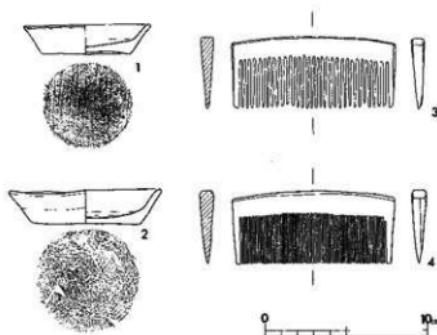
45Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、長軸3.95m、短軸0.95m～1.8mを測り、南側がすさまつたびつな形状を呈し、基軸は南南東—北北西方向を向いている。なお、検出高は標高8.18mである。

覆土には、上層から暗褐色灰色粘質土、暗灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土と堆積しており、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約15cmを測る。

遺物には小片のものが多いが、中世土師器のほか須恵器などが出土している。また、遺構の北側には10cm大の石が数点検出されている。これらの遺物からは、時期を断定することは難しいが、土師器の器形から推察すると、12世紀頃の遺構である可能性が強い。機能については不明であるが、覆土には粘質土が堆積し、規模が大きいことやSD20と直交する位置に配置されていることが注意される。

SK 08 の出土遺物 (第78図)

1・2は、土師器壊あるいは碗である。1は、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、底部と体部との境は明瞭である。2は、底部付近の小片であるが、内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。3は、体部から口縁部にかけての破片で、直線的に立ち上がり、口縁端部は内側に折り曲げて丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。4は底部と体部との境に段を有し、内湾しながら立ち上がっている。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。以上のような特徴をもつ土師器壊あるいは碗



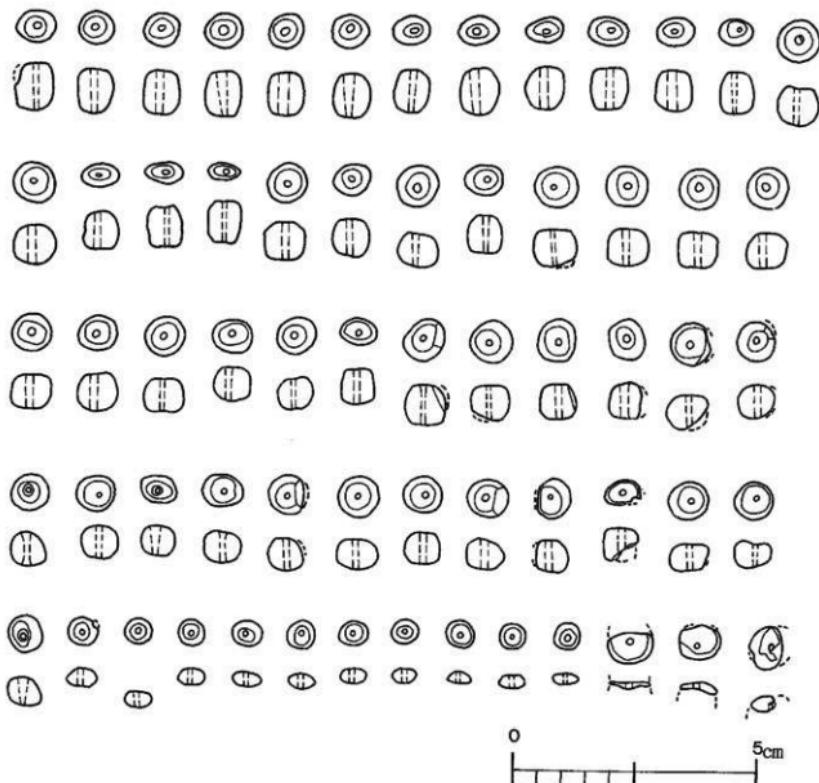
第75図 SK07出土遺物実測図(1)

は、12世紀頃に相当する資料と考えられ、1・4に類似したものは松江市黒田畠遺跡や三刀屋町京殿遺跡などからも出土している。

5は、須恵器坏の底部である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。奈良時代以降の資料であろう。6は、土師器鉢であろう。口縁部は内湾して端部は平坦におさめている。口縁端部の外面下位には3本の沈線と長方形のスタンプ文が巡らされている。奈良火鉢系の資料と考えられる。

SK 09 (第 79 図)

B45Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、北側に張り出し部を2ヶ所にもっているが、径約 80cm を測るほぼ円形状を呈している。



第 76 図 SK07 出土遺物実測図 (2)

また、南に位置する SK10 と切合関係にあり、SK10 よりも古い時期に築かれたことが明らかである。なお、検出高は標高 8.20m である。

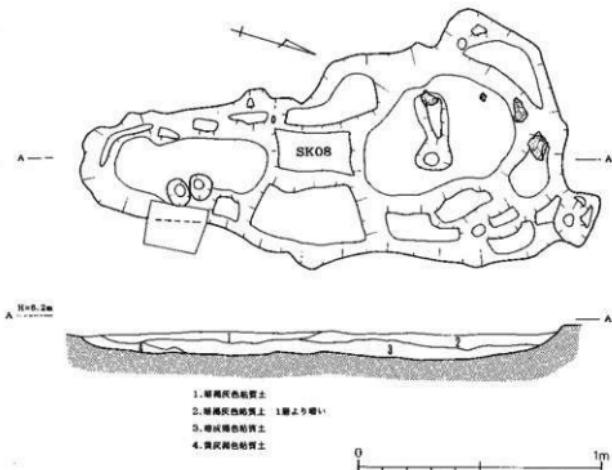
覆土には、全体に暗褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から比較的緩やかに落ちて底面はやや丸みを帯びて作り出しており、深さは約 42cm を測る。

遺物は小片のものが多いが、朱塗りの土師器が数点検出されている。これらの遺物から、遺構が築かれた時期は奈良時代から平安時代初期頃にかけてと考えられるが、機能については不明である。

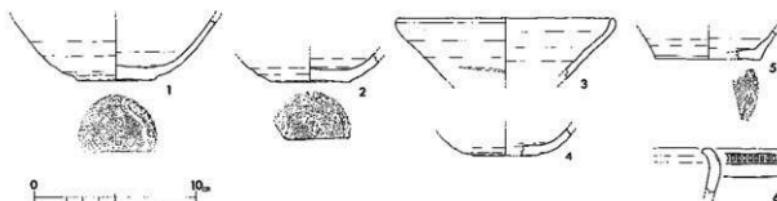
SK 10 (第 79 図)

45Gr の SK09 南側で検出した土坑状遺構である。平面プランは、南と南西部に張り出した部分を有しているが、径約 90cm を測る円形状を呈している。なお、検出高は標高 8.06m である。

覆土には、上層から黄褐色灰土、灰褐色粘質土、中層には暗褐色粘土、下層には茶褐色粘土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。このうち中層から下層にかけ



第 77 図 SK08 実測図



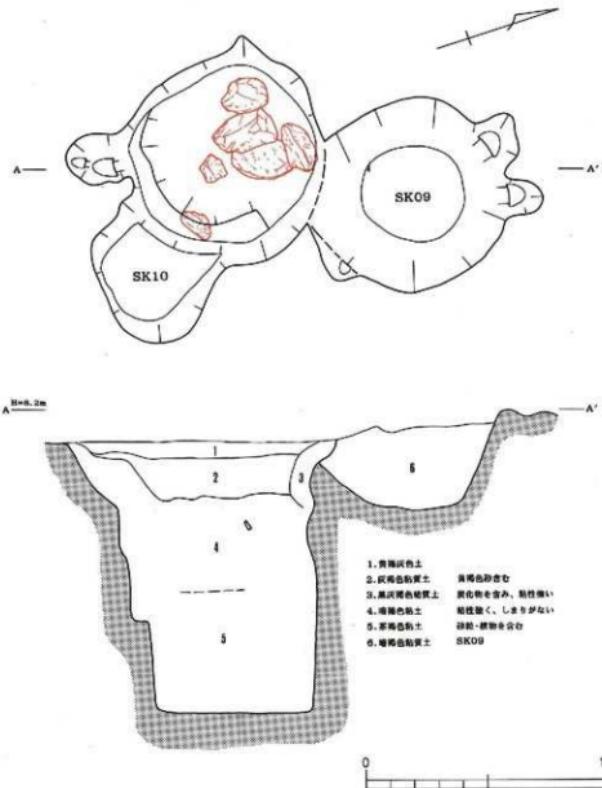
第 78 図 SK08 出土遺物実測図

では人頭大の石が6個検出されているとともに、腐食した植物が多く認められることが注意される。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は平坦に作り出しており、深さは約1.12mを測る。

遺物は少量ではあるが、土師器や須恵器のほか漆椀や木製品などが出土している。SK09との切合関係や出土遺物、他の遺構の配置状況から推察すれば、12～13世紀頃に築かれたものと考えられる。機能としては、形状や深さなどから素掘りの井戸と考えられ、中層から下層にかけて検出されている人頭大の石は、井戸の浄化あるいは埋め戻しの際に使用されたものであろう。

SK 10 の出土遺物（第80図）

1は、木製の漆椀である。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、内面見込みには鶴と見る



第79図 SK09・SK10 実測図

られる模様が朱で描かれている。2は加工した木製品で、片端は欠損しているが幅2.5cmを測り、断面は長方形形状を呈している。何かの部材として使用されたものであろう。これらの遺物からは明確な時期について判断することはできないが、漆椀は中世期のものである可能性が強い。

SK 11 (第 81 図)

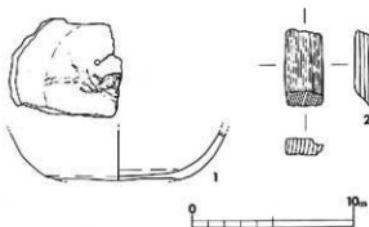
C45Gr の東端、黄褐色砂質土上面で検出した土坑状造構で、東側は一部調査区外へと達している。平面プランは、長軸 1.05m、短軸 90cm を測るややいびつな橢円形状を呈し、基軸は南東—北西方向に向いている。なお、検出高は標高 8.05m である。

覆土には、上層に暗灰褐色土、中層には暗黄褐色土、暗灰褐色粘砂土、下層には暗灰褐色粘土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。このうち中層には腐食した植物を多く含むとともに拳大から人頭大の石が多く認めらることが注意される。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は東側がやや低く傾斜があるもののほぼ平坦に作り出しており、深さは約 98cm を測る。

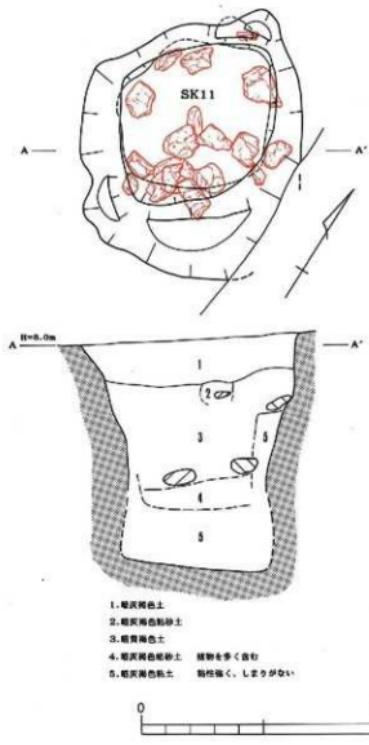
遺物は少量ではあるが、土師器、須恵器などが出土している。これらの遺物から時期的な判断をすることは難しいが、周辺に配置される遺構から推察すれば、中世期（12～13世紀）頃に築かれた遺構である可能性が強い。機能としては形状や深さなどから井戸と考えられ、中層で検出されている石は、井戸の浄化あるいは埋め戻しの際に使用されたものであろう。

SK 11 の出土遺物 (第 82 図)

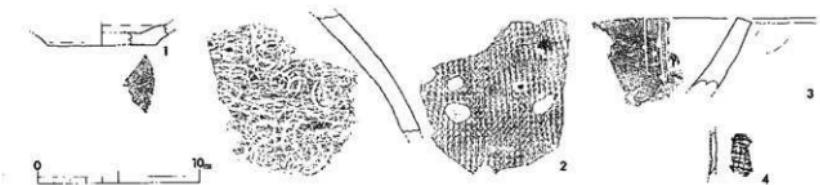
1は、土師器壺である。小片であり形状は把握できないが、内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2は、須恵器甕の胴部であろう。外面はタタキ、内面には当て具による青海波文が認められる。古墳時代後期頃に相当する資料であろう。3は、土師器擂鉢



第 80 図 SK10 出土遺物実測図



第 81 図 SK11 実測図



第82図 SK11出土遺物実測図

である。

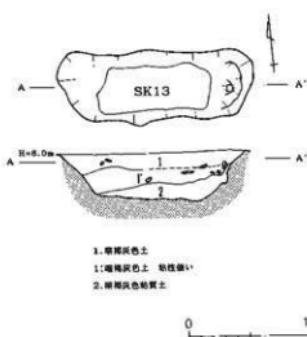
口縁端部は平坦におさめ、外面はナデ、内面にはやや間隔の広い擗目が認められる。13世紀頃に相当する資料と考えられ、市内では矢野遺跡や藤ヶ森遺跡などからも同様な擗鉢が出土している。5は、東播系須恵器の破片であろう。外面は格子状のタタキによる調整が行われている。12~13世紀頃にかけての資料と考えられ、市内では大井谷I遺跡などからも同様な須恵器が出土している。

SK13 (第83図)

49Gr~50Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、基軸は東西方向に向いている。平面プランは、長軸1.60m、短軸60cmを測る隅丸長方形状を呈している。なお、検出高は標高8.06mである。

覆土には、暗褐色土、暗褐灰色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約40cmを測る。なお、遺構東側には小さなステップ状のテラスを有している。

遺物は少量ではあるが、土師器や須恵器のほか鉄滓などが出土している。これらの遺物から時期的な判断をすることは難しいが、中世期に築かれた溝状遺構であるSD21と平行していることや周辺の遺構配置から推察すれば、中世期に築かれた遺構である可能性が高い。機能としては、形状や規模などから土壙墓などが想定される。



第83図 SK13実測図

SK13の出土遺物 (第84図)

1は土師器壺の底部で、厚みがあるのが特徴である。2



第84図 SK13出土遺物実測図

は、須恵器壺の底部と考えられ、内外面、底部ともナデによる調整が行われている。平安時代以降に相当する資料であろう。3

は、鉄滓である。調査区内からは 10 点余り検出されており、一部の分析結果から、精錬鍛冶滓と推定されている。調査区内では明確な鍛冶遺構は検出されてはいないが、周辺に鍛冶関連施設の存在を窺わせる資料である。

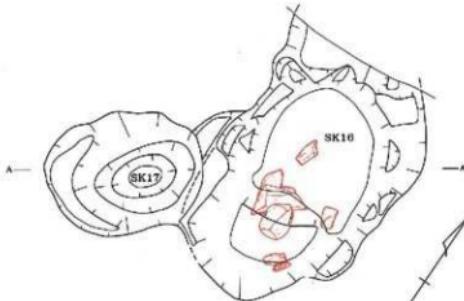
SK 16 (第 85 図)

B56Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、北側は調査区外へと達し、南西部の一部は新しい時期の遺構である SK17 によって切られている。

平面プランは、現状から推察すれば長軸 1.80m、短軸 1.05m を測る橢円形状を呈するものと考えられ、基軸は南北方向を向いている。なお、検出高は標高 8.18m である。

覆土には、上層から褐灰色土、暗褐灰色粘質土、暗褐灰色粘土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約 45 度の角度で掘り込み、中位からは鋭角に落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、深さは約 1.40m を測る。なお、遺構北側の中層から下層にかけては人頭大の石が数個検出されている。

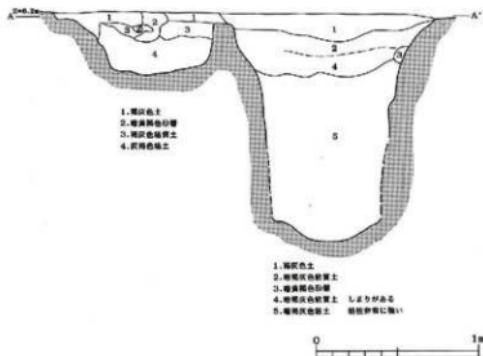
遺物には土師器や須恵器のほか、鉄釘などが出土している。土師器の中には 12 世紀後半から 13 世紀頃に相当する資料が出土していることから、遺構が築かれた時期も当該期であろう。機能としては、形状や深さなどから井戸と考えられる。また、SK10 や SK11 でも検出されている石は、井戸の浄化あるいは埋め戻しの際に使用されたものと考えられる。



SK 17 (第 85 図)

B50Gr の黄褐色砂質土上面で検出された土坑状遺構である。SK16 と切合関係にあり、SK16 よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。平面プランは、長軸 95cm、短軸 75cm を測る橢円形状を呈し、基軸は南西—北東方向に向いている。なお、検出高は標高 8.25m である。

覆土には、上層から褐灰色土、褐灰色粘質土、灰褐色粘土と堆積して基盤



第 85 図 SK16・SK17 実測図

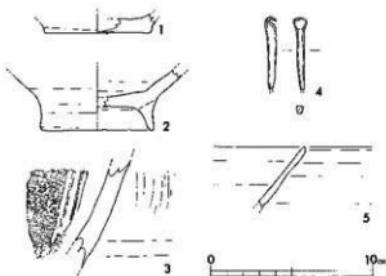
層である黄褐色砂質土へと達している。なお、上層には暗黄褐色砂層がブロック状に混入している。断面の形状は、西肩部からは約45度の角度で掘り込み、一旦ステップ状のテラスを有してさらに底面へと落ち、東肩部からは銳角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約40cmを測る。

遺物には中世期の土師器が出土していることから、SK16よりも新しく13世紀以降に築かれたものと考えられるが、機能については不明である。

SK 16・SK 17 の出土遺物（第86図）

1は、土師器坏の底部破片である。やや厚みがあり、底部は回転糸切りによって切り離されている。2は、土師器足高台付の坏である。底部からやや外形として伸びる長めの高台を有し、端部は丸くおさめている。外面は回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。このような足高高台をもつ坏は、11世紀後半以降の資料と考えられる。3は、土師器擂鉢である。外面はカキメによる調整が行われ、内面には幅3mm程度の擂目が認められる。13世紀頃に相当する資料であろう。4は、鉄釘である。釘頭を折り曲げた平頭と呼ばれるもので、近世半ば以前に常用されたもので、長さ4.5cmを測る。1～4は、SK16からの出土である。

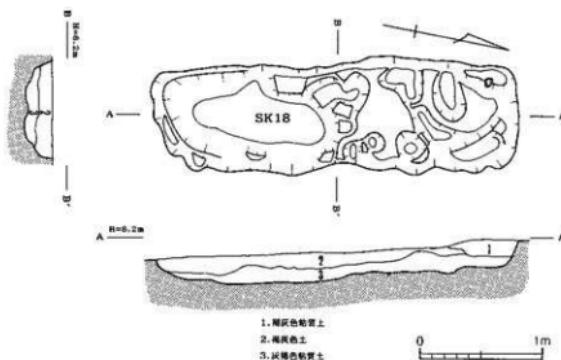
5は、SK17から出土した土師器坏である。体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に開くタイプのものと考えられ、外面ともにナデによる調整が行われている。12世紀以降の資料であろう。



第86図 SK16・SK17 出土遺物実測図

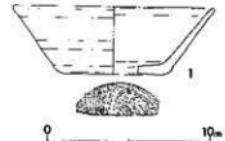
SK 18（第87図）

49Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、長軸3.10m、短軸90cmを測り、南南東—北北西方向に基軸をもつ長方形形状を呈している



第87図 SK18 実測図

第88図 SK18 出土遺物実測図



る。なお、検出高は標高 7.98m である。

覆土には、上層から褐灰色粘質土、褐灰色土、灰褐色粘質土と堆積しており、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、南肩部からは緩やかに、北肩部からは約 45 度の角度で落ちており、底面は北側で高く南側を低く作り出しており、深さは約 24cm を測る。

遺物には土師器や須恵器の小片が多く、これらの遺物からは時期的な判断は難しい。しかしながら、周辺に配置される遺構から考えると中世期に築かれた遺構である可能性が強い。機能については形状や規模から土壇墓などが想定される。

SK 18 の出土遺物（第 88 図）

1 は、須恵器壺である。底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に開き、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。やや軟質で、平安時代頃に相当する資料であろう。

SK 20（第 89 図）

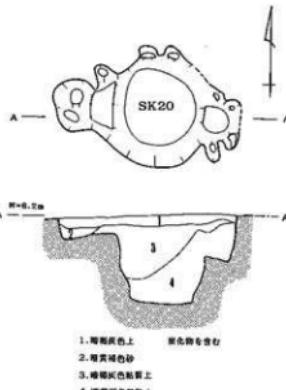
B48Gr の黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。東西にそれぞれ張り出した部分を有しているが、平面プランは長軸 1.50m、短軸 1.0m を測り、東西方向に基軸をもつたいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高 8.20m である。

覆土には、上層に炭化物を含む暗褐灰色土、中層に暗褐灰色粘質土、下層には暗黄褐色粘砂土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、東西肩部から鋭角に落ちてステップ状のテラスを有し、そこからさらに落ちて底面へと達しており、深さは約 64cm を測る。

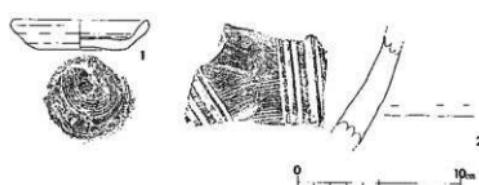
遺物には、土師器壺や擂鉢が出土している。これらの遺物は、12 世紀後半から 13 世紀頃の資料と考えられることから、当該期に築かれた遺構であろう。機能については不明であるが、建物跡の区画を示す溝と考えられる SD23 と接しており、何らかの関連をもつものと考えられる。

SK 20 の出土遺物（第 90 図）

1 は、土師器小皿である。器壁がやや厚く、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。11 世紀後半以降の資料であろう。2 は、土師器擂鉢である。器壁が



第 89 図 SK 20 実測図



第 90 図 SK 20 出土遺物実測図

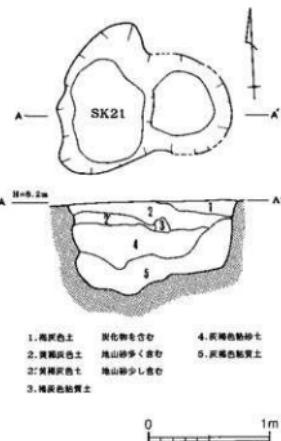
厚く、外面は縦方向のハケとナデ、内面は横・斜め方向のハケと5本単位からなる描目が認められる。13世紀頃に相当する資料であろう。

SK 21 (第91図)

48Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、長軸1.44m、短軸90cm～1.20mを測り、西側が南北に張り出したいびつな形状を呈している。また、中世期の溝状遺構であるSD23と切合関係にあり、これよりも古い時期の遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高8.20mである。

覆土には、上層に炭化物を含む褐灰色土や黄褐色土、中層には灰褐色粘砂土、下層には灰褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて東側では一度平坦面を有してさらに最深部へと落ちている。西側に偏る最深部は丸く作り出しており、深さは約76cmを測る。

遺物は少量であるが、朱塗りの土師器や須恵器が出土している。これらの遺物とともにSD23よりも古い時期の遺構であることから、奈良時代から平安時代初期頃にかけて築かれた可能性が強い。機能については井戸としてはやや浅く、不明である。



第91図 SK21実測図

SK 24 (第92図)

53Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。西側は中世期の溝状遺構であるSD26と切合関係にあり、SD26よりも新しい時期に築かれた遺構であることが明らかである。平面プランは、西側では長さ約3.8m、東側では長さ約2.0mを測り、西側の辺が長い台形状を呈している。なお、検出高は標高8.00mである。

覆土には、上層から褐灰色土、灰褐色粘質土、黄灰褐色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、西肩部からは鋭角に、東肩部からは約45度の角度で落ちている。底面は東側が低く、西側が高く作り出しており、最深部では54cmの深さを測る。

遺物は少量ではあるが、土師器、須恵器のほか布目瓦や製塩土器などが出土している。これらの遺物には混入品もあると思われるが、SD26との切合関係を考えると中世期に築かれた遺構である可能性が強い。機能については不明であるが、遺構の北側に3個人頭大の石が置かれていることが注意される。

SK 24 の出土遺物 (第93図)

1は、土師器壺である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2は、須恵器壺の口縁部あるいは胴部の破片と考えられ、外面には一条の沈線を挟んで2列以上の波状文

を巡らせ、内面はナデによる調整が行われている。古墳時代後期頃の資料であろう。3は、青磁碗である。口縁端部は外反し、丸くおさめている。内外面ともに淡緑灰色に施釉されている。15世紀以降の資料であろう。4は、製塙土器である。六連式と呼ばれる砲弾状を呈するもので、内外面ともに指頭圧痕が認められる。5は、古瓦である。平瓦で表面はナデとカキメ、裏面は成形型の細かな布目压痕が認められる。古瓦は第2次発掘調査の際にも数点検出されており、文献に記載されていない古代から中世期にかけての寺院が存在していたことを窺わせる資料である。

その他の土坑状遺構について

SD 18

C37Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構で、南東—北西方向に伸びている。南北ともに調査区外へと達しているが、検出長3.80m以上、幅70cm～90cmを測る。なお、検出高は標高8.18mである。

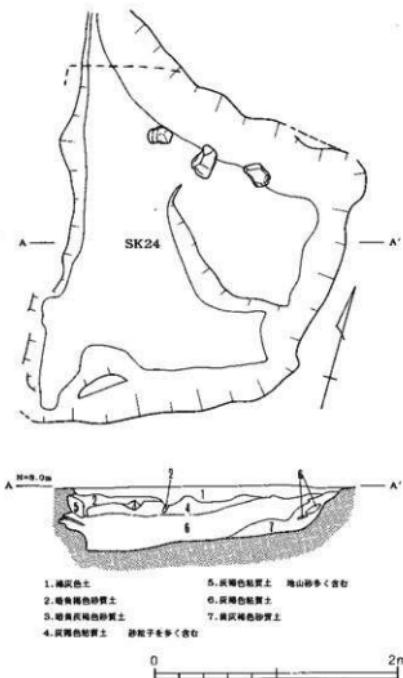
覆土には上層から茶褐色土、暗灰褐色土、暗褐色粘質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約20cmを測る。なお、底面におけるレベルは、北方に向かって低くなっていることが注意される。遺物は出土しておらず、遺構が築かれた時期や機能については不明である。

SK 04

C26Grの灰白色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、長軸1.90m、短軸1.75mを測り、南西—北東方向に基軸をもつ橢円形状を呈している。なお、検出高は標高7.95mである。

覆土には粘質土が一様に堆積している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、深さは約1.20mを測る。

遺物は中世土器や砥石などが出土しており、遺構が築かれた時期は中世期と考えられる。なお、SK04は平安時代後期から中世期にかけて築かれたと考えられるSD07と切合関係にあり、SD07よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。機能としては、形状や覆土などから井戸と考えられる。

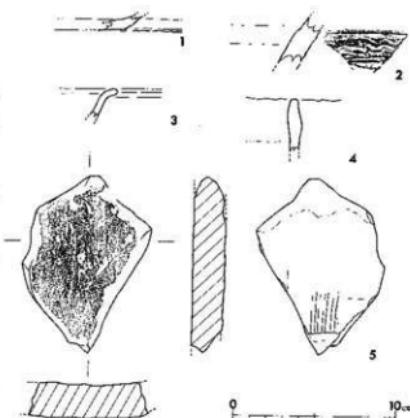


第92図 SK24実測図

SB 01

C23Gr ~ C24Gr の灰白色砂質土上面で検出した掘立柱建物跡である。調査区が限られているために規模は判断できないが、現状では 1 間 × 2 間、梁間約 1.70m、桁行約 4.0m を測り、ほぼ東西方向に基軸を向いている。また、妻側の 4 穴は直径約 1.0m を測るが、中央の 2 穴は直径 60cm ~ 70cm と規模が小さくなっている。

遺物は土師器や須恵器の小片のみであり、遺構が築かれた時期について判断することは難しい。しかし、SB01 は奈良時代から平安時代初期頃に築かれたと考えられる SD12 と切合関係にあり、これよりも古い時期の遺構であることが明らかである。



第 93 図 SK24 出土遺物実測図

柱穴列

調査区内では多数の柱穴と考えられるピット状遺構が検出されているが、SB01 以外には明確な建物跡となるような配置は認められない。しかしながら、溝 1 ~ 溝 5 の西側では SD15 ~ SD17 に並行して若干規模の大きいピット状遺構が列をなして検出されている。

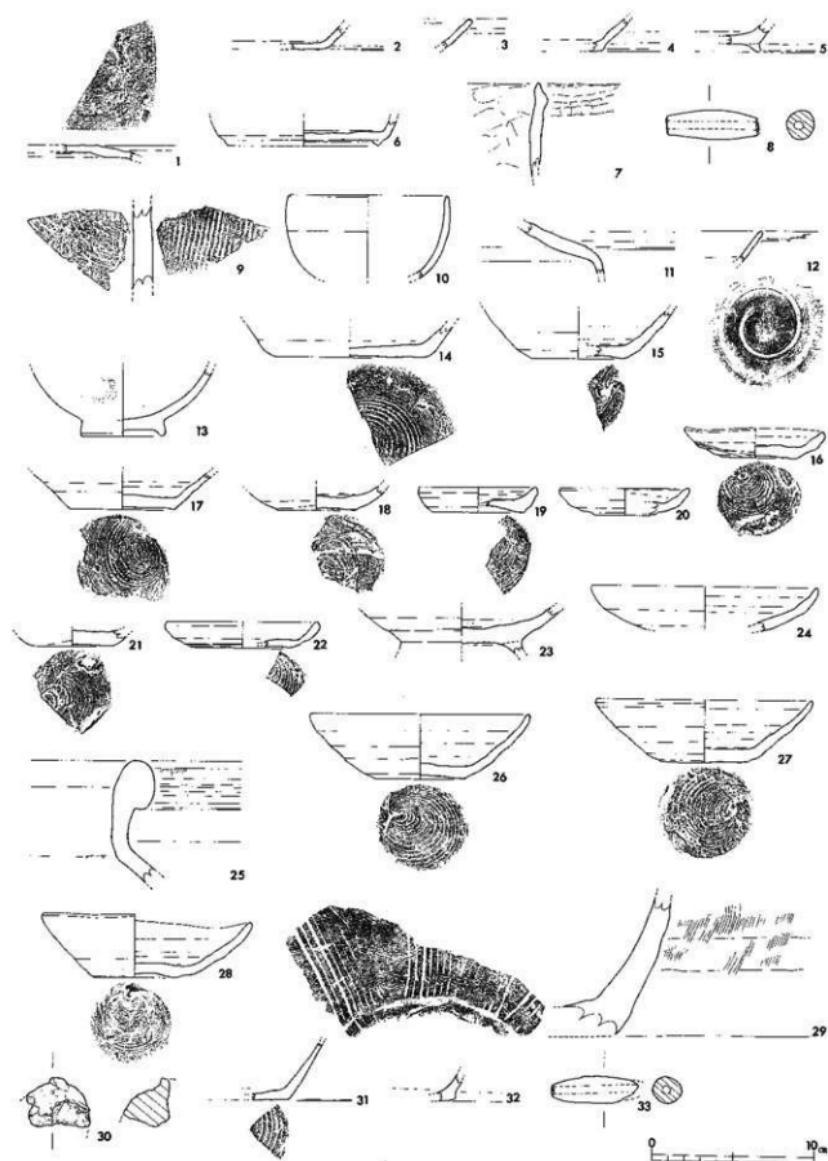
これらの溝は、建物跡の区画を示す溝と考えられることから、この柱穴列は建物跡の一部あるいは塀や柵などの機能をもつ可能性が強い。また、C34Gr の P03 では直径約 15cm の柱根が検出されている。

ピット内からの出土遺物（第 94 図・第 95 図）

第 94 図 1 は、須恵器壺蓋である。扁平でつまみを有するものと考えられ、外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。C24Gr の P01 からの出土で、8 世紀以降の資料であろう。2 は、土師器壺である。全面が赤色塗彩され、内外面は回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。C32Gr の P01 からの出土で、8 世紀以降の資料であろう。

3 ~ 5 は、C32Gr の P02 から出土した土師器壺である。3 は、口縁端部は丸くおさめている。4 は、底部から体部にかけて逆「ハ」の字状に開き、内外面は回転ナデによる調整が行われている。5 は、高台付の壺である。高台部は短く外傾し、端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。いずれも奈良時代以降の資料と考えられるものである。

6 は、須恵器高台付の壺である。高台部は短く直立し、端部は内傾して平坦におさめている。内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデによる調整が行われている。7 は、製塙器である。口縁端部は直立し、丸くおさめている。手捏ねで六連式と呼ばれる砲弾形を呈するので、内外面ともに指頭圧痕が顕著に認められている。6・7 は C33Gr の P01 からの出土で、6 の器形から平安時代初期



第94図 Pit 内出土遺物実測図 (1)

頃の資料と考えられる。

8は、C33GrのP02から出土した管状土錘である。完形で径5mmの孔を穿ち、全面がナデ調整されている。9は、C34GrのP05から出土した須恵器壺の胴部である。外面はタタキ、内面には筋状の当て具痕が認められる。10は、唐津焼の碗である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は直立して丸くおさめている。C35GrのP02からの出土で、全面が乳白色に施釉されている。

11は、須恵器長頸壺の頸部付近の破片であろう。外面には1条の沈線が施され、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。7世紀末以降の資料であろう。12は、灰釉陶器の碗あるいは皿と目されるものである。口縁端部は丸くおさめ、内外面ともに緑灰色に施釉されている。13は、木製の漆椀である。高台が付き、壠部はほぼ平坦におさめている。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、外面は黒漆、内面は赤漆塗りで仕上げられている。また、外面体部には赤漆により文様が描かれているのが認められる。11～13はC35GrのP03から出土しており、およそ奈良時代頃に相当する資料と考えられる。

14は、須恵器壺である。内外面は回転ナデ、内面底部はハケ、外面底部は回転糸切りによって切り離されている。C35GrのP04からの出土で、奈良時代以降の資料であろう。15は、土師器壺である。器壁はやや厚く、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。16は、土師器小皿である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、体部には稜を有して口縁端部は丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。15・16はB43GrのP01からの出土で、11世紀後半以降の資料であろう。

17～20は、B43GのP06から出土した土師器である。17・18は壺で、17は底部から体部にかけて逆「ハ」に字状に開き、18は内湾ぎみに立ち上がっている。いずれも内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。19・20は小皿で、19は底部から口縁部にかけて直線的に開き、20は内湾ぎみに立ち上がっている。いずれも内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。17～20は、11世紀後半以降の資料と考えられる。

21は、B43GrのP11から出土した土師器壺である。器壁は厚く、底部は回転糸切りによって切り離されている。中世期の資料であろう。22は、B44GrのP03から出土した土師器小皿である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。11世紀後半以降の資料であろう。23は、土師器高台付の壺である。高台部が外傾するもので、壺部は内外面ともナデによる調整が行われている。B44GrのP09からの出土で、奈良時代頃の資料であろう。24は、土師器皿であろうか。体部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。C44GrのP02からの出土で、奈良時代以降の資料であろう。25は、備前焼壺の口縁部である。大きな玉縁状の口縁部を有し、内外面ともナデによる調整が行われている。B45GrのP08からの出土で、中世末以降の資料であろう。

26～30は、B46GrのP01から出土した遺物である。このうち26～28は、土師器壺である。26は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回

転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。27は、底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に開き、口縁端部付近はやや内湾ぎみとなって丸くおさめている。外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。28は、器形や調整は27とほぼ同様である。このような土師器坏は、底部と体部との境が

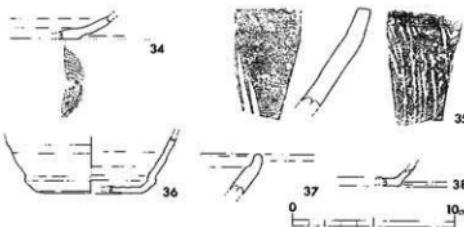
明瞭ではなく、底径に比して口径が大きくなるもので、12世紀後半から13世紀にかけての資料と考えられる。また、これらは胎土や焼成が酷似していることから、同じ粘土塊から同じ窯で焼成されたものと考えられる。松江市黒田畦遺跡や天満谷遺跡などから類似した坏が出土している。29は、土師器擂鉢である。底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、器壁が厚いものである。外面はハケとナデ、内面はハケと5本単位からなる描目が数ヶ所に認められる。30は、金属滓が付着した炉壁あるいは鐘の羽口と考えられるものである。29・30も遺構内から出土している土師器の器形から推察すれば、12世紀後半から13世紀代にかけてのものである可能性が強い。

31は、須恵器坏である。やや軟質で、底部から体部にかけて直線的に開く。外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。C46GrのP02からの出土で、奈良時代以降の資料であろう。33は、B47GrのP07から出土した管状土錘である。片端が欠損しているが、径4mmほどの孔を穿ち、ナデ調整により仕上げられている。

第95図-34は、C47GrのP03から出土した土師器坏である。底部から口縁部にかけて大きく開くタイプのもので、外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。このような坏は、第94図-26などと同じような器形をもつものと考えられ、12世紀後半から13世紀にかけてのものであろう。35は、B48GrのP07から出土した土師器擂鉢である。口縁端部は平坦におさめ、外面は縱方向の粗いハケ、内面はナデと描目が認められる。器形から推察すると、13世紀頃の資料であろう。36・37は、C48GrのP03から出土した土師器である。36は坏で、底部から体部にかけて直線的に開く。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。底部と体部との境が明瞭ではなく、体部下方に稜をなすのが特徴である。37は、壺であろうか。口縁端部はやや内傾して丸くおさめ、内側に凹面を作り出している。内外面ともナデによる調整が行われている。いずれも奈良時代頃の資料であろう。38は、B49GrのP02から出土した土師器坏である。内外面ともナデによる調整が行われている。

遺構内出土石器（第96図～第98図）

第96図-1は、平安時代の井戸であるSK04から出土した砥石である。欠損しているが4面に使用痕が認められ、石材には安山岩を用いている。2～5は、中世期の井戸であるSK11から出土した磨石である。楕円形状に加工され、石材には安山岩を用いている。3は、1面が平滑に加工されてい



第95図 Pit 内出土遺物実測図 (2)

る。2次的に焼成を受け、全面がススに覆われている。建物関連の部材である可能性もあり、石材には安山岩を用いている。4は砥石で2面が使用され、筋状の使用痕が認められる。石材には流紋岩を用いている。5も砥石で、現存する3面に使用痕が認められる。これらは井戸の浄化あるいは廃棄する際の祭祀として投棄されたものと考えられる。

6は、近世の井戸であるSK19から出土した砥石で、2面に使用痕が認められる。石材には珪長石を用いている。7・8は、SK24から出土したものである。7は、1面が滑らかに丸く加工され、建物関連の部材として利用された可能性がある。石材には安山岩を用いている。8は砥石で、2面が使用され、筋状の使用痕が認められる。9は、古墳時代終末期から奈良時代にかけての溝状遺構であるSD01から出土した砥石である。3面が使用され、石材には流紋岩が用いられている。

第97図-10は、磨製蛤刃石斧である。長さ17.5cmを測り、片端が鋭利に加工されている。中世の溝状遺構であるSD03からの出土で、混入品であろう。石材には変成岩を用いている。11は、中世の溝状遺構であるSD21から出土した砥石である。1面のみに使用した痕跡が認められ、石材には安山岩を用いている。12は、中世の溝状遺構であるSD23から出土した赤瑪瑙である。製品として加工した際の剥片と考えられる。13・14は、SD26から出土した用途不明の石製品である。砲弾状に丸みを帯びて片端を尖らせている。石材には花崗斑岩を用いている。14は、3面が平滑に加工されている。かなり大形であるが、砥石として利用された可能性もある。石材には花崗斑岩を用いている。15は、SD28から出土した用途不明の石製品である。大部分が欠損しているが、表面は滑らかに加工されており、一部に筋状の使用痕が認められる。何かの部材を砥石に転用した可能性もある。

16・17は、B43GrのP03から出土した砥石である。4面に使用痕が認められ、石材には安山岩を用いている。17は、用途不明であるが1面が平滑に仕上げられている。また、2次的な焼成を受けしており、石材には安山岩を用いている。18は、B44GrのP07から出土した砥石である。欠損しているが2面が使用され、そのうち1面には幅4mmの筋状の使用痕が認められる。石材には酸性凝灰岩が使用されている。19は、旧河道から出土した砥石である。ほぼ完形で4面が使用され、かなり磨り減っている。石材には流紋岩質極細粒凝灰岩を用いている。

遺構外の出土遺物（第99図～第101図）

第99図-1は、弥生土器壺の胴部破片である。外面はハケと2条のヘラ描直線文が施され、内面はナデによる調整が行われている。2は、弥生土器壺の胴部破片であろう。外面には5条以上のヘラ描直線文が施され、内面はナデによる調整が行われている。3・4は、弥生土器壺あるいは壺の底部である。3は器壁が厚く、全面がナデによる調整が行われている。4は器壁がやや薄く、外面は縱方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。以上のような弥生土器は、遺構内から出土している遺物から推察すれば、松本編年I-3～I-4様式に相当する資料と考えられ、弥生時代前期後葉頃のものである可能性が強い。

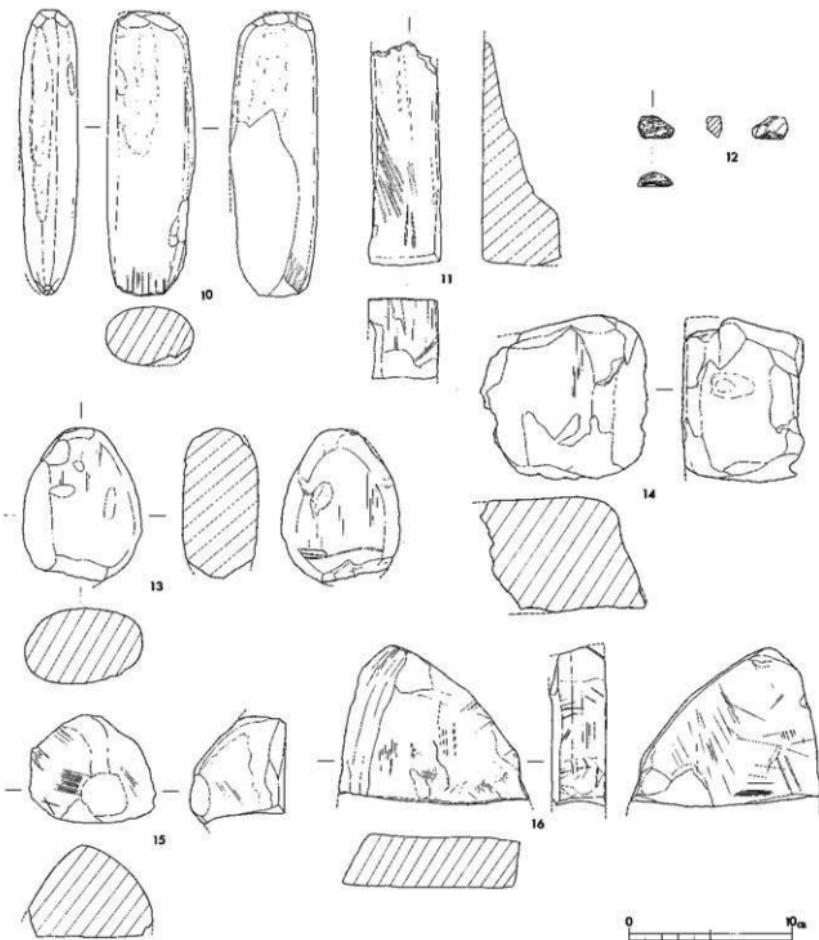
5は、須恵器壺蓋である。端部はやや下方に拡張して平坦におさめ、内外面は回転ナデによる調整が行われている。扁平で擬宝珠状のつまみを有するもので、7世紀末以降の資料であろう。6・7は、須恵器壺である。6は、底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は同

転糸切りによって切り離されている。7も調整は同様で、いずれも奈良時代以降の資料であろう。8は、須恵器の高台付坏である。焼成は不良で高台部は短く直立し、端部は平坦におさめている。9は、

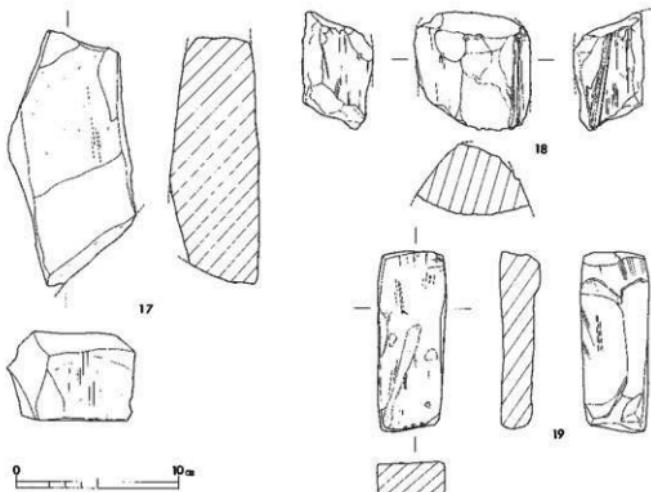


第96図 遺構内出土石器(1)

須恵器皿である。底部と体部には明瞭な境をもたず、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部はほぼ平坦におさめ、内外面は回転ナデによる調整が行われている。10は、須恵器高台付の坏である。高台部は短く直立し、端部はやや内傾して平坦におさめている。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。11は、高台付の須恵器皿である。底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。高台部はやや内傾して平坦におさめている。内外面は回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデによる調整が行われている。



第97図 遺構内出土石器(2)



第98図 遺構内出土石器（3）

12は、須恵器高台付の坏である。高台部はやや外傾し、端部は平坦におさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。以上のような須恵器坏や皿は、8世紀末以降の資料と考えられる。

13は、須恵器壺の口縁部であろう。口縁端部は丸くおさめ、外面にはクシ状工具によるハケのような沈線が粗く施されている。また、口縁端部の1cmほど下位には稜を作り出している。14は、須恵器直口壺の口縁部である。内外面とも回転ナデ、内面頸部下には指頭圧痕が認められる。いずれも7世紀末以降の資料であろう。15～17は、須恵器高坏である。15は、坏部は内外面とも回転ナデによる調整が行われ、脚部から坏部にかけて切れ込み状の透かしが2ヶ所に認められる。16も調整はほぼ同様で、切れ込み状の透かしが1ヶ所に認められる。17は焼成が不良で、透かしが入らないものである。以上のような高坏は、7世紀以降のものと考えられる。18は、須恵器壺の頭部付近の破片である。外面はタタキによる調整が行われ、部分的に磨り消している。内面頸部付近には指頭圧痕、下位は当て具による円形の青海波文が認められる。

19・20は、全面が赤色塗彩された土師器皿である。19は、底部と体部の境が明瞭ではない。底部から口縁部にかけて内済しながら立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。20は、底部から体部にかけて直線的に開いている。内外面は回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。いずれも8世紀中葉以降の資料と考えられ、20はやや後出するものであろう。

21～28は、土師器坏である。21は、底部から体部にかけて逆「ハ」の字状に開いている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。23もほぼ同様の調整が行われている。

いずれも焼成は不良で、近世の遺物である可能性が強いものである。24は厚みのある底部破片で、回転糸切りによって切り離されている。25は底径が小さく、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。26は、底部から体部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がっている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。27は底部に厚みがあり、体部にかけて直線的に大きく開くタイプである。内外面はナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、ヘラ状工具で押さえつけたような痕が認められる。28は、底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。以上のような土師器坏は小片で時期的判断をすることは難しいが、22・23を除けばおよそ中世期の資料と考えられる。

29～31は、土師器足高高台付の坏である。29は高台部がやや外傾し、端部は丸くおさめている。30は器壁が厚く、高台部はやや外傾して端部は丸くおさめている。坏部は内外面とも回転ナデによる調整が行われている。31は器壁が厚く、高台部が外傾するものである。以上のような足高高台でも土師器坏は、11世紀後半以降に出現する器形である。

33は、土師器小皿である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、底部と体部の境は明瞭ではない。小皿についても11世紀後半以降に出現する器形である。34～36は、小形の土師器坏である。いずれも内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

37は、台付の土師器坏である。台部外面はナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。台付の坏は、12世紀後半以降に出現する器形である。当遺跡からは台付の坏はこの1点のみの出土であり、遺跡としての中心は、台付の坏が出現する以前にあると考えられる。38は、土師器土鍋であろう。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は水平方向に突出してフラットな面を作り出している。外面は縦方向の粗いハケとナデ、内面は横方向のハケとナデによる調整が行われ、外面にはススが付着している。中世期の資料と考えられるものである。

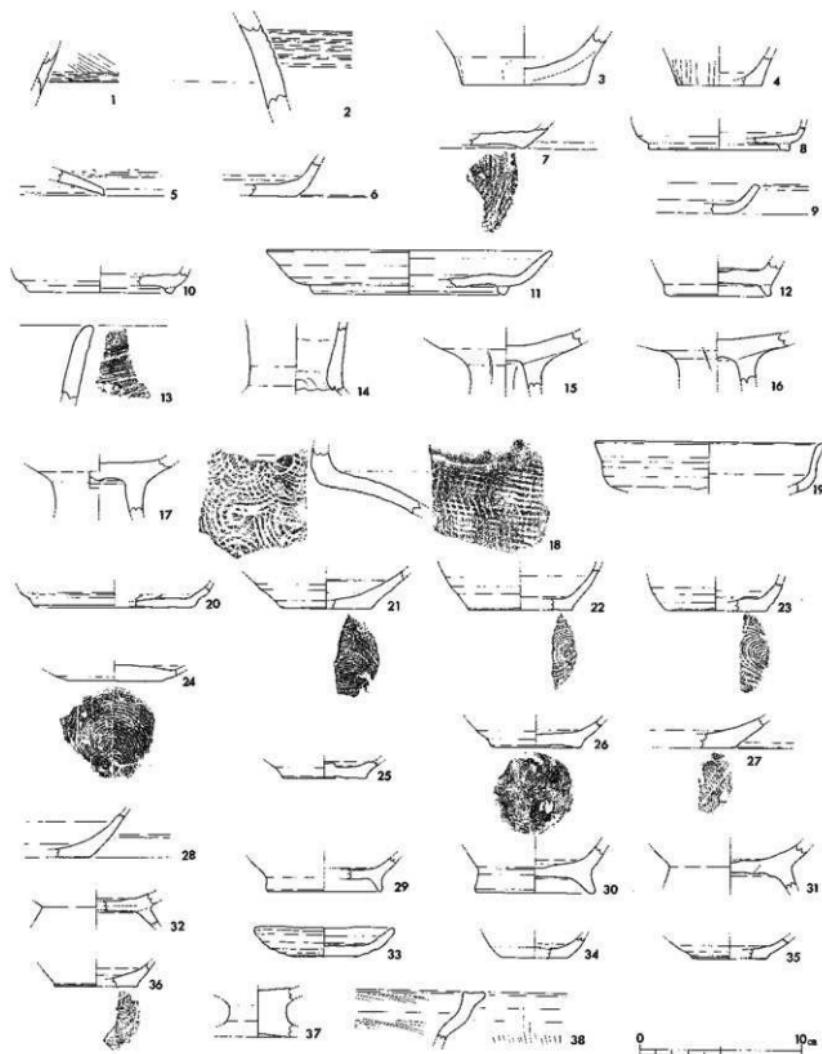
第100図—39～44は、土師器擂鉢である。39は、体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は平坦におさめている。外面上位はナデ、下位は縦方向のハケによる調整が行われている。内面上位はナデ、下位は斜め方向の細かいハケと擂目が認められる。40は胴部の破片で、外面が細かいハケ、内面はハケと間隔の異なる2種類の擂目が認められる。41は、底部から体部にかけて大きく開いている。外面はハケとナデ、内面は横方向のハケと4本単位からなる幅の広い擂目が2ヶ所に認められる。43・44は、底部と体部との境が明瞭ではなく、体部にかけて逆「ハ」の字状に開いている。外面体部と底部はナデ、内面には擂目が認められる。以上のような擂鉢は、13世紀代の資料と考えられるものである。

45は、土師器壺であろうか。外面はハケとナデ、内面はケズリによる調整が行われている。近世の遺物である可能性をもつものである。46は、東播系須恵器である。外面は格子状のタタキ、内面はハケによる調整が行われている。平安時代末期から鎌倉時代にかけての資料であろう。

47・48は、白磁碗である。47は口縁部に玉環状の突帯が付くもので、内外面とも淡灰白色に施釉されている。48は底部付近の破片で、高台部は短く直立し、端部は平坦におさめている。高台部を除いて乳白色に施釉されている。47のような白磁碗は、市内天神遺跡からも出土しており、11世紀

後半から 12 世紀代にかけてのものであろう。

49～51は、青磁碗である。49は、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。外面は幅の広い錦連弁文が施され、内外面とも淡緑色に施釉されている。50は口縁端部を丸くおさめ、内外面と



第99図 遺構外出土遺物実測図（1）

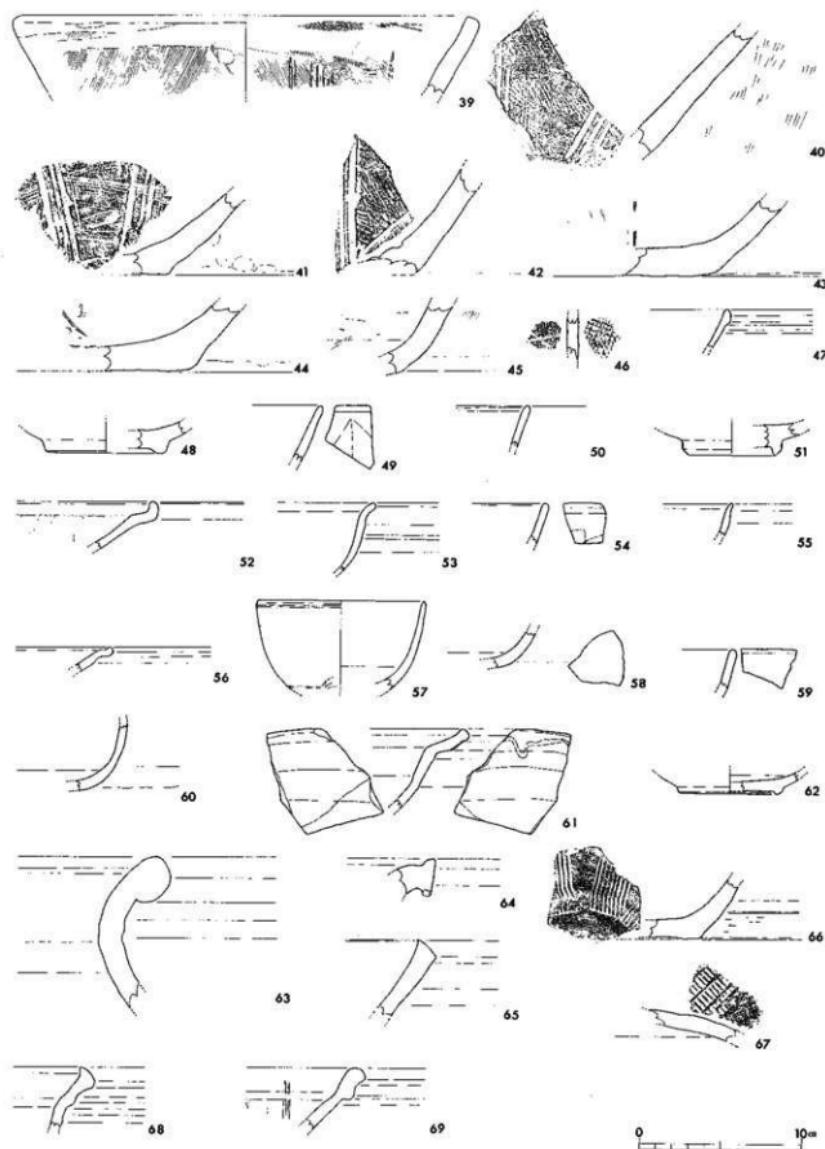
も淡緑灰色に施釉されている。51は高台部が直立し、端部は内傾して丸くおさめている。外面体部を除いて淡緑色に施釉されている。52は、青磁皿である。体部から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がり、口縁部は直立して口縁端部は太くなつて丸くおさめている。内面上位にはフラットな面を有してその下方には放射状の暗文が施され、内外面とも淡緑色に施釉されている。53は、青磁碗である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面とも緑灰色に施釉されている。以上のような青磁は、49-52については13世紀頃、その他のは15世紀頃の資料と考えられる。

54~59は磁器の碗あるいは皿である。54は口縁端部を丸くおさめ、内外面とも淡緑灰色に施釉されている。55は、口縁端部がやや外反して丸くおさめている。内外面とも淡青白色に施釉されている。56は皿で、口縁部は外反して口縁端部は内傾して丸くおさめている。内面口縁部には棱をなし、内外面とも淡緑灰色に施釉されている。57は、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面口縁部と底部付近には2重の直線、体部には文様が青灰色に染め付けられている。内外面ともに淡青白色に施釉されている。58は内湾しながら立ち上がる碗の体部で、外面には青灰色の文様が染め付けられている。内外面とも淡灰白色に施釉されている。59は、口縁端部を丸くおさめ、内外面とも灰色に施釉されている。外面口縁部には2条の直線とその間に斜格子文状の文様が染め付けられている。

60は、肥前系陶器の皿である。体部から口縁部にかけて大きく開き、口縁部は外傾してフラットな面を有し、口縁端部は平坦におさめている。内外面とも口縁部から体部上位にかけて淡緑灰色に施釉されている。61は、瀬戸焼の高台付碗である。高台は短く直立し、外面底部を除いて淡緑色に施釉されている。62は、瀬戸焼の皿である。高台部は短く直立し、外面底部を除いて淡緑灰色に施釉されている。

63は、備前焼の壺である。頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部には太い玉縁状の突帯が付いている。内外面ともナデによる調整が行われ、ごま塩状の釉薬がかかっている。64は、陶器鉢である。口縁端部は上下に拡張してフラットな面を有し、内外面ともナデによる調整が行われている。65も陶器鉢で、口縁部は逆「く」の字状に屈曲し、平坦面を作り出している。内外面ともナデによる調整が行われている。口縁部の特徴から、室町期（14世紀頃）の資料と考えられる。66は、陶器擂鉢である。内外面ともナデによる調整が行われ、内面には9本単位からなる擂目が放射状に施されている。67は、常滑系陶器であろう。壺の胴部と考えられ、外面はタタキ、内面はナデによる調整が行われている。68は、陶器鉢である。口縁部は逆「く」の字状に屈曲し、口縁端部に平坦面を作り出している。外面には突帯を2条以上巡らせ、内外面ともナデによる調整が行われている。69も陶器鉢で、口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。外面には突帯を1条貼り付け、内外面ともナデによる調整が行われている。

第101図-70・71は、瓦質土器の壺であろう。70は、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、外面の口縁部中位に膨らみを有して口縁端部は平坦におさめている。内外面はナデによる調整が行われている。71もほぼ同様の調整が行われており、同一個体である可能性が強いものである。72は、瓦質土器鉢である。体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は平坦におさ



第100図 遺構外出土遺物実測図(2)